

**KYOTO
EXPERIMENT 2011**
京都国際舞台芸術祭



**KYOTO EXPERIMENT
2011**

Kyoto International Performing Arts Festival

Kyoto International Performing Arts Festival 2011

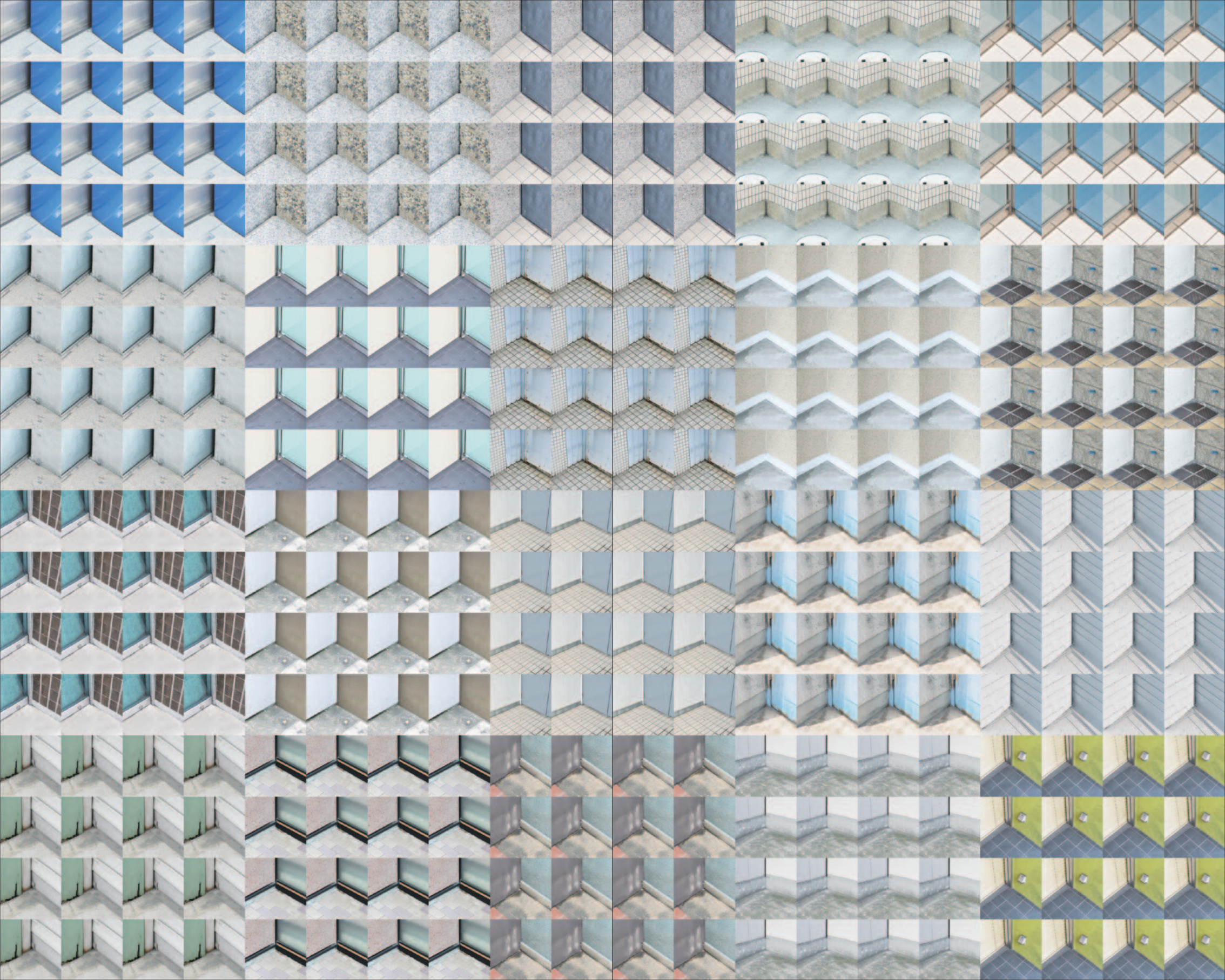
KYOTO EXPERIMENT





KYOTO EXPERIMENT 2011

京都国際舞台芸術祭 Kyoto International Performing Arts Festival



目次

- 06 ごあいさつ
- 08 知覚の旅 —未来のためのフェスティバル 橋本裕介
- 14 杉原邦生/KUNIO
- 18 ザカリー・オバザン
- 22 白井剛/京都芸術センター「演劇計画2009」
- 26 平田オリザ+石黒浩研究室(大阪大学&ATR石黒浩特別研究室)
- 30 マルセロ・エヴェリン/デモリション Inc.+ヌークレオ・ド・ディルソル
- 34 きたまり/KIKIKIKIKIKI
- 38 笠井叡
- 42 三浦基/地点
- 46 ヤニス・マンダフニス/ファブリス・マズリア
- 50 石橋義正(キュピキュピ)/京都創生座 番外編
- 54 高嶺格
- 60 KYOTO EXPERIMENT 2011 フリンジ “GroundP★”(グランupp)
- 64 KYOTO EXPERIMENT 2011 提携公演
- 66 KYOTO EXPERIMENT 2011 関連イベント
- 69 KYOTO EXPERIMENT 2011 提携事業
- 72 アクセス
- 74 カレンダー
- 76 チケット情報
- 78 クレジット

図版《gingham check [ver. KEX2011]》中居真理 (p2-3、p12-13、p58-59、p70-71、p82-83)

CONTENTS

- 06 GREETING
- 08 Journey of perception —Festival for the future Yusuke Hashimoto
- 14 Kunio Sugihara / KUNIO
- 18 Zachary Oberzan
- 22 Tsuyoshi Shirai / Kyoto Art Center “Theatre Project 2009”
- 26 Oriza Hirata + Hiroshi Ishiguro Laboratory (Osaka University and ATR Hiroshi Ishiguro Lab)
- 30 Marcelo Evelin/Demolition Inc. + Núcleo Do Dirceu
- 34 Kitamari / KIKIKIKIKIKI
- 38 Akira Kasai
- 42 Motoi Miura / Chiten
- 46 Ioannis Mandafounis/Fabrice Mazliah
- 50 Yoshimasa Ishibashi (Kyupi Kyupi) / Kyoto Soseiza Extra
- 54 Tadasu Takamine
- 60 KYOTO EXPERIMENT 2011 FRINGE “GroundP★”
- 64 KYOTO EXPERIMENT 2011 CO-PRESENTED PERFORMANCES
- 66 KYOTO EXPERIMENT 2011 RELATED EVENTS
- 69 KYOTO EXPERIMENT 2011 PARTNER PROJECTS
- 72 ACCESS
- 74 CALENDAR
- 76 TICKET INFORMATION
- 78 CREDIT

Images 《gingham check [ver. KEX2011]》Mari Nakai (p2-3、p12-13、p58-59、p70-71、p82-83)

ごあいさつ

大いなる驚き、衝撃、感動、再び！ 昨年、人々を圧倒した「KYOTO EXPERIMENT」が、魅力を充実させて今秋開催されます。

今回のテーマは「知覚の旅」。日本の芸能、舞台芸術の本源地である京都は、四季折々の自然の中で、研ぎ澄まされた感性を更に磨きながら豊穡な文化を育ててきました。その京都と国内外の優れた舞台人の感性が融合するとき、新たな知覚の世界への扉が開かれると大いに期待しています。

結びに、京都国際舞台芸術祭実行委員会の顧問、委員をはじめ関係者の皆様に深く感謝しますとともに、本芸術祭が全ての皆様にとって実り多いものとなりますよう祈念致します。

京都市長 門川大作

今年の「KYOTO EXPERIMENT」は、現代舞台芸術の2つの側面が際立つことになりました。身体性と視覚性です。

すばらしい身体性をもったアーティストがそろいました。笠井叡が神話的世界を身体に溶かしこみ、白井剛が静謐な日常に身体性を見つめます。KIKIKIKIKIKIもいきいきとした身体性を解き放つでしょう。他者との距離感をモチーフにフォーサイスの門下生が踊り、ブラジルのマルセロ・エヴェリンは価値の相剋の場としての身体をしめします。平田オリザのアンドロイド演劇は、身体性を逆照射することになりそうです。

視覚性では、映像&パフォーマンスユニット・キュピキュピが伝統芸能に生きる女性を題材にし、現代美術作家・高嶺格がブラジルに触発された作品をつくる予定です。ザカリー・オバザンは、ナマの上演と動画を錯綜させた話題作で来日します。演劇も視覚的にスタイリッシュな作品がならびます。地点が《かもめ》を緊密な和室空間と、近代建築の意匠をまとった劇場という異なる2つの空間で演じ、KUNIOは病んだ現代を隠喩化した大作《エンジェルス・イン・アメリカ》の完全上演に挑みます。

舞台芸術の2つの側面——存分におたのしみください。

KYOTO EXPERIMENT 実行委員長 太田耕人

GREETING

Great wonder, inspiration and sensation come again! Last year's overwhelmingly successful "KYOTO EXPERIMENT" will take place again this autumn with even greater appeal.

The theme this time is "Journey of Perception". In Kyoto, the source of Japanese performing arts, a rich culture has been cultivated based on astute sensibilities developed in a nature dominated by four seasons. I very much look forward to a door opening to a world of new perception when Kyoto's deep cultural legacy and the sensitivity of great artists, from Japan and abroad, come together.

Finally, I would sincerely like to thank all those whose contributions have made the festival a reality, and I hope the festival will be a rich experience for everyone.

Mayor of Kyoto Daisaku Kadokawa

"KYOTO EXPERIMENT 2011" accentuates two aspects of the performing arts: physicality and visuality.

The program includes artists with outstanding physicality. Akira Kasai crystallizes ancient Japanese myth within his body and Tsuyoshi Shirai explores the physicality of stillness. KIKIKIKIKIKI will, no doubt, lay out their vivid physicality on stage. Ioannis Mandafounis and Fabrice Mazliah, both former members of the Forsythe Company, examine the distance between others, while Marcelo Evelin from Brazil investigates the body as a battleground of opposing values. Oriza Hirata's Android-human Theater paradoxically irradiates our human physicality.

The video and performance group Kyupi Kyupi, known for their highly visual work, collaborates with female artists in the world of traditional performing arts. Contemporary visual artist, Tadasu Takamine is to create a piece inspired by Brazil, where he resided. In Zachary Oberzan's much talked-about work, video images and live performances are interwoven. Chiten's *The Seagull* by Chekhov, performed in two different spaces in Kyoto, an intimate tatami room and a theater as a modern work of architecture, and KUNIO's full production of *Angels in America*, a metaphoric work for today's diseased society, are also visually quite stylish.

I hope you find these qualities in the shows to be exciting.

KYOTO EXPERIMENT Executive Committee Chairman Kojin Ota

知覚の旅 ―未来のためのフェスティバル

2010年11月に誕生した、京都初の国際舞台芸術フェスティバル「KYOTO EXPERIMENT」、その第2回目を開催する。

フェスティバルを運営する実行委員会は、京都芸術センター(2000年設立)や京都造形芸術大学舞台芸術研究センター(2001年設立)などによって構成されている。これらが育んできた、この10年あまりの京都の舞台シーンは、現代日本の舞台芸術を牽引する人材を数多く輩出し、海外ネットワークも独自に構築してきた。言うなれば、このフェスティバルは、それらに関わってきた先達の成果を受け継ぐかたちで始まったのだ。無事に第2回目を迎えるにあたり、その果実を食いつぶすのではなく「これからの10年をどのようにするか?」を問い、次の世代に引き継げるフェスティバルに自分たちの手で作り上げなければならないと考えている。そのような未来のヴィジョンとともに、継続にあたって気持ちを新たにしている。

そこで敢えて問う。そもそもフェスティバルとは何か?

にぎわいを作ることだろうか。それとも舞台作品のマーケットを作ることだろうか。どちらも否定しないが、しかしそれだけでは充分でない。設立準備からそれを問い続け、第1回目が終わってから現在に至るまでも問い続けている。しかし、定まった答えのようなものが出たわけではない。なぜか? 「京都で行われる舞台芸術のフェスティバル」と言ったときに、少なくとも以下のふたつの意味が折り込まれているからだ。舞台芸術とは何かということと、京都とは何かということに対する応答である。このフェスティバルは「京都の実験」という意味を持つ通り、既にあるものを自明のこととはせず、いまこの社会に在る舞台芸術について考え、そしてフェスティバルが開催される京都という場について考えるプロセスそのものである。別の言い方をすれば、変化する状況の中で絶えず仮説をたてて検証する、〈運動〉のようなものと言って良いだろう。

その目的のために、まずこのフェスティバルでは“作品”を紹介するだけでなく、創り手である“アーティスト”そのものを紹介するべきだと考えている。アーティストがどのような社会と向き合い、どんな視点で眼差しているのか、そういった部分が浮かび上がってくる仕掛けを模索していきたい。

これはアーティストと可能な限り継続的に関わり、新たな作品を生み出し、世界に広がっていくことをサポートすることで実現させようとしている。特に京都を拠点に活動するアーティストとは、新作を共同製作することを中心に関わっていきたくて考えており、今年から新たに2組の京都の若手アーティストとも作業を開始する。

そしてこのフェスティバルでは、舞台芸術を演劇やダンスといった既存のジャンル分けに縛られることなく、造形・映像芸術との領域とも浸食しあいながら、新たな芸術表現が生まれていく気運を高めていきたい。

さて、今回の公式プログラムでは、舞踏、ヨーロッパのバレエ・テクニクをベースとした表現、そして既存のメソッドとは一線を画した日本の現代アーティストによる、さまざまなバックグラウンドを持つ身体(アンドロイドも含めて?)が集う。

これらはきっと観客の知覚を覚醒させることだろう。「知覚」とは、日常では少し馴染みのない言葉だが、あえてここでは「感覚」と言わずに「知覚」と表現したいと思う。「主体的」に考えることだけでなく、身体を“器”のようなものと捉え、思い切って全身の感覚器官を開いて作品と向き合ってみることを提案したいからだ。そうして、ある意味「受動的」に身体が受け取った情報に耳を澄まし目を凝らしてみる。そうしてはじめて浮かび上がって来るものがあるのではないだろうか。身体と〈ともに〉考える作品、そういったものが今回集っていると見える。

さらには、新作が次々と生み出される日本の現代舞台芸術界に、優れた作品の再上演の重要性も提示したい。舞台作品も絵画や音楽と同様に、社会の“財産”として多くの人の目に触れ、残されていく道を探る必要があるのではないだろうか。

また、未来のためのプロジェクトとして、ブラジルのフェスティバル「Panorama」と提携し、3年計画の国際共同製作を開始する。双方のアーティストが互いの土地に滞在し、それぞれ継続した創作プロジェクトをスタートさせる。互いの文化を写し鏡として、現在の社会状況を見つめ直すきっかけにしたい。

また、舞台芸術のジャンルだけに留まらず、未来の京都の文化を担う人材を育成するという視点で、このフェスティバルを成長させることを目指している。若者や地域の人々と協同して、舞台芸術が徐々に“日常”に浸透していくような仕掛けにはどのような可能性が考えられるのか。市民劇などをはじめ、他の地域でも既にさまざまな取り組みが実践されているが、ここでは若者や地域の人々が、創り手と一般の観客をつなぐ“媒介者”としてのあり方を探っていきたい。日常と地続きのリアルかつ新鮮な感覚で捉えた視点は、彼／彼女たちが情報の発信や上演の現場に携わる際に、効果的にその力を発揮するはずだ。それは私たちフェスティバルを運営する側にも影響を与え、フェスティバル自身を京都に根ざし成長させる上で、重要な示唆を与えることにもなるだろう。

最後に、今年3月以降の状況について触れておかなければならない。舞台芸術もまた社会の中にあり、さまざまな形で強い影響を受けている。これまで通りの活動を続けるのが困難な中、多くの関係者が「いまわたしたちがすべきことは何か」「芸術の意義は何か」と自問し、行動に移す者もいる。しかし多くは、言葉を失い明確なヴィジョンを持ち得ていないままだと思う。私もその一人である。

ただ私が一人の人間としてできることは、失われた命に哀悼の意を表し、傷ついた人々に思いを馳せながら、自分の仕事だと信じることを進めることだと考えている。その仕事であるこのフェスティバルでは、当初の計画どおりに実施出来る環境が今なお与えられていることに深く感謝し、「舞台芸術が社会と関わりながら(確かに)存在する」ためのプロジェクトを実施していく。

2011年7月28日

KYOTO EXPERIMENT プログラム・ディレクター 橋本裕介

Journey of perception — Festival for the future

In November, 2010, “KYOTO EXPERIMENT”, the first international performing arts festival in Kyoto, was launched. We are delighted to announce the opening of its second installment. The executive committee of “KYOTO EXPERIMENT” consists of Kyoto Art Center (founded in 2000), and Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design (founded in 2001) among others. These organizations have not only fostered Kyoto’s performing arts scene over the decade and introduced great talents and leading figures, but also developed international performing arts networks. And it is true that “KYOTO EXPERIMENT” is, in some ways, the fruit of the efforts of its predecessors. At the opening of the second festival, I am determined to broaden this festival to be something we can pass on to the next generation, certainly not disregard the gifts of its predecessors, but, trying to look forward to the next ten years.

What is a festival for performing arts for in the first place? Is it to create a bustle? Or to create a market for theater work? They both represent a certain perspective. But that is not enough. I have asked myself the same question ever since preparing for the festival’s first year, but I still don’t have a solid answer. It is probably because “a performing arts festival in Kyoto” takes at least the two following elements into account: a response to the definition of performing art, and a response to the definition of Kyoto. As the title: Kyoto Experiment implies, this festival doesn’t accept the status quo but it considers performing arts as an embodiment of a changing society. It is also a process of examining the nature of Kyoto. In other words, it is a “movement” in which we constantly make hypotheses, despite changing conditions, and try to verify them.

To achieve such purpose, I think the festival should introduce not only “work” itself but also the “artists” who created the work. We explore the way in which the artist’s face and gaze at our society becomes visible. This can be made possible by associating with artists on an ongoing basis and supporting them in the creation of new pieces that expose their work to an international audience. We especially focus on co-producing new work with Kyoto based companies and we are kicking off new projects with two young Kyoto artists this year. We also hope for dance to influence and be influenced by visual and film art without being fettered by existing genres, such as “theater” and “dance”, and to enhance the momentum for new creation.

This year, bodies with various backgrounds — Butoh, European ballet, Japanese contemporary dance and even androids— line up for the official program to shake up our perceptions. “Perception” may not be a day-to-day word and feel a little unfamiliar. But I would like to use “perception” here and not “sense”. Because what

we want to propose for the audience is not only to think intellectually but to feel his/her body as a vessel and give one’s full attention to the works by opening all the body’s senses. There maybe something that only comes to the fore once one tries to listen to what his/her body, in a way passively, picks up. We have selected works in which bodily sensation becomes part of one’s train of thought. In addition, we present a significant rerun of brilliant work in the midst of the trend of consistently creating new work in Japanese contemporary performing arts. Like painting or music composition, works of performing art also need to be exposed to more eyes and be conserved as a cultural asset. Further, in the collaboration with “Panorama”, the dance festival in Brazil, we’ve launched a three year co-production. Artists from each country will stay in the other country and each start an on-going project of new creation. We hope this gives us the opportunity to reflect on our time and society using a different culture as a mirror.

The festival also has a mission to foster talent, not merely in the performing arts, that will play an important role in Kyoto’s future. What are the possibilities for bringing together the youth as well as the local community and performing arts? There are several precedents. Community Theater, is one example, but we are seeking a way for the youth and the local people to become mediators between artists and audience. Their mundane/real and live perspective should offer an advantage in being involved with production process. Their presence shall influence our whole organization and give an important evocation, instilling and making “KYOTO EXPERIMENT” grow in Kyoto.

Lastly, I would like to mention the difficulty we’ve faced since the disaster that hit last March. Art, including performing arts, has an important place in society and it has been greatly influenced by the tragedy. While it is no longer possible for artists and other art professionals to work as they used to, many people question themselves “what it is we should be doing right now?”, “what is the role of art?”. Some act on their own understanding but most people are left speechless and can’t seem to have any clear vision. I am one of them. But I know one thing, that what I can do as a man is to do my job steadily while offering my condolences for the lost lives and thinking of the people in pain. This festival is my job and I am grateful that we are able to carry on as originally planned. With all due respect, we shall carry out this grand project for the performing arts while maintaining a deep connection to the society we belong to.

July 28, 2011

Yusuke Hashimoto

KYOTO EXPERIMENT Program Director



杉原邦生 / KUNIO

再創作+新作 / Re-Creation+New Creation

KUNIO 09 《エンジェルス・イン・アメリカ》

第1部「至福千年紀が近づく」第2部「ペレストロイカ」

@京都芸術センター 講堂

Kunio Sugihara / KUNIO

Angels in America Part 1: Millennium Approaches / Part 2: Perestroika

Kyoto Art Center Auditorium

9.23 [Fri] 【Part 1】12:00- 【Part 2】17:00-

9.24 [Sat] 【Part 1】12:00- 【Part 2】17:00-★

9.25 [Sun] 【Part 1】12:00- 【Part 2】17:00-

上演時間 / duration = Part 1: 210 min. Part 2: 240 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

※開場は開演の15分前です。※16歳未満入場不可。

※The theater opens 15 min. prior to the performance. ※Suitable for 16 years and older

いま最もハイテンションな若手演出家が仕掛けるのは、
上演時間7時間以上!? アメリカ演劇史を代表する大長編。

One of the most energetic young directors of today tries his hand
at one of the most legendarily lengthy productions in the history of American theater.
The total duration is more than 7h!!

こまばアゴラ劇場「サミット」ディレクター、KYOTO EXPERIMENT「FRINGE」コンセプトを務めるなど、演出家だけでなくオーガナイザーなどとしても八面六臂の活躍をみせる杉原邦生がついに自身のユニット「KUNIO」でKYOTO EXPERIMENTに初登場。

これまで「KUNIO」では、《椅子》(2008/ウージェーヌ・イヨネスコ)、《百三十二番地の貸家/犬は鎖に繋ぐべからず》(2008/岸田國士)、《迷路》(2009/フェルナンド・アラバール)など古今東西のテキストと格闘してきた。

そして今回は、トニー賞やピューリッツァー賞に輝き、ロンドンのナショナル・シアターが「二十世紀最も偉大な戯曲10本」のひとつにも選んだ、トニー・クシュナーの傑作戯曲《エンジェルス・イン・アメリカ》。京都芸術センター舞台芸術賞2009佳作を受賞した第1部「至福千年紀が近づく」の再創作とともに、第2部「ペレストロイカ」の2本立てで連続上演に挑む! 上演時間が合計7時間を超えるアメリカ演劇史を代表する大作が、いまだのようにたち現れるのか?

作: トニー・クシュナー / 演出・美術: 杉原邦生 / 翻訳: 吉田美枝 / 出演: 田中遊、澤村喜一郎(ニットキャップシアター)、坂原わかこ、田中佑弥(中野成樹+フランケンズ)、松田卓三(尼崎ロマンポル)、池浦さだ夢(男肉 du Soleil)、四宮章吾、森田真和(尼崎ロマンポル) / 舞台監督: 西田聖 / 照明: 魚森理恵 / 音響: 齋藤学 / 映像: ヨシダホーセー / 衣装: 植田昇明 / 美術部: 楠海緒、松本ゆい / 票券: 安部祥子(righteye) / 演出助手: ミツ井秋 / 制作: 土屋和歌子 / 製作: KUNIO / 共同製作: KYOTO EXPERIMENT(第2部) / 助成: 芸術文化振興基金(第1部) / 京都芸術センター制作支援事業 / 共催: KYOTO EXPERIMENT(第1部) / 主催: KUNIO(第1部)、KYOTO EXPERIMENT(第2部)

The multitalented Kunio Sugihara, known as the executive director of "Summit" at Komaba Agora Theater and concept planner of "FRINGE" at KYOTO EXPERIMENT, finally makes his first appearance with his own company "KUNIO" at KYOTO EXPERIMENT 2011. With the company, he has wrestled with texts from all ages and cultures. Examples include *The Chairs* (2008 / Eugene Ionesco), *Rent House at 132 / A dog must not be chained* (2008 / Kunio Kishida) and *Labyrinthe* (2009 / Fernando Arrabal). And this time, he attempts *Angels in America* by Tony Kushner, the masterpiece that won a Tony Award and the Pulitzer Prize, in addition to being chosen as one of "the ten greatest theater pieces of the 20th century" by London's National Theater. The production includes a re-creation of part 1: *Millennium Approaches* that won honorable mention at Kyoto Art Center Performing Arts Award 2009 and part 2: *Perestroika*. How would that 7 hour long masterpiece and hallmark of American theater history, be represented today?

Text: Tony Kushner / Direction, Stage Design: Kunio Sugihara / Translation: Mie Yoshida / Cast: Yu Tanaka, Kiichiro Sawamura (Knit Cap Theater), Wakako Sakahara, Yuya Tanaka (Shigeki Nakano+Frankens), Takuzo Matsuda (Amagasaki roman porno), Sadayume Ikeura (Oniku du Soleil), Shogo Shinomiya, Masakazu Morita (Amagasaki roman porno) / Stage Manager: Hijiri Nishida / Lighting: Rie Uomori / Sound: Manabu Saito / Video: Hoshi Yoshida / Costume: Nobuaki Ueda / Set Design Team: Mio Kusunoki, Yui Matsumoto / Ticketing: Shoko Abe (righteye) / Assistant Director: Aki Mitsui / Production Coordinator: Wakako Tsuchiya / Produced by KUNIO / Co-Produced by KYOTO EXPERIMENT (Part 2) / Supported by Japan Arts Fund (Part 1) / Kyoto Art Center "Artist in Studios" Program / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT (Part 1) / Presented by KUNIO (Part 1), KYOTO EXPERIMENT (Part 2)



杉原邦生 / KUNIO

演出家、舞台美術家。1982年東京都出身。神奈川県茅ヶ崎市育ち。EXILEファンクラブ“EX FAMILY”会員。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科第2期卒業生。同学科在籍中より、演出・舞台美術を中心に活動。特定の団体に縛られず、さまざまなユニット、プロジェクトでの演出活動を行っている。人を喰ったような生意気さとポップなバランス感覚を兼ね備えた演出が特長。2003年6月teuto vol.2《アドア》で初演出。2004年、自身が様々な作品を演出する場として、プロデュース公演カンパニー「KUNIO」を立ち上げる。これまでに2004年6月KUNIO 01《ペリカン家の人々》(作：ラディゲ)、2006年12月KUNIO 02《ニッポン・ウォーズ》(作：川村毅)などを上演。2010年9月には、初めて自身が構成から手掛けた新作公演KUNIO 07《文化祭》が好評を得た。2008年、伊丹市立演劇ホールAI・HALLとの共同製作事業“Take a chance project”アーティストに選出され、同年2月KUNIO 03《椅子》(作：ウージェーヌ・イヨネスコ)、2009年1月KUNIO 05《迷路》(作：フェルナンド・アラバル)、2011年1月M☆3《こいのいたみ～come on! ITAMI～》を上演した。歌舞伎演目上演の新たなカタチを模索するカンパニー「木ノ下歌舞伎」には、2006年5月《yotsuya-kaidan》(作：鶴屋南北)の演出をきっかけに企画にも参加。これまでに4作品を演出。そのほか主な演出作品に、2009年4-5月キレなかった14才♥りたーんず《14歳の国》(作：宮沢章夫)、2009年11月teutoダンス公演《ソーグー》、2010年5月「木ノ下歌舞伎」《勸進帳》など。また、こまばアゴラ劇場が主催する舞台芸術フェスティバル「サミット」ディレクターに「冬のサミット2008」より2年間就任、2010年10-11月KYOTO EXPERIMENTフリンジ“HAPPLAY♥”のコンセプトを務めるなど、持ち前の“お祭好き”精神で活動の幅を広げている。2009年9月KUNIO 06《エンジェルス・イン・アメリカ》第1部「至福千年紀が近づく」で「京都芸術センター舞台芸術賞2009」佳作受賞。



KUNIO 06 《エンジェルス・イン・アメリカ》第1部「至福千年紀が近づく」/ KUNIO 06 *Angels in America Part 1: Millennium Approaches* (2009) photo: Toshihiro Shimizu

2011

KUNIO 08 《椅子》
(作：ウージェーヌ・イヨネスコ / 演出：杉原邦生)
こまばアゴラ劇場(東京)
うりんこ劇場(愛知)

2010

KUNIO 07 《文化祭》
(構成・演出：杉原邦生)
こまばアゴラ劇場(東京)

2009

KUNIO 06 《エンジェルス・イン・アメリカ》
第1部「至福千年紀が近づく」
(作：トニー・クシュナー / 演出：杉原邦生)
京都芸術センター フリースペース(京都)

KUNIO 05 《迷路》
(作：フェルナンド・アラバル / 演出：杉原邦生)
AI・HALL(兵庫)

2006

KUNIO 02 《ニッポン・ウォーズ》
(作：川村毅 / 演出：杉原邦生)
京都芸術劇場 春秋座(京都)

2004

KUNIO 01 《ペリカン家の人々》
(作：ラディゲ / 演出：杉原邦生)
アトリエ劇研(京都)

Kunio Sugihara / KUNIO

Director, Stage Designer
Born in Tokyo in 1982, Sugihara grew up in Chigasaki, Kanagawa.
A member of EXILE's Fan Club "EX FAMILY".
Graduated from the department of performing arts at Kyoto University of Art and Design, Sugihara started his career as stage director and stage designer while he was a student. Without being part of any particular company, he has directed a wide range of projects. His work is known to keep a fine balance of sassiness and pop-ness.
2003 Jun: Debuted with "teuto" vol.2 *Adore*
2004: Founded own company "KUNIO" that allowed him to carry out various projects.
2004 Jun: KUNIO 01 *The Pelicans* (Text : Raymond Radiguet)
2006 May: *yotsuya-kaidan* (Text : Nanboku Tsuruya) by "KINOSHITA・KABUKI"
*KINOSHITA・KABUKI is a company that explores new interpretations of works from the traditional Kabuki repertoire. Sugihara has directed 3 more works for them since *yotsuya-kaidan*.
2006 Dec: KUNIO 02 *NIPPON WARS* (Text : Takeshi Kawamura)
2008: Chosen for AI HALL's co-produced project "Take a chance project".
2008 Feb: KUNIO 03 *The Chairs* (Text : Eugene Ionesco)
2009 Jan: KUNIO 05 *Labyrinth* (Text : Fernando Arrabal)
2009 Apr: "A 14-year-old who doesn't snap ♥ returns" *A country of 14 year-old* (Text : Akio Miyazawa)
2009 Sep: KUNIO 06 *Angels in America Part 1: Millennium Approaches* won honorable mention at Kyoto Art Center Performing Arts Award 2009
2009 Nov: "teuto" dance performance *So-Gu*
2010 May: "KINOSHITA・KABUKI" *Kanjincho*
2010 Sep: KUNIO 07 *CULTURAL FESTIVAL*, his first original work, was well received.
2011 Jan: M☆3 *KOINOITAMI ~come on! ITAMI~*

With "love to party" spirit, Sugihara is broadening the range of his work with projects such as spending two-years as the director of the Performing Arts Festival "Summit", organized by Komaba Agora Theater since "Winter Summit 2008", and being the concept planner of FRINGE "HAPPLAY♥" at KYOTO EXPERIMENT 2010.

2011

KUNIO 08 *The Chairs*
(Text: Eugene Ionesco / Direction: Kunio Sugihara)
Komaba Agora Theater (Tokyo)
Urinko Theater (Aichi)

2010

KUNIO 07 *CULTURAL FESTIVAL*
(Concept, Direction: Kunio Sugihara)
Komaba Agora Theater (Tokyo)

2009

KUNIO 06 *Angels in America Part 1: Millennium Approaches*
(Text: Tony Kushner / Direction: Kunio Sugihara)
Kyoto Art Center Multi-purpose Hall (Kyoto)

KUNIO 05 *Labyrinth*
(Text: Fernando Arrabal / Direction: Kunio Sugihara)
AI HALL (Hyogo)

2006

KUNIO 02 *NIPPON WARS*
(Text: Takeshi Kawamura / Direction: Kunio Sugihara)
Kyoto Art Theater Shunjuza (Kyoto)

2004

KUNIO 01 *The Pelicans*
(Text: Raymond Radiguet / Direction: Kunio Sugihara)
Atelier GEKKEN (Kyoto)



KUNIO 08 《椅子》/ KUNIO 08 *The Chairs* (2011) photo: Toshihiro Shimizu



KUNIO 07 《文化祭》/ KUNIO 07 *CULTURAL FESTIVAL* (2010) photo: Toshihiro Shimizu



KUNIO 04 《犬は鎖に繫ぐべからず》/ KUNIO 04 *A dog must not be chained* (2008) photo: Toshihiro Shimizu



KUNIO 02 《ニッポン・ウォーズ》/ KUNIO 02 *NIPPON WARS* (2006)



ザカリー・オバザン

日本初演 / Japan Premiere

《Your brother. Remember?》

@ART COMPLEX 1928

Zachary Oberzan

Your brother. Remember?

ART COMPLEX 1928

9.23 [Fri] 19:30- 9.24 [Sat] 19:30- 9.25 [Sun] 15:00-★

上演時間 / duration = 60 min.

英語上演・日本語字幕 / Performed in English with Japanese Subtitles

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

※開場は開演の5分前です。

※The theater opens 5 min. prior to the performance.

ホームビデオ、ハリウッド映画、ライブの絶妙なミックス。
兄弟の人生はどれくらい離れてしまったのか？ 別の結果にもなりえたのか？

A brilliant remix of home videos, Hollywood film and live performance.

How different are these lives? Could this story have turned out the other way around?

ニューヨークを拠点に活躍する「ネイチャー・シアター・オクラホマ」のメンバーとしても知られる、ザカリー・オバザンのソロ・パフォーマンスが、日本初登場。

アメリカ郊外の街で育った少年たち、ザカリーと彼の兄のゲイターは、かつてお気に入りの映画、ジャン・クロード・ヴァンダムハリウッド映画『キックボクサー』、そして悪名高いカルト映画『ジャンク』のパロディー映像をホームビデオでよく作っていた。

それから20年…別々の人生を歩んだ兄弟。弟はステージとスクリーンの上で稼ぐ評判のよい俳優になり、兄は人生を台無しにするはめになり…。再びザカリーは子供時代の家に戻り、全く同じショットを再現し、一連の映像を作り上げた。“過去”と“現在”が入り交じる中に、兄弟のヘンな“関係”が浮かび上がる。果たして、二人の人生は、逆の結果でもありえたのだろうか？

2010年のクンステンフェスティバルデザール(ブリュッセル)で初演後、世界各地を巡演し、観客を爆笑と涙の渦に巻き込んだ傑作が、遂に京都に上陸する。

脚本：ザカリー・オバザン、ゲイター・オバザン／構成・演出・出演：ザカリー・オバザン／映像出演：ゲイター・オバザン／演出助手・制作：ニコール・シュッチャード／照明・音響・映像：ディヴィッド・ラング、トーマス・バーカル／共同製作：クンステンフェスティバルデザール2010、ノーデルゾン・パフォーミングアーツ・フェスティバル、グランドシアター・グロニンゲン、ブルト・ウィーン／提携：ART COMPLEX 1928／主催：KYOTO EXPERIMENT

His first own solo performance project by Zachary Oberzan, also known as a member of NY based company “Nature Theater Oklahoma”, makes its Japanese debut. As kids in rural America, Zachary and his older brother Gator loved making parodies of their favorite films, most notably Jean-Claude Van Damme’s karate opus *Kickboxer*, and the notorious cult film *Faces of Death*. Then twenty years passed. Estranged from his family, Zack returned to his childhood home to re-create these films, shot for shot, as precisely as possible. Through their subtle mix of home video, Hollywood film footage and live performance, the audience will discover the brothers’ relationship. One of them became a reputable actor who earns his living on stage and on screen. The other hit the rocks and did some time in prison, where he saw acting as the “art of manipulation”. The question is: could things have turned out otherwise? After its premier at Kunstenfestivaldesarts 2010 in Brussels and a world tour, this great piece, which never fails to make the audience burst out laughing and cry, comes to Kyoto.

Text: Zachary & Gator Oberzan / Concept, Direction: Zachary Oberzan / Cast: Zachary Oberzan [Featuring Gator Oberzan on video] / Assistant Director, Tour Management: Nicole Schuchardt / Light, Sound, Video Technician: David Lang, Thomas Barcal / Co-produced by Kunstenfestivaldesarts 2010, Noorderzon Performing Arts Festival, Grand Theater Groningen and brut Wien / Co-Presented by ART COMPLEX 1928 / Presented by KYOTO EXPERIMENT



ザカリー・オバザン

ニューヨークを拠点に活躍する劇団「ネイチャー・シアター・オクラホマ」の創立メンバーのひとり。《Poetics: a ballet brut》、オビエ賞受賞作《No Dice》、一人芝居《Rambo Solo》など数々のカンパニー作品に出演。長編映画《Flooding with Love for The Kid》(映画『ランポー』のもととなった小説『一人だけの軍隊(原題: First Blood)』のパロディー作品)では、登場する26のキャラクター全てを一人で演じ、全てのシーンはマンハッタンにある12畳の自宅アパートで収録された。撮影および編集もすべてザカリー本人が行った。同作品は、現在も北アメリカおよびヨーロッパ圏の劇場、芸術センターおよび映画祭などで上映されている。ウースター・グループやリチャード・フォアマンとの共演の他、楽曲CDも2作リリースしている。最新アルバムのタイトルは『Athletes of Romance』。



《Your brother. Remember?》 / *Your brother. Remember?* (2010) photo: Nancy Geeroms

Zachary Oberzan

Zachary Oberzan is an original member of theater collective "Nature Theater of Oklahoma", based in New York City. With Nature Theater, he has collaborated and performed in numerous productions, including *Poetics: a ballet brut*, the Obie-winning *No Dice*, and the one-man show *Rambo Solo*. His feature film *Flooding with Love for The Kid* (an adaptation of the novel *First Blood*, which introduced the world to the character of *Rambo*) is a one-man cinematic war shot and edited in its entirety by Zachary (portraying all 26 roles) in his 220 square foot apartment in Manhattan. It is currently screening in theaters, art institutes and film festivals in North America and Europe. He has performed with The Wooster Group and Richard Foreman, and released two albums of songs, most recently *Athletes of Romance*.



《Your brother. Remember?》 / *Your brother. Remember?* (2010) photo: Sylvie Moris



《Your brother. Remember?》 / *Your brother. Remember?* (2010) photo: Nancy Geeroms

「構造としては複雑だが、そこに描かれる感情はシンプル。《Your brother. Remember?》は実験演劇の感動作だ。」—NEW YORK THEATER REVIEW

「オバザンは自身の身の上話を、誰しもに起こりうる出来事として鮮やかに転化する。《Your brother. Remember?》は小さな傑作だ。」—vibe/corpuskunstcritiek

「劇場でめったにお目にかかる事のできな代物、鳥肌モノ。ザカリー・オバザンの演出は感動的で勇敢だ。《Your brother. Remember?》はその巧妙な制作方法だけでなく、コンテンツそのものが素晴らしい。そのテーマは、兄弟を知る手がかりを探す心やさしい回りの道向こうにある。不器用で正直、だからこそ必見の作品だ!」—DE MORGEN

「Intellectually complex but emotionally simple. *Your brother. Remember?* is a moving work of experimental drama.」—NEW YORK THEATER REVIEW

「The way Oberzan uses a personal story as an impetus to call up the human condition so striking, makes *Your brother. Remember?* a little masterpiece.」—vibe/corpuskunstcritiek

「Goosebumps, one doesn't receive a gift like that every day in theatre. Zachary Oberzan's choice is moving and brave. *Your brother. Remember?* is cleverly made, but above all it's the idea that works well...fishing lines are thrown through sweet detours, hoping to catch a little piece of brother. Clumsy, honest and therefore unavoidable.」—DE MORGEN

白井剛 / 京都芸術センター「演劇計画2009」



再創作 / Re-Creation

《静物画 - still life》

@京都芸術センター 講堂

Tsuyoshi Shirai / Kyoto Art Center "Theatre Project 2009"

still life

Kyoto Art Center Auditorium

9.30 [Fri] 19:30-★ 10.1 [Sat] 15:00- 10.2 [Sun] 17:30-

上演時間 / duration = 100 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

※開場は開演の15分前です。

※The theater opens 15 min. prior to the performance.

*関連イベント [ブレイベント 上映会+アーティストトーク] (p66)

テーブルの上に在る、例えば“器”を写生するように。
ダンスという名の静物が、知覚のヒダに囁きかける。—白井剛の静かなる反抗。

Like a painter sketching a vessel on the table,
Shirai whispers to the folds of our perceptions through the art of still life that is dance.
This is Tsuyoshi Shirai's cool rebellion.

静かに、しかし既存のダンスに抗う革新性を持った作品を常に送り出してきた、白井剛。

2009年度に京都芸術センター演劇製作事業「演劇計画」にて発表、前年度《blueLion》に続き、2年にわたるレジデンスの集大成となった《静物画 - still life》を更に練り上げて発表する。

「ダンスが見出されようとするとき、そこに存在する〈なにか〉。その〈なにか〉を忠実に鮮明に描きだすことに執心するとき、「ダンス」は自己を超え、無限に触れる。」と語る白井。精緻な作業と大胆な引き算によって、ダンスの深淵を覗き込もうとする意欲作。意味やドラマを回避し、静かに配置されてゆくムーブメントによって、解釈の着地点を失い浮遊する、知覚のダイナミズム。鑑賞者の脳をひやりとかすめ、後ろか裏側あたりで像を結ぶ、「存在」と「世界」の感触。

構成・演出・振付：白井剛 / 出演：青木尚哉、鈴木美奈子、高木貴久恵、竹内英明、白井剛 / 舞台監督：夏目雅也 / 美術：杉山至+鴉屋 / 音響：宮田充規 / 照明：吉本有輝子 / 衣裳：清川敦子 / 制作：川崎陽子(京都芸術センター)、和田ながら / 企画：橋本裕介、丸井重樹 / 製作：京都芸術センター「演劇計画2009」 / 主催：KYOTO EXPERIMENT

Tsuyoshi Shirai has calmly yet insistently produced revolutionary work that challenges existing dance. With Kyoto Art Center's theater program "Theatre Project", Shirai pushed the frontier with *blueLion* (2009) and *still life* (2010). For KYOTO EXPERIMENT 2011, he introduces a further developed version of *still life*, the grand sum of his Kyoto work. "When one is devoted to describing something that is present in the moment of dance, dance exceeds the dancer's ego and touches infinity" says, Shirai. *still life* is an ambitious work which attempts to look into the abyss of "dance" with precision and a bold subtraction. It plays with a dynamism of perception that allows the performance to elude the landing site of interpretation, avoiding meaning and drama, and just quietly arraying movements.

Concept, Direction, Choreography: Tsuyoshi Shirai / Dance: Naoya Aoki, Minako Suzuki, Kikue Takagi, Hideaki Takeuchi, Tsuyoshi Shirai / Stage Manager: Masaya Natsume / Stage Design: Itaru Sugiyama+Karasuya / Sound: Mitsunori Miyata / Lighting: Yukiko Yoshimoto / Costume: Atsuko Kiyokawa / Production Coordinator: Yoko Kawasaki (Kyoto Art Center), Nagara Wada / Grand Concept: Yusuke Hashimoto, Shigeki Marui / Produced by Kyoto Art Center "Theatre Project 2009" / Presented by KYOTO EXPERIMENT



白井剛

1996～2000年「伊藤キム+輝く未来」に参加。1998年に「Study of Live works 発条ト(ばねと)」設立。2000年「パニョレ国際振付賞」、2006年トヨタコレオグラフィーアワード「次代を担う振付家賞」を受賞。2006年「AbsT」を設立し、《しはに-subsoil》《THECO-ザコ》を発表。またダンサーとしてユーリ・ン(香港)振付《悪魔の物語》、伊藤キム《禁色》に出演するほか、「アルディッティ弦楽四重奏団」とのコラボレーション、ダムタイプの藤本隆行ら10人のアーティストによる《true/本当のこと》に参加し国内外にてツアーを行う。2007年「第一回日本ダンスフォーラム賞」受賞。2009年《blueLion》、2010年《静物画 - still life》を京都にて制作・発表。2010～2011年、山口情報芸術センター(YCAM)と映像プロジェクトを行い、作品をネット上 (<http://c-filmed.ycam.jp>) で発表。2011年、神奈川県立近代美術館モホイ・ナジ回顧展の展示作品・空間とのコラボレーションなど、多様なフィールドでダンスの可能性を探索している。

プロジェクトについて

京都芸術センター「演劇計画2009」

「演劇計画」は2004年度から2009年度の6ケ年にわたって行なわれた、京都芸術センターで舞台芸術作品を生み出すための、長期的視野に立ったプロジェクト。上演の担い手である「演出家」に着目し、継続した作品制作(2004年～2005年に三浦基・水沼健、2006年～2007年に前田司郎・山下残、2008年～2009年に白井剛)や若手演出家の発掘を目的にした「京都芸術センター舞台芸術賞」、そして開かれた議論の場としての「演出家フォーラム」といった舞台芸術に関わる総合的なプログラムを実施してきた。



《質量, slide, & . / mass, slide, & . (2004) photo: Toshihiro Shimizu

2009

《blueLion》

(構成・演出・振付：白井剛)
京都芸術センター 講堂(京都)
東京芸術劇場 小ホール(東京)
イムズホール(福岡)

2007

《true/本当のこと》

(ディレクション・照明：藤本隆行、振付：白井剛)
山口情報芸術センター(YCAM)(山口)
金沢21世紀美術館(石川)
横浜赤レンガ倉庫1号館ホール(神奈川)
※2007年～2010年国内外各地でツアー

《THECO - ザコ》

(企画・演出・振付：白井剛)
シアタートラム(東京)
※2009年ルクセンブルク、2011年金沢21世紀美術館にて再演

2006

《アパートメントハウス1997/ジョン・ケージ》

(アルディッティ弦楽四重奏団×白井剛)
津田ホール(東京)、他

2004

SePT独舞vol.12

《質量, slide, & . 》
(構成・演出・振付：白井剛)
シアタートラム(東京)
※2011年に同作を山口情報芸術センター(YCAM)との映像プロジェクト「Choreography filmed: 5 days of movement」として発表。

Tsuyoshi Shirai

1996～2000: Member of "Kim Itoh + Glorious Future"
1998: Founded "Study of Live works BANETO".
2000: Received "Bagnolet International Choreography Award".
2004: Performed in *Devil's Story* choreographed by Yuri Ng (Hong Kong) adapted from Stravinsky's *A Soldier's Tale*.
2005: Performed in *Kin-Jiki [Forbidden Colors]* by Kim Itoh based on Yukio Mishima's novel.
2006: Received the Next Generation Choreographer Award in "TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD".
Founded "AbsT" and created *Shihani - subsoil* and *THECO*.
Collaborated with "Arditti Quartet".
2007: Performed in *true*, created by 10 artists, including Takayuki Fujimoto from Dumb Type, and toured Japan and abroad.
Received "JaDaFo Dance Award".
2009: Created and performed *blueLion* in Kyoto.
2010: Created and performed *still life* in Kyoto.
2010-11: Collaborated with Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM) with video project, *Choreography filmed: 5 days of movement*. Currently showing the work at <http://c-filmed.ycam.jp> and exploring the potential for dance online.
2011: Performed in the exhibition space of the Laszlo Moholy-Nagy retrospective at the Museum of Modern Art, Hayama.

Project Outline

Kyoto Art Center "Theatre Project 2009"

"Theatre Project" is a 6 year project (2004-2009) based at Kyoto Art Center. Its mission was to foster the performing arts. The comprehensive program included longterm support for stage directors in their new work (Motoi Miura and Takeshi Mizunuma, 2004-2005; Shiro Maeda and Zan Yamashita, 2006-2007; Tsuyoshi Shirai, 2008-2009), the "Kyoto Art Center Performing Arts Award", aimed at discovering young talent, and the "Stage Director Forum", that provided a platform for open and meaningful discussion.



《blueLion》/ blueLion (2009) photo: Toshihiro Shimizu



《THECO-ザコ》 THECO (2007) photo: Hiraku Ikeda

2009

blueLion

(Concept, Direction, Choreography: Tsuyoshi Shirai)
Kyoto Art Center Auditorium (Kyoto)
Metropolitan Art Space Small Hall (Tokyo)
IMS HALL (Fukuoka)

2007

true

(Direction, Lighting: Takayuki Fujimoto / Choreography: Tsuyoshi Shirai)
Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM)
21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa (Ishikawa)
Yokohama Red Brick Warehouse 1st Hall (Kanagawa)
*Toured various venues in Japan and abroad from 2007 to 2010.

THECO

(Concept, Direction, Choreography: Tsuyoshi Shirai)
Theatre Tram (Tokyo)
*Performed in Luxembourg in 2009 and at 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa in 2011.

2006

Apartment House 1997 / John Cage

(Arditti Quartet×Tsuyoshi Shirai)
Tsuda Hall (Tokyo) and more

2004

SePT DOKUBU vol.12

《mass, slide, & . 》
(Direction, Concept, Choreography: Tsuyoshi Shirai)
Theatre Tram (Tokyo)
*The same work was introduced again in *Choreography filmed: 5 days of movement*, a video project in collaboration with Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM) in 2011.



《true/本当のこと》/ true (2007) photo: Yohta Kataoka



《アパートメントハウス1997/ジョン・ケージ》/ Apartment House 1997/ John Cage (2006) photo: Hiraku Ikeda



平田オリザ+石黒浩研究室 (大阪大学&ATR石黒浩特別研究室)

アンドロイド演劇 《さようなら》

@京都芸術センター フリースペース

Oriza Hirata and Hiroshi Ishiguro Laboratory (Osaka University and ATR Hiroshi Ishiguro Lab)
Android-human Theater *Sayonara* (Good-bye)
Kyoto Art Center Multi-purpose Hall

10.1 [Sat] 18:00-★ 10.2 [Sun] 15:00-★

上演時間 / duration = 20 min. + talk

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

10.1 [Sat] 石黒浩 / Hiroshi Ishiguro 10.2 [Sun] 平田オリザ / Oriza Hirata

※開場は開演の15分前です。

※The theater opens 15 min. prior to the performance.

人間とロボットの境界とは、
人間にとって、ロボットにとって、“生”とは、そして“死”とは…。

**What is the boundary between human and robot?
What does life and death mean to us and to robots…?**

劇団「青年団」を主宰し「現代口語演劇理論」に基づく緻密な劇世界を織り上げる演劇界の旗手・平田オリザと、自身を精密にコピーしたロボット「ジェミノイド」で知られるロボット研究の第一人者・石黒浩。世界的に活躍する2人の才能がタッグを組み、大阪大学で進めている「ロボット演劇プロジェクト」がついに京都に初登場する。

ただ詩を読み続けるアンドロイドと、死を目前にした一人の少女の物語。谷川俊太郎、ランボー、若山牧水などの詩を、アンドロイドが淡々と読み続ける中で、人間とロボットの、まったく新しい関係が示される。

アンドロイドと俳優が舞台上で共演することにより、観客は、どちらが人間なのか一瞬わからなくなり、アンドロイドに対して「人間よりも人間らしい」奇妙な感覚を呼び起こす…。もしアンドロイドが人間よりも人間らしいと感じるなら、人間とは一体何だろうか？ “ロボット”のイメージを一新し、演劇×科学の融合の臨界点を示す、衝撃の〈実験〉作品。

The two masterminds behind this work are Oriza Hirata, founder of the company “Seinendan” and one of the leading figures in the world of theatre with his Theory of Contemporary Colloquial Theatre, and leading robot researcher Hiroshi Ishiguro, creator of the “Geminoid”, a robot uncannily similar to a human being. These two internationally active geniuses have teamed up to develop a Robot-human Theater project at Osaka University, and will be presenting their work for the first time in Kyoto.

It is the story of a young girl facing death and an android who endlessly reads poetry. While the android calmly reads poems by Shuntaro Tanikawa, Arthur Rimbaud and Bokusui Wakayama, an entirely new relationship between humans and robots is represented.

The co-starring of an android and a human makes spectators, even if for a brief moment, start doubting which of the two seems more human-like, and the strange feeling that perhaps the robot is more human than humans arises. This piece raises the following question to the audience: “If androids are more human than humans, what are human beings?” It is a shocking play which shows the critical point of convergence between science and theatre and which entirely renovates the image of robots.

脚本・演出：平田オリザ／テクニカルアドバイザー：石黒浩(大阪大学&ATR石黒浩特別研究室)／出演：ブライアリー・ロング(青年団)／アンドロイドの動き・声：井上三奈子(青年団)／舞台監督：尾崎聡／美術：杉山至／照明：岩城保／衣装：正金彩／演出助手：谷賢一／制作：野村政之、堤佳奈／ロボット側ディレクター：カ石武信(大阪大学石黒浩研究室)、小川浩平(ATR石黒浩特別研究室)／製作：大阪大学石黒浩研究室、ATR石黒浩特別研究室、(有)アゴラ企画、青年団／音響協力：富士通テン(株)／主催：KYOTO EXPERIMENT

Text, Direction: Oriza Hirata / Technical Advisor: Hiroshi Ishiguro (Osaka University and ATR Hiroshi Ishiguro Lab) / Cast: Bryerly Long (Seinendan) / Android's Motion and Voice: Minako Inoue (Seinendan) / Stage Manager: So Ozaki / Stage Design: Itaru Sugiyama / Lighting: Tamotsu Iwaki / Costume: Aya Masakane / Assistant Director: Kenichi Tani / Production Coordinator: Masashi Nomura, Kana Tsutsumi / Robot's Director: Takenobu Chikaraishi (Osaka University, Hiroshi Ishiguro Laboratory), Kohei Ogawa (ATR Hiroshi Ishiguro Lab) / Co-produced by Osaka University Hiroshi Ishiguro Laboratory, ATR Hiroshi Ishiguro Lab, Agora Planning Ltd. Seinendan / Sound Collaboration: Fujitsu Ten / Presented by KYOTO EXPERIMENT

平田オリザ

劇作家、演出家、こまばアゴラ劇場芸術監督、劇団「青年団」主宰。1982年に劇団「青年団」結成。「現代口語演劇理論」を提唱し、1990年代以降の演劇に大きな影響を与える。1995年《東京ノート》で第39回岸田國土戯曲賞受賞。2003年日韓合同公演《その河をこえて、五月》で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。近年はフランス・ベルギー・中国など各国との国際共同製作作品を多数上演している。現在、内閣官房参与、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、四国学院大学客員教授・学長特別補佐、埼玉県富士見市民文化会館キラリ☆ふじみマネージャー、三省堂小学校国語教科書編集委員、(財)地域創造理事、(財)舞台芸術財団演劇人会議評議員、日本演劇学会理事、日本劇作家協会常務理事、東京芸術文化評議会評議員、BeSeTo演劇祭日本委員会委員長。

石黒浩

大阪大学大学院基礎工学研究科システム創成専攻教授・ATR石黒浩特別研究室室長(ATRフェロー)。工学博士。社会で活動できる知的システムを持ったロボットの実現を目指し、これまでにヒューマノイドやアンドロイド、自身のコピーロボットであるジェミノイドなど多数のロボットを開発。ロボカップ世界大会では5度の優勝(TeamOSAKA)。「世界の生きている天才」ランキング(英Synectics/2007年)では日本人最上位の26位選出、「世界が尊敬する日本人100人」(ニュースウィーク日本版/2009年)に選出など、最先端のロボット研究者として世界的に注目されている。

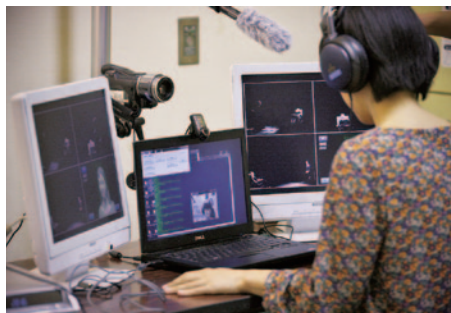
プロジェクトについて

青年団+大阪大学ロボット演劇プロジェクト

大阪大学において、石黒浩研究室(大阪大学&ATR石黒浩特別研究室)、株式会社イーガー、有限会社アゴラ企画・青年団がおこなっている人間と共生するロボットの研究開発に演劇を活用するプロジェクト。2008年に短編作品《働く私》を上演。2010年、「あいちトリエンナーレ」にて、ロボット版《森の奥》、アンドロイド演劇《さようなら》を発表。創作・上演のプロセスがそのまま研究分野にフィードバックされ、公演全体が「演劇」と「科学」を横断する先端的な「実験」となる、画期的なコラボレーションをおこなっている。



アンドロイド演劇《さようなら》/Android-human Theater *Sayonara* [Good-bye] (2011)
photo: Tsukasa Aoki



アンドロイド演劇《さようなら》/Android-human Theater *Sayonara* [Good-bye] (2010)
photo: Tatsuo Nambu

2010

アンドロイド演劇《さようなら》
(脚本・演出：平田オリザ/テクニカルアドバイザー：石黒浩)
愛知県芸術劇場 小ホール(愛知)

ロボット版《森の奥》
(脚本・演出：平田オリザ/テクニカルアドバイザー：石黒浩/ロボット側監督・プロデューサー：黒木一成(株式会社イーガー))
愛知県芸術劇場 小ホール(愛知)

2008

ロボット演劇《働く私》
(脚本・演出：平田オリザ/テクニカルアドバイザー：石黒浩/ロボット側監督・プロデューサー：黒木一成)
大阪大学 21世紀懐徳堂(大阪)

Oriza Hirata

Playwright, director, artistic director of Komaba Agora Theatre, and founder of the theatre company "Seinendan". In 1982 he created "Seinendan" and since the 1990s he has been a very influential figure in the world of theatre with his Theory of Contemporary Colloquial Theatre. In 1995 he was granted the 39th Kishida Kunio Drama Award with *Tokyo Notes* and in 2003 he received the Grand Prix at the 2nd Asahi Performing Arts Award with a Japan-Korea performance of *Across the River in May*. He also won the Montblanc de la Culture Arts Patronage Award in 2006. In recent years, he has been staging several international co-productions in countries such as France, Belgium and China. At present, Hirata is a special advisor to the Japanese cabinet, professor at the Osaka University Center for the Study of Communication-Design, visiting professor and special assistant to the President of Shikoku Gakuin University, manager of Fujimi Culture Hall KIRARI FUJIMI in Saitama Prefecture, and member of the Editorial Board for Japanese Primary School Textbooks at Sanseido Editorial House. He is also a board member of the Japan Foundation for Regional Art-Activities, the Japan Performing Arts Foundation, the Japanese Society for Theatre Research, Japan Playwrights Association, and Tokyo Arts Council, as well as chairman for the Japanese Committee of the BeSeTo International Theater Festival.

Hiroshi Ishiguro

Hiroshi Ishiguro, Phd in Engineering, is a professor of Department of Systems Innovation in the Graduate School of Engineering Science at Osaka University, as well as a fellow at ATR Hiroshi Ishiguro Laboratory. Ishiguro has invented several humanoids, androids and a robot-replica of his own self named "Geminoid", in his quest to develop robots with intelligent systems which could actually play an active role in society. He has won five times the first prize in the international robotics competition RoboCup, held the highest position (No. 26) for a Japanese in the Synectics "Top 100 Living Geniuses" (2007) and was elected one of the "100 Most Respected Japanese People in the World" (Newsweek Japan, 2009). Ishiguro is one of the leading researchers on robotics in the world.

Project Outline

Seinendan Theatre Company + Osaka University, Robot-human Theater Project

This project, developed at Osaka University by Hiroshi Ishiguro Laboratory (Osaka University and ATR Hiroshi Ishiguro Lab), Eager Co. Ltd., Agora Planning Ltd. and Seinendan, implements the developments on robotic research into the field of theatre. In 2008, they presented the short play *I, Worker* and in 2010, "Aichi Triennale" they presented two pieces: the Robot-human Theater *In the Heart of a Forest* and the Android-human Theater *Sayonara*. The process of creation and staging are used as feedback for the research, making the whole performance into a state-of-the-art experiment that crosses the boundaries between "theatre" and "science", a groundbreaking form of collaboration.



ロボット演劇《働く私》/Robot-human Theater *I, Worker* (2010)
photo: Tsukasa Aoki

2010

Android-human Theater. *Sayonara* [Good-bye]
(Text, Direction: Oriza Hirata / Technical Advisor: Hiroshi Ishiguro)
Aichi Arts Center The Mini Theatre [Aichi]

Robot-human Theater. *In the Heart of a Forest*
(Text, Direction: Oriza Hirata / Technical Advisor: Hiroshi Ishiguro / Robot Director, Producer: Kazunari Kuroki (Eager Co. Ltd.))
Aichi Arts Center The Mini Theatre [Aichi]

2008

Robot-human Theater. *I, Worker*
(Text, Direction: Oriza Hirata / Technical Advisor: Hiroshi Ishiguro / Robot Direction, Producer: Kazunari Kuroki)
21st Century Kaitokudo Osaka University [Osaka]

マルセロ・エヴェリン/ デモリションInc.+ヌークレオ・ド・ディルソル

日本初演 / Japan Premiere

《マタドウロ(屠場)》

@元・立誠小学校 講堂

Marcelo Evelin/Demolition Inc. + Núcleo Do Dirceu
Matadouro (Slaughterhouse)
Former Rissei Elementary School Auditorium

10.7 [Fri] 19:00- 10.8 [Sat] 17:30-

上演時間 / duration = 65 min.

※開場は開演の15分前です。※16歳未満入場不可。

※The theater opens 15 min. prior to the performance. ※Suitable for 16 years and older

*関連イベント【フェスティバル・ワークショップ】、【フェスティバル・レクチャー】 p66-67 参照

身体を通した思考の軌跡。

ブラジル新世代コンテンポラリー・ダンスのインパクト。

Trajectory of thoughts through a body.

Impulsive new generation of contemporary dance from Brazil.

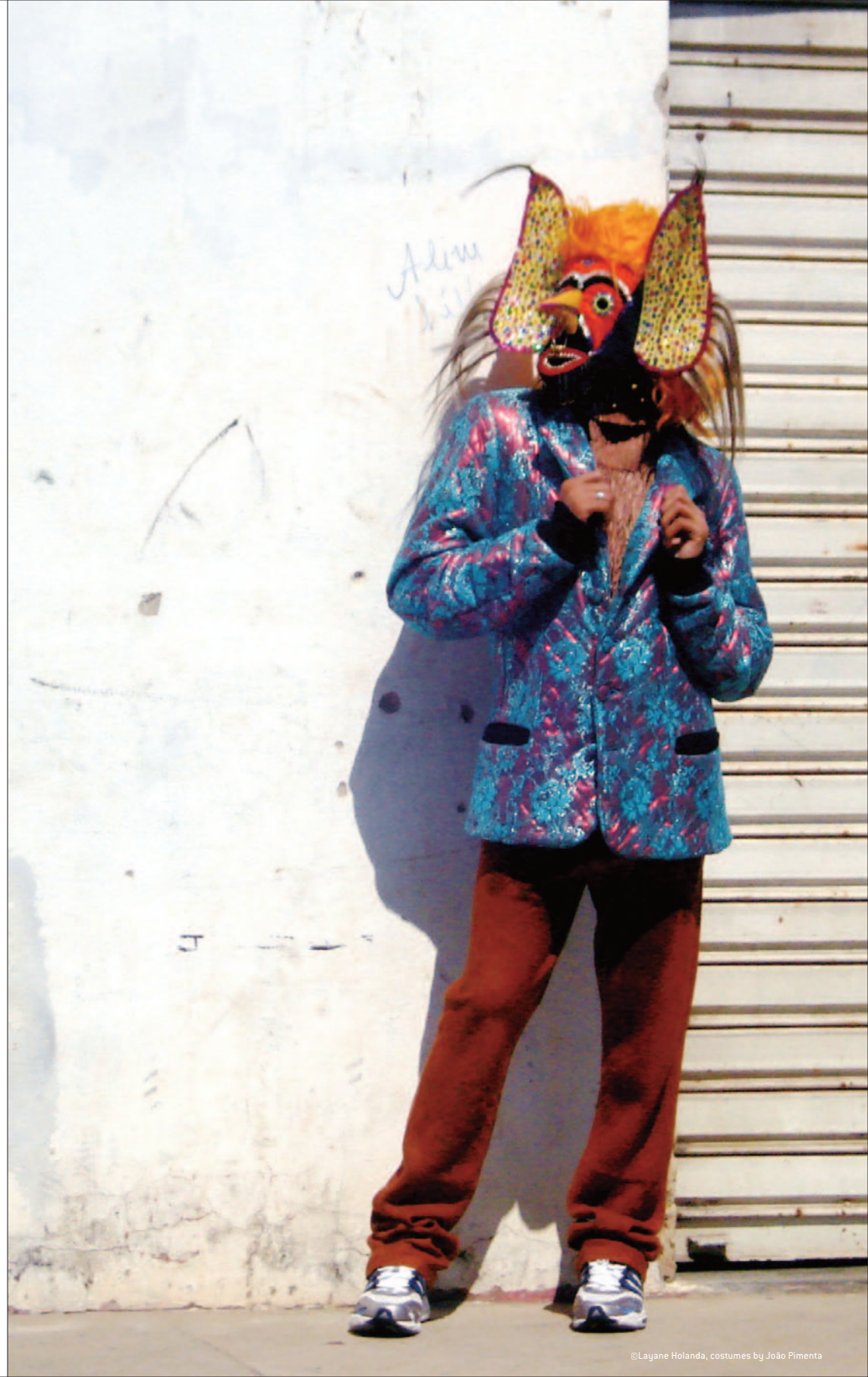
ブラジルの奇才マルセロ・エヴェリンが、昨年初演した最新作をもって、日本に初登場する。本作《マタドウロ(屠場)》(原題: Matadouro)は、ブラジルの作家エウクリデス・ダ・クーニャが著した叙事詩的小説『奥地』を原作に、第1部《セルタン》(2003)、第2部《ブル・ダンシング》(2006)に続く、3部作を締め括る作品である。

《マタドウロ(屠場)》は身体の研究である。ここで身体は、「公認されたものと周辺に追いやられたもの」、「野生と文明」、そして「区切られた縄張り」とグローバル化した世界の衝突する“戦い”のメタファーとしてたち現れる。8人のパフォーマンスーたちは、肉体労働者、インディオ、はしゃぐ者、カーニバルの薄汚れたグループ、あるいは農場のならず者へと変身する。そして60分あまりの上演中、ひたすら舞台を駆け回り、この“戦い”を極限の状態に高め、自らの身体に取り込みそして体現する。ブラジル現代社会への切実な応答がここにある。

クリエイションメンバー: アレキサンドラ・サントス、アンドレ・リーン・ジッゼ、シボ・アルバレンガ、ファガオ、ファビオ・クレージー・ダ・シルヴァ、イザベル・フロタ、ジャープ・リンディジャー、ジェイコブ・アルヴス、ジョシュ・S、ラヤネ・ホランダ、マルセロ・エヴェリン、レジーナ・ヴェロソ、セルジオ・カダー、シルヴィア・ソテ/助成: FUNARTE Grant (2008年)、SIEC/FUNDAC (ピアウイ州文化振興助成)/製作: ヌークレオ・ド・ディルソル・スタジオ(テレジナ、ピアウイ州)、アムステルダム・ヘットヴェーンシアター レジデンスプログラム、リオ・デ・ジャネイロ振付センター/共催: 立誠・文化のまち運営委員会/主催: KYOTO EXPERIMENT

Marcelo Evelin, one of Brazil's great talents, makes his Japanese debut with his latest work, which premiered last autumn. *Matadouro* is the last installment of the trilogy based on *Os Sertões*, an epic novel by Brazilian writer: Euclides da Cunha –the first and second parts were *Sertão* (2003) and *Bull Dancing* (2006). In its exploration, the body emerges as a metaphor of such conflicts as “official vs outcast”, “savagery vs civilized” and “specified territory vs a globalized world”. The eight performers transform into a labor worker, an Indio, a happy person, a group of sleazy carnival fellows and a rogue at a farm. They crisscross the stage for the whole 60 minutes of the performance and push the battle to saturation point. The dancers embody compelling responses to contemporary Brazil.

Creation: Alexandre Santos, Andre Lean Ghizze, Cipo' Alvarenga, Fagao, Fa'bio Crazy da Silva, Izabelle Frota, Jaap Lindijer, Jacob Alves, Josh S., Layane Holanda, Marcelo Evelin, Regina Veloso, Se'rgio Caddah, Silvia Sote / Supported by FUNARTE Grant (2008), Law of Incentive of the State Government of Piauí/SIEC/FUNDAC / Produced by Studio of the Núcleo Do Dirceu in Teresina/Piauí, Artistic residence in the Hetveem Theater of Amsterdam, Choreographic Center of Rio de Janeiro / Co-Presented by Rissei/Cultural City Steering Committee / Presented by KYOTO EXPERIMENT



演出家略歴

マルセロ・エヴェリン

マルセロ・エヴェリンは、現在ブラジルのコンテンポラリー・アート界で、ダンス、パフォーマンス、政治的なアクティビストとして最前線をひた走る存在である。1986年以来振付家、パフォーマーとして、ヨーロッパを活動の場として、ダンスやフィジカル・シアターの場で活動し、異なる分野・国籍・バックグラウンドを持つ人々との共同作業を行ってきた。現在アムステルダムのヘットヴェーンシアターの常任キュレーターを、彼のカンパニー「デモリション Inc.」と共に務めている。またアムステルダムのマイム学校で即興や振付を指導している。2006年からはアムステルダムと彼の出身であるブラジル・ピアウイ州のテレジーナを行き来しており、そこでは「ヌークレオ・ド・ディルソル」というパフォーマンス集団と共に仕事をしている。

団体の紹介

デモリションInc.+ヌークレオ・ド・ディルソル

デモリションInc.は、ブラジルおよびオランダを中心に世界で活躍するマルセロ・エヴェリンが主宰するコンテンポラリー・パフォーミング・アーツ集団。ヌークレオ・ド・ディルソルは、2006年にマルセロ・エヴェリンが設立した、身体言語に関わるアートをメインのフィールドとしたプロデューサー、アーティスト集団であり、ブラジル・ピアウイ州のテレジーナを拠点にしている。



《Bull Dancing》/ *Bull Dancing* (2006) ©Sergio Caddah

主な公演歴

2006

《Bull Dancing》

ジョアン・パウロ II 劇場 (テレジーナ、ブラジル)

2003

《Sertão》

ベルヴェー劇場 (アムステルダム、オランダ)

1995

《Ai, Ai, Ai》

デ・ブラッケー・グロンド (アムステルダム、オランダ)

Director's Biography

Marcelo Evelin

Marcelo Evelin is today a front runner in the fields of dance, performance and political action in contemporary Brazilian arts. Choreographer, researcher and performer, Evelin has been living and working in Europe since 1986, where he works with dance and physical theater and has collaborated with professionals of different fields, nationalities and backgrounds. He is a resident creator at Hetveem Theater, in Amsterdam, with his company "Companhia Demolition Inc.". He teaches improvisation and composition at Mime School in Amsterdam. Since 2006, he splits his time between Amsterdam and his hometown of Teresina, in Piaui, where he coordinates the collective Núcleo do Dirceu.

Company's Biography

Demolition Inc. + Núcleo Do Dirceu

Demolition Inc. is a contemporary performance art company managed by Marcelo Evelin. It has worked internationally, including primarily Brazil and the Netherlands. Established by Evelin in 2006, Núcleo Do Dirceu is an artists and producers collective focused on body language arts. It is located in Teresina, Dirceu Arcoverde.

Selected Works

2006

Bull Dancing

Theater João Paulo II (Teresina, Brazil)

2003

Sertão

THEATER BELLEVUE (Amsterdam, Netherlands)

1995

Ai, Ai, Ai

DE BRAKKE GROND (Amsterdam, Netherlands)



《Ai, Ai, Ai》/ *Ai, Ai, Ai* (1995) ©Ben van Duin



《Ai, Ai, Ai》/ *Ai, Ai, Ai* (1995) ©Carlos Marques



《Sertão》/ *Sertão* (2003) ©Ben van Duin



きたまり / KIKIKIKIKIKI

新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere

《ちっさいのん、おっきいのん、ふっといのん》

@京都芸術センター 講堂

Kitamari / KIKIKIKIKIKI

Chissainon, Okkiinon, Futtoinon (Little, Big and Chubby)

Kyoto Art Center Auditorium

10.9 [Sun] 19:30-★ 10.10 [Mon] 18:00-

上演時間 / duration = 70 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

※開場は開演の15分前です。

※The theater opens 15 min. prior to the performance.

“ちっちゃい”、“おっきい”、そして“ふとっちょ”で知られる
あのオリジナルメンバー、3人だけの初めての作品。テーマは“ブログ”!?

The first ever work by the three original members,
the little, the big and the chubby, centers around the theme “blog”!?

2006年の大学在学中にトヨタコレオグラフィーアワードにノミネートされて以来、快進撃を続けるきたまりによる新作が、KYOTO EXPERIMENTに初登場。小津安二郎の映画をモチーフにした作品《生まれてはみたもの》(2010)、他の振付家への作品委嘱「KIKIKIKIKIKI作品委託公演」(2010)、男性の俳優・ダンサー7名による舞台作品《ぼく》(2011)など、近年次々と新たな取り組みを行ってきた彼女が、初めてオリジナルメンバーのみで本格的に作品を制作する。今回の作品は、出演者の3人が2010年の大晦日から実際に始めた、ブログの日記が素材。日々の生活を語る言葉はネット上のフィクション? それとも現実? 情報の持つ曖昧さによって、“小さい”、“大きい”、そして“太っている”身体的特徴をもった3人のパフォーマーたちが、言葉と身体のはざままで、舞台上に新たな“イメージ=人物像”をたち上げる。

作・演出：きたまり / 振付・出演：きたまり、野瀬杏子、花本ゆか / 舞台監督：浜村修司 / 音響：小早川保隆 / 照明：魚森理恵 / 助成：アサヒビール芸術文化財団 / 製作：KIKIKIKIKIKI / 共同製作：KYOTO EXPERIMENT / 主催：KIKIKIKIKIKI, KYOTO EXPERIMENT

This piece marks the debut at KYOTO EXPERIMENT for Kitamari, a choreographer and dancer, whose career has not ceased to move forward since 2006 when –while still a university student– she was nominated for the TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD. Some of the many works that Kitamari has produced in the last years include *I was born, but...* (2010), inspired by Ozu Yasujiro's films, “KIKIKIKIKIKI's Commissioned Performance” (2010), a project that recruited several choreographers to create pieces for company members, and *Boku* (2011), a piece performed by male actors and dancers. For this new piece, there will be only original members for the first time in the company's history. The three performers began work on the piece on New Year's Eve 2010, and it uses material they gathered on a blog. Are all of the words used to talk about everyday life a mere fiction on the net? Are they real? Right at the intersection between words and the body, the three performers, with their different physical characteristics [Little, Big, Chubby] attempt to present a new kind of image and human figure on the stage.

Text, Direction: Kitamari / Choreography, Cast: Kitamari, Kyoko Nobuchi, Yuka Hanamoto / Stage Manager: Shuji Hamamura / Sound: Yasutaka Kobayakawa / Lighting: Rie Uomori / Supported by Asahi Beer Arts Foundation / Produced by KIKIKIKIKIKI / Co-produced by KYOTO EXPERIMENT / Presented by KIKIKIKIKIKI, KYOTO EXPERIMENT



きたまり／KIKIKIKIKIKI

ダンサー・振付家・演出家・「KIKIKIKIKIKI」主宰。舞踏家・由良部正美の元で踊り始めた後、2001年から2005年まで「千日前青空ダンス倶楽部」のダンサー(芸名・すずめ)として6カ国13都市の公演に参加。2002年からソロ活動を開始し、これまでに《箱庭》《オートチュール》《娘道成寺》《女生徒》等を発表。2003年ダンスカンパニー「KIKIKIKIKIKI」を設立。以後、主宰・振付家・ダンサーとして創作を重ねる。2006年京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科卒業。2008年、「トヨタコレオグラフィーアワード」にてオーディエンス賞受賞。受賞作《サカリバ007》はこれまでに3カ国15都市で30回に及ぶ上演を重ねている。2010年、「横浜ダンスコレクションR 2010 横浜ソロ×デュオ(Compétition)+」にてソロダンス《女生徒》で未来にはばたく横浜賞受賞。同年よりAI・HALLとの共同製作事業“Take a chance project”に選出され、1年に1作品程度のペースで計3作品の新作共同制作を行っている。身体のもつ面白さを幅広い層に提案する為に、これまでに作品上演だけでなく、プロデュース公演やイベントも多数企画。2011年からはダンスカンパニーの名前を削除し観客とグローバルな舞台芸術の共有を求め、「身体が持つ力こそが、生で舞台を見る喜びになる」と云うマニフェストを提示、作品制作を行っている。

2011

Take a chance project 026
《ぼく》
(作・演出・振付：きたまり)
AI・HALL(兵庫)

2010

《ソロダンス公演》
(振付・出演：野瀬杏子、花本ゆか)
アトリエ劇研(京都)

Take a chance project 023

《生まれてはみたものの》
(作・演出・振付：きたまり)
AI・HALL(兵庫)

2009

《OMEDETOU》
(演出・振付：きたまり)
京都文化博物館(京都)
Art Theater dB(兵庫)
※2010年、Japan Society Contemporary
Dance Showcase(ニューヨーク、アメリカ)

2005

《サカリバ》
(演出・振付：きたまり)
京都芸術劇場 studio 21(京都)
2007年《サカリバ007》として改訂上演
※光州パフォーマンスフェスティバル(韓国)ほか、国内外で再演

Kitamari／KIKIKIKIKIKI

Dancer, choreographer, director and leader of “KIKIKIKIKIKI”, Kitamari started her career under the direction of Butoh dancer Masami Yurabe. From 2001 to 2005 she toured around 13 different cities in 6 countries, dancing with the Sennichimae Aozora Dance Club under the artistic name of Suzume (Sparrow). From 2002 she started dancing solo, and has presented pieces such as *Hakoniwa*, *Haute Couture*, *Musume Dojoji*, and *Schoolgirl* among others. In 2003 she founded the dance company “KIKIKIKIKIKI”, and since then has been combining her duties as choreographer, dancer and director. In 2006 she graduated from the Department of Performing Arts at Kyoto University of Art and Design. She received the Audience Prize for her choreographic work *Beehive 007* at the “TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD” in 2008 as well as the Yokohama Award for Promising Young Artists at the “Yokohama Dance Collection R 2010 Yokohama Solo x Duo (Compétition)+” with her solo dance *Schoolgirl*. In 2010 she was selected to take part in the “Take a chance project”, a co-produced project by AI Hall and performing artists based in the Kansai Area, and has been producing about one new piece of work per year. In order to offer a more interesting vision of the body to a wider audience, she has been designing several forms of events and productions, thus moving away from the usual forms of staging. Since the beginning of 2011, she has started a quest to go beyond the name of a dance company and to share the global nature of performing arts with her audience. She has hit on a motif, “the true pleasure of seeing a live performance resides in the strength of the body”, which will inspire the creation of her forthcoming works.

2011

Take a chance project 026
Boku
(Text, Direction, Choreography: Kitamari)
AI Hall (Hyogo)

2010

Solo Dance Performance
(Choreography, Performance: Kyoko Nobuchi, Yuka Hanamoto)
Atelier GEKKEN (Kyoto)

Take a chance project 023

I was born, but...
(Text, Direction, Choreography: Kitamari)
AI Hall (Hyogo)

2009

Omedeto (Congratulations)
(Direction, Choreography: Kitamari)
The Museum of Kyoto (Kyoto)
Art Theater dB (Hyogo)
*Performed at Japan Society Contemporary Dance Showcase (New York, USA) in 2010.

2005

Beehive
(Direction, Choreography: Kitamari)
Kyoto Art Theater studio 21 (Kyoto)
Re-created in 2007 as *Beehive 007*
*Performed in Performing Arts Festival of Asia in Gwangju (Gwangju, Korea) and more.



《OMEDETOU》/ *Omedeto [Congratulations]* (2009)
photo: Ayako Abe

ダンス未満の動きを構成 カンパニーの創造性示す演劇的展開も
～KIKIKIKIKIKI 「OMEDETOU」～

動きはダンスというより、身体から直接吐き出される「ダンス未満」の身振りである。だがシコを踏み、大口を開け、ガニ股で仰け反るといった破格の動作はダンス以上といえる。小柄なきたまりのほか、背高、ぼっちゃり、ほっそり、そして女装した男子と、外見も個性もさまざまな踊り手たちが、テクニックを度外視してこれらを精力的に動いていく。彼／彼女らの沸き立つような身体のパワーには目を見張られるが、これを外から動かす構成・演出の作業の跡が、今回はより明確に見て取ることが出来た。ダンスに成形されない動きを、密度とスピード感をもって構成したアンサンブルは出色だ。

竹田真理
(音楽舞踊新聞 2009年11月11日号)

KIKIKIKIKIKI's *Omedeto*: The primitive movement of a “subdance” and the performative development of a company's creativity

Their movements –rather than “dance” they should perhaps be called “subdance”– are primitive motions that seem to be expelled directly from the body. Movements which are anything but ordinary, such as sumo-style feet stomping, mouth gesticulations, bowlegged walking, back bending and the like, could also be seen as more-than dance. Besides small-framed Kitamari, there are tall, plump, and slim female dancers as well as cross-dressed male dancers, all very different in appearance and in personality, who dismiss technique in favor of a movement filled with vitality. Certainly, the physical power that seems to exude from them cannot help but holding your gaze; however, traces of the work of composition and direction that manage this vitality from outside, are more visible in this presentation. I found it splendid that the ensemble, structured with such sense of speed and density of movement, does not fit easily into the mold of dance.

Mari Takeda
“The Music and Dance Press”
November 2009



《OMEDETOU》/ *Omedeto [Congratulations]* (2009)
photo: waits



《サカリバ007》/ *Beehive 007* (2007) photo: Yoichi Tsukada



《生まれてはみたものの》/ *I was born, but...* (2010) photo: Ayako Abe



《サカリバ007》/ *Beehive 007* (2009) photo: Yoichi Tsukada



《生まれてはみたものの》/ *I was born, but...* (2010) photo: Ayako Abe

笠井 叡

新作 | 日本初演 / New Creation | Japan Premiere

《血は特別のジュースだ。》

@京都芸術劇場 春秋座

Akira Kasai

Blood is a special kind of juice.

Kyoto Art Theater Shunjuza

10.10 [Mon] 14:00-★

上演時間 / duration = 70 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

ゲスト：萩尾望都(漫画家)

※開場は開演の30分前です。※未就学児入場不可。

※The theater opens 30 min. prior to the performance. ※Children under school age are not accepted into the theaters

「言葉が血肉となり、その身体こそが作品となる」

日本の古代史『古事記』に描かれた黄泉の国をモチーフに、
ダンスの起源に迫る衝撃作！

“Words become flesh and blood, and these are made into a work of art.”

Based on the underworld written in *the Kojiki*, the Japanese record of ancient chronicles,
Kasai startlingly approaches the primitive roots of dance!

世界に舞踏の名を知らしめ、現在も第一線で活躍する笠井叡が、『花粉革命』で衝撃を与えた春秋座の舞台に、8年ぶりに戻ってくる。

1960年代に若くして土方巽、大野一雄と親交を深め、数多くの舞踏公演を行うと同時に、「天使館」を主宰し、山田せつ子や山崎広太はじめ多くの舞踏家を輩出してきた笠井。現在に至るまで50年もの間トップランナーとして走り続ける舞踏界の“怪物”の新作は、日本の古代史『古事記』に描かれた黄泉の国をモチーフに、「言葉が血肉となり、その身体こそが作品となる」というダンスの起源に迫る衝撃作。

構成・演出・振付：笠井叡 / 出演：笠井叡、笠井禮示、寺崎礁、定方まこと、鯨井謙太郎、大森政秀 / 舞台監督：松下清永+鴉屋 / 音響：角田寛生 / 照明：森下泰(ライトシップ) / 制作：花光潤子(NPO法人魁文舎) / 製作：天使館 / 共同製作：KYOTO EXPERIMENT / 主催：KYOTO EXPERIMENT

Akira Kasai, one of the most renowned Butoh artists in the world, is back to Shunjuza stage where he astonishingly performed *Pollen Revolution* eight years ago.

During the 1960s Kasai developed a strong friendship with other Butoh founders such as Tatsumi Hijikata and Kazuo Ohno, carried out countless numbers of performances, created his dance institute “Tenshikan” (Angels’ Hall) and mentored several dancers such as Setsuko Yamada and Kota Yamazaki. The newest work by this Butoh master, a leading figure for the past fifty years, is based on the underworld written in *the Kojiki*, the Japanese record of ancient chronicles. It is a bold work of choreography that strives for primitiveness: “Words become flesh and blood, and these are made into a work of art”.

Direction, Concept, Choreography: Akira Kasai / Dance: Akira Kasai, Reiji Kasai, Sho Terasaki, Makoto Sadakata, Kentaro Kujirai, Masahide Ohmori / Stage Manager: Kiyonaga Matsushita + Karasuya / Sound: Hiroki Tsunoda / Lighting: Tai Morishita (Lightship) / Production Coordinator: Junko Hanamitsu (NPO Kaibunsha) / Produced by Tenshikan / Co-Produced by KYOTO EXPERIMENT / Presented by KYOTO EXPERIMENT



「血は特別のジュースだ。」 笠井 叡

まだ、形にならない新作を創り始めるときに、外的な状況から、テーマとかコンセプトとかを、明らかにしなければならなくなる。そのたびに、決して自分がダンスを始めたときの出発に引き戻されるのだ。結局、私は「作者が作品である」という、ダンスの始原的な状況から、1歩も出ることがなかったのではないか。あれは土方巽氏が「バラ色ダンスー溢澤さんの家の方へ」という作品を作っていた前年のことであるから、次の電話での会話は、1964年の頃のこと、土方巽氏が36歳、私が21歳のときのことだ。

土方「笠井君、結局言葉なんだよ」
笠井「、、、、、、、、」
土方「言葉で支えられてるんだ、舞踊は」
笠井「、、、、、、分りました。言葉が受肉して、カラダになるということですね」
この私の言葉に対して、土方巽氏はその後、沈黙した。

血は特別のジュースだ。
黄泉の国にまで落ちていったイザナミの尊は、言葉の吸血姫である。
「カラダが作品である」という宇宙的なメビウスの輪を紡ぐために、カラダの筋肉が日本語の父声と母声によって、編みあげられながら、言葉が肉となり、日々、虚と美の皮膜を、生み出し続けるしかないのだろう。
姫は1日、1000人の血を飲むというのだから。

.....

演出家略歴

笠井 叡

1943年11月25日生まれ。大野一雄氏、土方巽氏とともに舞踏創成の一翼を担う。《磔刑聖母》、《舞踏への招宴》、《タンホイザー》、《雅児の草子》等の舞踏ソロ作品を発表し、1971年に「天使館」を設立する。1979～1985年西ドイツ留学、ルドルフ・シュタイナーの創始したオイリュトミーを研究。帰国後数多くのオイリュトミー作品を発表し、1990年にオイリュトミー学校を開校。1993年、《セラフィータ ― 鏡の性器を持つ私の女》を発表し、舞踏活動を再開。代表作《花粉革命》は世界各都市で上演される。2009年AKIRA KASAIオイリュトミーカンパニーでイタリア・ツアー、笠井叡プロデュース空間「Generis」を開始し、《犀》、《カルミナ・ブラーナ》等の作品を発表。著書に『天使論』、『神々の黄昏』、『聖霊舞踏』（いずれも現代思潮社刊）、写真集『アンドロギニー・ダンス』、『銀河革命』、『danse double』（笠井爾示共著）。



《花粉革命》/ *Pollen Revolution* (2003) photo: Toshihiro Shimizu

主な公演歴

2008

《透明迷宮》
(構成・演出・振付：笠井叡)
シアタートラム(東京)

2002

《銀河計画》
(構成・演出・振付：笠井叡)
世田谷パブリックシアター(東京)

2001

《花粉革命》
(構成・演出・振付：笠井叡)
シアタートラム(東京)

2000

《Spinning Spiral Shaking Strobe》
(構成・演出・振付：笠井叡)
東京グローブ座(東京)

1999

《Yes, No, Yes, No.》
(構成・演出：笠井叡)
世田谷パブリックシアター(東京)

Blood is a special kind of juice. Akira Kasai

When creating new works from scratch, one has to start with laying out themes or concepts. Every time I am faced with such a situation, I am always taken back to when I started to dance. I wonder if I have never really fallen out of the primitive stage of dance: the idea that "the artist is the work itself".
It was the year before Tatsumi Hijikata made *Rosy Dance* — *A LA MAISON DE M. CIVECAWA*. So the following conversation must have happened around 1964. Hijikata was 36 and I was 21 years old.

Hijikata "Kasai, in the end it is words."
Kasai "....."
Hijikata "Butoh is anchored by words."
Kasai "..... OK. You mean words are merged with flesh and become body."
Hijikata fell silent after that.

Blood is a special kind of juice.
The beauty of Izanami, princess fallen down to the underworld, is her being a vampire of words. To spin the universal Moebius strip which claims that "the body is a work of art": through the paternal and maternal voice of the Japanese language, flesh is woven, words become flesh. Nothing can be done but to keep producing, day after day, the membrane that separates lies and the truth.
All because the princess drinks the blood of a thousand people in one day.

.....

Director's Biography

Akira Kasai

Akira Kasai was born on November 25, 1943, and played a major role, along with Kazuo Ohno and Tatsumi Hijikata in the creation of Butoh dance. With representative solo choreographies such as *Crucified Madonna*, *Invitation for Butoh Banquet*, *Tannhauser* and *Chigo no Soshi* among others, Kasai is also the founder (in 1971) of the dance company "Tenshikan (Angels' Hall)". From 1979 to 1985 he lived in West Germany, where he devoted himself to the study of Rudolf Steiner's Eurythmy. Not only was a great part of the work he produced after his return to Japan a form of eurythmy, but he also created a Eurythmy School in 1990. In 1993, with the production of his *Seraphita — woman with mirror genitalia*, Kasai officially resumed his activities as a Butoh dancer. His masterpiece *Pollen Revolution* has been staged in various cities around the world, and in 2009 he toured Italy with his "AKIRA KASAI Eurythmy Company". Within his Dance Space "Generis", Kasai has produced pieces such as *Rhinoceros* and *Carmina Burana*, among others. He is the author of books such as *Angel Theory*, *Twilight of the Gods*, *Holly Spirit Butoh* and the picture books *Androgyny Dance*, *Galaxy Revolution* and *danse double* (in collaboration with Chikashi Kasai).



《透明迷宮》/ *Crystal Labyrinth* (2008) photo: Usamu Awane



《Yes, No, Yes, No.》/ *Yes, No, Yes, No.* (1999) photo: Sakae Oguma



《病める舞姫》/ *La Danseuse malade (Sickly Dancing Princess)* (2002) photo: Teijiro Kamiyama

Selected Works

2008

Crystal Labyrinth
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
Theatre Tram (Tokyo)

2002

Galaxy Project
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
Setagaya Public Theatre (Tokyo)

2001

Pollen Revolution
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
Theatre Tram (Tokyo)

2000

Spinning Spiral Shaking Strobe
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
The Globe Tokyo (Tokyo)

1999

Yes, No, Yes, No.
(Concept, Direction: Akira Kasai)
Setagaya Public Theatre (Tokyo)

「血は特別のジュースだ。」 笠井 叡

まだ、形にならない新作を創り始めるときに、外的な状況から、テーマとかコンセプトかを、明らかにしなければならなくなる。そのたびに、決して自分がダンスを始めたときの出発に引き戻されるのだ。結局、私は「作者が作品である」という、ダンスの始原的な状況から、1歩も出ることがなかったのではない。

あれは土方巽氏が「バラ色ダンスー溢澤さんの家の方へ」という作品を作っていた前年のことであるから、次の電話での会話は、1964年の頃のこと、土方巽氏が36歳、私が21歳のときのことだ。

土方「笠井君、結局言葉なんだよ」
笠井「、、、、、、、、」
土方「言葉で支えられてるんだ、舞踊は」
笠井「、、、、、、分りました。言葉が受肉して、カラダになるということですね」
この私の言葉に対して、土方巽氏はその後、沈黙した。

血は特別のジュースだ。
黄泉の国にまで落ちていったイザナミの尊は、言葉の吸血姫である。
「カラダが作品である」という宇宙的なメビウスの輪を紡ぐために、カラダの筋肉が日本語の父声と母声によって、編みあげられながら、言葉が肉となり、日々、虚と美の皮膜を、生み出し続けるしかないのだろう。
姫は1日、1000人の血を飲むというのだから。

.....

演出家略歴

笠井 叡

1943年11月25日生まれ。大野一雄氏、土方巽氏とともに舞踏創成の一翼を担う。《磔刑聖母》、《舞踏への招宴》、《タンホイザー》、《雅児の草子》等の舞踏ソロ作品を発表し、1971年に「天使館」を設立する。1979～1985年西ドイツ留学、ルドルフ・シュタイナーの創始したオイリュトミーを研究。帰国後数多くのオイリュトミー作品を発表し、1990年にオイリュトミー学校を開校。1993年、《セラフィータ ― 鏡の性器を持つ私の女》を発表し、舞踏活動を再開。代表作《花粉革命》は世界各都市で上演される。2009年AKIRA KASAIオイリュトミーカンパニーでイタリア・ツアー、笠井叡プロデュース空間「Generis」を開始し、《犀》、《カルミナ・ブラーナ》等の作品を発表。著書に『天使論』、『神々の黄昏』、『聖霊舞踏』（いずれも現代思潮社刊）、写真集『アンドロギニー・ダンス』、『銀河革命』、『danse double』（笠井爾示共著）。



《花粉革命》/ *Pollen Revolution* (2003) photo: Toshihiro Shimizu

主な公演歴

2008

《透明迷宮》
(構成・演出・振付：笠井叡)
シアタートラム(東京)

2002

《銀河計画》
(構成・演出・振付：笠井叡)
世田谷パブリックシアター(東京)

2001

《花粉革命》
(構成・演出・振付：笠井叡)
シアタートラム(東京)

2000

《Spinning Spiral Shaking Strobe》
(構成・演出・振付：笠井叡)
東京グローブ座(東京)

1999

《Yes, No, Yes, No.》
(構成・演出：笠井叡)
世田谷パブリックシアター(東京)

Blood is a special kind of juice. Akira Kasai

When creating new works from scratch, one has to start with laying out themes or concepts. Every time I am faced with such a situation, I am always taken back to when I started to dance. I wonder if I have never really fallen out of the primitive stage of dance: the idea that "the artist is the work itself".
It was the year before Tatsumi Hijikata made *Rosy Dance* — *A LA MAISON DE M. CIVECAWA*. So the following conversation must have happened around 1964. Hijikata was 36 and I was 21 years old.

Hijikata "Kasai, in the end it is words."
Kasai "....."
Hijikata "Butoh is anchored by words."
Kasai "..... OK. You mean words are merged with flesh and become body."
Hijikata fell silent after that.

Blood is a special kind of juice.
The beauty of Izanami, princess fallen down to the underworld, is her being a vampire of words.
To spin the universal Moebius strip which claims that "the body is a work of art": through the paternal and maternal voice of the Japanese language, flesh is woven, words become flesh.
Nothing can be done but to keep producing, day after day, the membrane that separates lies and the truth.
All because the princess drinks the blood of a thousand people in one day.

.....

Director's Biography

Akira Kasai

Akira Kasai was born on November 25, 1943, and played a major role, along with Kazuo Ohno and Tatsumi Hijikata in the creation of Butoh dance. With representative solo choreographies such as *Crucified Madonna*, *Invitation for Butoh Banquet*, *Tannhauser* and *Chigo no Soshi* among others, Kasai is also the founder (in 1971) of the dance company "Tenshikan (Angels' Hall)". From 1979 to 1985 he lived in West Germany, where he devoted himself to the study of Rudolf Steiner's Eurythmy. Not only was a great part of the work he produced after his return to Japan a form of eurythmy, but he also created a Eurythmy School in 1990. In 1993, with the production of his *Seraphita — woman with mirror genitalia*, Kasai officially resumed his activities as a Butoh dancer. His masterpiece *Pollen Revolution* has been staged in various cities around the world, and in 2009 he toured Italy with his "AKIRA KASAI Eurythmy Company". Within his Dance Space "Generis", Kasai has produced pieces such as *Rhinoceros* and *Carmina Burana*, among others. He is the author of books such as *Angel Theory*, *Twilight of the Gods*, *Holly Spirit Butoh* and the picture books *Androgyny Dance*, *Galaxy Revolution* and *danse double* (in collaboration with Chikashi Kasai).



《透明迷宮》/ *Crystal Labyrinth* (2008) photo: Usamu Awane

Selected Works

2008

Crystal Labyrinth
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
Theatre Tram (Tokyo)

2002

Galaxy Project
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
Setagaya Public Theatre (Tokyo)

2001

Pollen Revolution
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
Theatre Tram (Tokyo)

2000

Spinning Spiral Shaking Strobe
(Concept, Direction, Choreography: Akira Kasai)
The Globe Tokyo (Tokyo)

1999

Yes, No, Yes, No.
(Concept, Direction: Akira Kasai)
Setagaya Public Theatre (Tokyo)



《Yes, No, Yes, No.》/ *Yes, No, Yes, No.* (1999) photo: Sakae Oguma



《病める舞姫》/ *La Danseuse malade (Sickly Dancing Princess)* (2002)
photo: Teijiro Kamiyama



アントン・チェーホフ “かもめ”

Нина, вы опять...

Люди, львы, орлы и куропатки, рогатые олени, гуси, пауки, молчаливые рыбы,

обитавшие в воде, морские звезды и те, которых нельзя было видеть глазом, словом, все жизни, все жизни, все жизни, свершив печальный круг, утасли. Уже тысячи веков, как земля не носит на себе ни одного живого существа, и эта бедная луна напрасно зажигает свой фонарь. На дугу уже не просыпаются с криком журавли, и майских жуков не бывает слышно в липовых рощах. Холодно, холодно, холодно. Пусто, пусто, пусто. Страшно, страшно, страшно.

Anton Chekhov

CHITEN

人も、ライオンも、鷲も、雷鳥も、角を生やした鹿も、

Только то прекрасно, что серьезно.
Как вы бледны!

真剣なものだけが美しい。
なんて言い癖をしているの!

Кто там?
Вы, Яков?

Точно так.

CHITEN KYOTO

ヘリオトロープの匂いがする。

Вечер такой славный!
Слышите, господа, поют?
Как хорошо!

三浦基 / 地点

再創作 / Re-Creation

《かもめ》

@京都芸術センター 和室「明倫」、ART COMPLEX 1928

Motoi Miura / Chiten

The Seagull

Kyoto Art Center Japanese-style room "Meirin", ART COMPLEX 1928

【京都芸術センター 和室「明倫」 / Kyoto Art Center Japanese-style room "Meirin"】

9.28 [Wed] 19:30- 9.29 [Thu] 19:30-★ 9.30 [Fri] 17:00-

10.1 [Sat], 10.2 [Sun], 10.3 [Mon], 10.4 [Tue], 10.6 [Thu] 19:30-

10.7 [Fri] 17:00- 10.8 [Sat] 19:30- 10.9 [Sun] 17:00- 10.10 [Mon] 19:30-

【ART COMPLEX 1928】

10.13 [Thu], 10.14 [Fri] 19:30- 10.15 [Sat] 15:00- / 19:30- 10.16 [Sun] 15:00-

上演時間 / duration = 85 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

※開場は開演の15分前です。※未就学児入場不可。

※The theater opens 15 min. prior to the performance. ※Children under school age are not accepted into the theaters

“だから、新しい形式が必要なんですよ。”

《かもめ》は京都に棲み、あっという間に増殖する。

“What we need is a new kind of theatre.”

The Seagull proliferates throughout Kyoto in the blink of an eye.

昨年《——ところでアルトーさん、》で演劇の力をまざまざと見せつけた「地点」が、再びKYOTO EXPERIMENTで新たな取り組みにチャレンジする。2007年からおよそ2年間かけて制作された「地点」によるチェーホフ四大戯曲連続上演シリーズで得た成果を受け、その一つである《かもめ》を装いも新たに、全く異なるスタイルの2会場で行われる。緊密な和室空間と、近代建築の意匠をまとった劇場に出没する《かもめ》は、それぞれの空間に応じて自在に伸縮する。2会場あわせた総ステージ数は17回となり、フェスティバルの会期ほぼ全てを貫くかたちで上演される。京都に根を張り活動する「地点」の存在感を、改めて印象づけることになるだろう。

Last year, with *And Then Mr. Artaud*, Chiten made a bright display of their dramatic skills and their powerful staging. This year they are back at KYOTO EXPERIMENT with a challenging new piece. Starting in 2007 and continuing for two years, Chiten undertook the major project of staging a series called “The four great masterpieces by Chekhov”. *The Seagull*, one of the four plays, has been re-imagined for these two venues that are completely different. By means of staging *The Seagull* — a title that brings to mind the ever propagating animal — in different spaces around Kyoto, such as the intimate space of a tatami room or the theater of a modern work of architecture, they aim to adapt their plays to these places. A total of 17 performances at two venues will run throughout the festival. The presence of Chiten here will surely impress audiences anew.

原作：アントン・チェーホフ / 演出：三浦基 / 翻訳：神西清 / 出演：安部聡子、石田大、窪田史恵、河野早紀、小林洋平 / 舞台監督：大鹿展明 / 美術：杉山至+鴉屋 / 特殊装置：石黒猛 / 音響：堂岡俊弘 / 照明：宮島靖和 (RYU) / 衣裳：堂本教子 / テクニカル・コーディネーター：關秀哉 (RYU) / 宣伝美術：相模友士郎 / 制作：田嶋結菜 / 製作：地点 / 共同製作：KYOTO EXPERIMENT / 助成：芸術文化振興基金、EU・ジャパンフェスト日本委員会 / 京都芸術センター制作支援事業 / 共催：KYOTO EXPERIMENT / 提携：ART COMPLEX 1928 / 主催：合同会社地点

Text: Anton Chekhov / Direction: Motoi Miura / Translation: Kiyoshi Jinzai / with: Satoko Abe, Dai Ishida, Shie Kubota, Saki Kohno, Yohei Kobayashi / Stage Manager: Nobuaki Oshika / Stage Design: Itaru Sugiyama + Karasuya / Special Device: Takeshi Ishiguro / Sound: Toshihiro Dooka / Lighting: Yasukazu Miyajima (RYU) / Costume: Kyoko Domoto / Technical Coordinator: Hideya Seki (RYU) / Advertising Art: Yujiro Sagami / Production Coordinator: Yuna Tajima / Produced by Chiten / Co-produced by KYOTO EXPERIMENT / Supported by Japan Arts Fund and EU-Japan Fest Japan Committee / Kyoto Art Center "Artist in Studios" Program / Co-presented by KYOTO EXPERIMENT, ART COMPLEX 1928 / Presented by Chiten (LLC)

三浦基

1973年生まれ。桐朋学園大学演劇科・専攻科卒業。1996年、「青年団」入団、演出部所属。平田オリザの演出助手、こまばアゴラ劇場の常勤スタッフとして運営に関わる。1999年より2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在する。2001年帰国、「地点」の活動を本格化。国内外を問わず同時代の先鋭的な戯曲に取り組みコン・フォッセ、デイヴィッド・ハロワーなど、日本初上演を手がけた。2005年4月、「青年団」より独立。同年、「利賀演出家コンクール」優秀賞受賞。2006年には「カイロ国際実験演劇祭」においてベスト・セノグラフィー賞受賞。2007年より「地点」によるチェーホフ四大戯曲連続上演）に取り組み、同年《桜の園》にて「文化庁芸術祭」新人賞受賞。2010年に初の著作となる演出論『おもしろければOKか？現代演劇考』（五柳書院）出版。2008年度京都市芸術文化特別奨励者。2010年度京都府文化賞奨励賞受賞。現在、京都造形芸術大学舞台芸術学科客員教授。

団体の紹介

地点

演出家・三浦基が代表をつとめる。多様なテキストを用いて、言葉や身体、物の質感、光・音などさまざまな要素が重層的に関係する演劇独自の表現を生み出すために活動している。劇作家が演出を兼ねることが多い日本の現代演劇において、演出家が演出業に専念するスタイルが独特。京都を拠点としながら、KAAT神奈川芸術劇場のオープニングラインナップにプログラムされるなど、旺盛に活動を展開している。海外でも公演を行い、2011年には《ワーニャ伯父さん》《桜の園》の二本立て公演をモスクワで実現し、高い評価を得た。これまでの作品に《るつぼ》（「カイロ国際実験演劇祭」参加、ベスト・セノグラフィー賞受賞）、《——ところでアルトーさん、》（「フェスティバルトーキョー」、KYOTO EXPERIMENT参加）など。



《——ところでアルトーさん、》 / —— *And Then Mr. Artaud*, (2010) photo: Tsukasa Aoki

2011

《Kappa / 或小説》
 (原作：芥川龍之介 / 戯曲：永山智行 / 演出：三浦基)
 KAAT神奈川芸術劇場(神奈川)
 びわ湖ホール(滋賀)

《ワーニャ伯父さん / 桜の園》
 (原作：アントン・チェーホフ / 翻訳：神西清 / 演出：三浦基)
 メイエルホリド・センター(モスクワ、ロシア)

2010

《——ところでアルトーさん、》
 (テキスト：アントン・アルトー / 翻訳・構成：宇野邦一 / 演出：三浦基)
 京都芸術センター フリースペース(京都)
 東京芸術劇場 小ホール1(東京)

《あたしちゃん、行く先を言ってー太田省吾全テキストよりー》
 (構成・演出：三浦基)
 吉祥寺シアター(東京)

2007

《かもめ》
 (原作：アントン・チェーホフ / 翻訳：神西清 / 演出：三浦基)
 びわ湖ホール(滋賀)

Motoi Miura

Born in 1973, Miura graduated from the Department of Drama of Toho Gakuen College of Drama and Music. In 1996 he joined the directing department of "Seinendan" Theater Company, where he worked as an assistant director to Oriza Hirata and as full-time staff at Komaba Agora Theatre. After spending two years in Paris as a researcher for the Agency of Cultural Affairs, he returned to Japan in 2001 and devoted himself to the activities of his theatre unit "Chiten". He has worked on radical contemporary plays from inside and outside Japan, and staged the Japanese premieres of Jon Fosse and David Harrower's work, among others. In April 2005 Miura left "Seinendan" and received the Outstanding Performance Award at the "Toga Director Contest". In 2006 he was awarded the Best Scenography Award at the "Cairo International Festival" for Experimental Theatre. Since 2007, the year he was granted the New Director Award at "the Agency for Cultural Affairs' Arts Festival" with Chekhov's *The Cherry Orchard*, Miura started producing Chekhov's four major plays. In 2008 he received the Special Promotion for Arts and Culture Award from the City of Kyoto and in 2010 the Kyoto Prefecture Culture Award. In the same year his first book on production theory, *Is just being interesting OK?*, was published. At present, he is a visiting professor at the Department of Performing Arts in Kyoto University of Art and Design.

Company's Biography

Chiten

Directed by Motoi Miura, Chiten adopts various texts to produce expressive theater where words, light, sound, texture, and the human body converges on stage. While based in Kyoto, Chiten has been very active elsewhere, and has even been programmed in the opening lineup of Kanagawa Arts Theatre. They have also taken their performances beyond Japanese frontiers, presenting their versions of *Uncle Vanya* and *The Cherry Orchard* in Moscow, where their work was highly acclaimed. Among their productions are *The Crucible*, which earned them the Best Scenography Prize at the "Cairo International Festival" for Experimental Theatre, and *And Then Mr. Artaud*, the piece they presented in the first version of KYOTO EXPERIMENT.



《かもめ》 / *The Seagull* (2007)

2011

Kappa / A Novel
 [Text: Ryunosuke Akutagawa / Adaptation: Tomoyuki Nagayama / Direction: Motoi Miura]
 KAAT-Kanagawa Arts Theatre (Kanagawa)
 Biwako Hall (Shiga)

Uncle Vanya and The Cherry Orchard
 [Text: Anton Chekhov / Translation: Kiyoshi Jinzai / Direction: Motoi Miura]
 Meyerhold Center (Moscow, Russia)

2010

And Then Mr. Artaud,
 [Text: Antonin Artaud / Translation, Concept: Kunichi Uno / Direction: Motoi Miura]
 Kyoto Art Center (Kyoto)
 Tokyo Metropolitan Art Space Small Hall (Tokyo)

Hey Cutesy Little Me, Tell Me Where We Are Going - From the full text of Shogo Ota
 [Concept, Direction: Motoi Miura]
 Kichijoji Theatre (Tokyo)

2007

The Seagull
 [Text: Anton Chekhov / Translation: Kiyoshi Jinzai / Direction: Motoi Miura]
 Biwako Hall (Shiga)



《Kappa / 或小説》 / *Kappa / A Novel* (2011) photo: Takehiko Hashimoto



《あたしちゃん、行く先を言ってー太田省吾全テキストよりー》 / *Hey Cutesy Little Me, Tell Me Where We Are Going - From the full text of Shogo Ota* (2010) photo: Tsukasa Aoki

ヤニス・マンダフニス/ファブリス・マズリア

日本初演 / Japan Premiere

《P.A.D.》

@京都芸術センター フリースペース

Ioannis Mandafounis/Fabrice Mazliah

P.A.D.

Kyoto Art Center Multi-purpose Hall

10.14 [Fri] 20:15- 10.15 [Sat] 18:00- / 20:15-

10.16 [Sun] 16:00- / 18:00-★

上演時間 / duration = 60 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

※開場は開演の15分前です。

※The theater opens 15 min. prior to the performance.

四方を壁に囲まれた舞台にたち上がる、
あまりにも近い“近さ”への問いと“他者”へのまなざし。

Question of “intimacy” and how we perceive “others” play out
on the stage surrounded on all four sides by walls.

ヨーロッパ新世代のダンスの旗手が送り出す、果敢でスリリングなパフォーマンス!

舞台上で繰り広げられるのは、あやうい彼らの<近さ>が私たちのカラダの知覚を揺るがし、そしてゆがめる、緊密な空間の壮大な実験。

「フォーサイズ・カンパニー」のダンサーとしても知られ、幼少期から互いを知るヤニス・マンダフニスとファブリス・マズリア、この二人の長きにわたる共犯関係は、“近さ”への問いと“他者”へのまなざしについて、極めて巧みな振付としての習作を生み出した。

引き寄せる力と引き離す力、支配するものと支配されるもの、それぞれの役割が入れ替わりながら展開し、「その境界はなにか?」を問いかける。それは、彼らの間にも、あるいは彼らと観客の間にも生じる、時に“近くて遠い”不安定な“距離”。この作品《P.A.D.》は、“知覚”、“意思”、そして“解釈”にまつわる観念に横たわる、身体そのものに迫る深遠な問いへと観客をいざなうだろう。

構成・演出・出演：ヤニス・マンダフニス、ファブリス・マズリア / 舞台監督：マックス・シューベルト / 協力：フォーサイズ・カンパニー / 製作：アテネ & エピダウロス・フェスティバル2007 / 主催：KYOTO EXPERIMENT

This work by a bright new light of European dance is challenging and thrilling. The uneasy intimacy of the performers shakes and distorts our perception of the body. It is a grand experiment in a tightly-packed space. The complicity of Ioannis Mandafounis and Fabrice Mazliah, who have known each other since childhood and have participated in works of “The Forsythe Company”, gives birth to such an intricately choreographed work questioning “intimacy” and how we perceive “others”. Seated behind a railing on the four sides of the stage, the spectators look down on the performers, in an experiment on closeness that destabilises, unsettles and distorts the perception of bodies caught in an ambiguous relationship. Attraction and repulsion.

The controller and the controlled. By constantly switching performer's role, the work asks a question of boundaries. Such an uneasy separation, near but far, applies not only between the two dancers but also between them and the audience. P.A.D. shows us the hole in the middle of these notions of “perception”, “intention” and “interpretation”, that it is impossible to fill.

Concept, Direction, Dance: Ioannis Mandafounis, Fabrice Mazliah / Technical Director: Max Schubert / Supported by The Forsythe Company / Produced by Athens & Epidaurus Festival 2007 / Presented by KYOTO EXPERIMENT



ヤニス・マンダフニス

1981年アテネ生まれ。アテネ国立学校およびパリ国立高等音楽・舞踊学校でダンスを学ぶ。振付家としてフリーで活躍する以前は、「ヨーテポリバレエ」および「ネザールランド・ダンス・シアターII」に在籍。2004年にアテネで「レムリウス・カンパニー」を設立、「カラマタ国際ダンスフェスティバル」や「アテネダンスフェスティバル」で作品を発表している。2005年には「フォーサイズ・カンパニー」のメンバーとなり、現在でも定期的にゲスト出演している。2007年にファブリス・マズリアとのデュエット作品《P.A.D.》を制作。「アテネ国際ダンスフェスティバル」やバーデンバーデン美術館、モウソントゥルム・フランクフルト、クンステンフェスティバルデザール2009(ブリュッセル)にて発表している。「フォーサイズ・カンパニー」作品《HUE》にも出演し、「ポッケンハイム・デボ」(フランクフルト)、「adc」(ジュネーブ)、モンペリエダンスフェスティバルで同作品を発表。2008年にはドレスデン舞踊大学のために短編作品を制作。同大学では日本の武術である武道のワークショップも指導した。現在では、日本で学んだ武道を様々な場所で指導している。

ファブリス・マズリア

1972年ジュネーブ生まれ。故郷のジュネーブにあるダンス学校を経て、アテネ国立学校、ルードラ・ベジャール・ローザンヌバレエ学校にてダンスを学ぶ。「ハリス・マンダフニス・ダンス・カンパニー」(アテネ)、「ネザールランド・ダンス・シアター」(オランダ)に在籍した後、1997年にウィリアム・フォーサイズが率いる「フランクフルトバレエ団」に入団。2005年以降は、「フォーサイズ・カンパニー」で活躍している。《My left pussy foot》(TAT劇場、1999)、ソロ作品《Vu dici》(TAT劇場、2000)ほか、数多くの作品を制作。映画監督ルッツ・グレゴールと短編ダンス映画『meat me』を制作。2007年、アテネフェスティバルのディレクター、ヨルゴス・ラコスの働きかけでヤニス・マンダフニスと《P.A.D.》を共同制作。同年12月には「フォーサイズ・カンパニー」の6人のメンバーと《HUE》を共同制作。その後、ソロ作品バージョン《HUE score -6》(2009)を制作、2010年にゲーテ・インスティテュート/ドイツ文化センター(日本)で発表。《ZERO》(2009)は、メイ・ザーヒおよびヤニス・マンダフニスとのコラボレーションである。現在、プロおよびアマチュアダンサーであるだけでなく、造形美術のアーティストに向けたインプロビゼーションのワークショップを世界各国で指導している。

ヤニス・マンダフニス/ファブリス・マズリア www.mamza.net



《P.A.D.》/P.A.D. (2007) photo: Evie Filaktou

2011

《Cover up》

(構成・演出・出演：ヤニス・マンダフニス、ファブリス・マズリア、メイ・ザーヒ)

2009

《ZERO》

(構成・演出・出演：ヤニス・マンダフニス、ファブリス・マズリア、メイ・ザーヒ)

《HUE score -6》

(演出・出演：ファブリス・マズリア)

2007

《HUE》

(構成・演出・出演：シリル・ポルディー、フランチェスカ・カロティ、ヤニス・マンダフニス、ファブリス・マズリア、ニコール・ペイズル、ヤスタケ・シマジ、アンドレ・ザバラ)

Ioannis Mandafounis

Born in Athens in 1981, Ioannis Mandafounis studied dance at the National school of Athens and at the conservatoire de Paris. Before becoming a freelance choreographer he was part of the "Gothenburg Opera Ballet", the "Nederlands Dans Theater II" and in 2005 became member of the "Forsythe Company" where he still guests on a regular basis. In 2004 he formed the "Lemurius company" in Athens with which he creates and presents several works for festivals like the "Kalamata International Festival" or the "Athens dance festival". Together with Fabrice Mazliah he created in 2007 the duet *P.A.D.*, shown in the "Athens International Festival" in the Baden-Baden Kunsthalle at the Mousonturm in Frankfurt and will be part of the 2009 edition of the "Kunstenfestivaldesarts" in Brussels, and the work *HUE* produced by the "Forsythe company" for the "Bockenheimer Depot" which is presented as well at the "Adc" in Geneva and at the "Montpellier Dance Festival". In 2008 he created a short work for the Palluca Schule in Dresden, where he gives also a Budo workshop, an ancient form of martial art that he currently studies in Japan and teaches around the world.

Fabrice Mazliah

Born in Geneva in 1972, Fabrice Mazliah studied dance in his hometown at the Ecole de danse de Geneve and then at the National Dance School of Athens and at the Rudra B art Atelier in Lausanne. He was part of the "Harris Mandafounis Dance Company" (Athens) and the "Nederlands Dans Theater" (Holland), before joining in 1997 the "Ballett Frankfurt" directed by William Forsythe and continued in 2005 with the "Forsythe Company". Fabrice has been creating through the years numerous projects and choreographic works like, *My left pussy foot* [1999] TAT Ballett Frankfurt, the solo *Vu dici* [2000] TAT Frankfurt. In collaboration with the director Lutz Gregor, the three of them created a choreographic short movie *meat me*. Then *P.A.D.* [2007] in collaboration with Ioannis Mandafounis and commissioned by the Athens Festival and its Director Yorgos Loukos. In December 2007 the work *HUE* was created for the Forsythe Company, in collaboration with six artists from the group. He has created from this a solo adaptation called *HUE score -6* [2009] presented in Japan by the Goethe Institut in 2010. *ZERO* [2009] was created in collaboration with May Zarhy and Ioannis Mandafounis. He currently teaches several Ateliers and improvisation workshop in different countries for professional and non-professional dancers, as well as for visual-art students.

Ioannis Mandafounis/Fabrice Mazliah www.mamza.net



《ZERO》/ZERO (2009) photo: Nikos Dragonas



《Cover up》/Cover up (2011) photo: Dominik Mentzos



《Cover up》/Cover up (2011) photo: Dominik Mentzos



《HUE score -6》/HUE score-6 (2009) photo: Yoichi Tsukada

2011

《Cover up》

[Concept, Direction and performed by Ioannis Mandafounis, Fabrice Mazliah, May Zarhy]

2009

《ZERO》

[Concept, Direction and performed by Ioannis Mandafounis, Fabrice Mazliah, May Zarhy]

《HUE score -6》

[A work by and with Fabrice Mazliah.]

2007

《HUE》

[Concept, Direction and performed by Cyril Baldy, Francesca Caroti, Ioannis Mandafounis, Fabrice Mazliah, Nicole Peisl, Yasutake Shimaji, Ander Zabala]

石橋義正(キュピキュピ) / 京都創生座 番外編

新作 | 世界初演 / New Creation | World Premire

《伝統芸能バリアブル》

@京都芸術劇場 春秋座

Yoshimasa Ishibashi (Kyupi Kyupi) / Kyoto Soseiza Extra

VARIABLES

Kyoto Art Theater Shunjuza

10.16 [Sun] 13:00 - 17:00 ★

上演時間 / duration = 75 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

※開場は開演の30分前です。※未就学児入場不可。

※The theater opens 30 min. prior to the performance. ※Children under school age are not accepted into the theaters

エロティックでキッチュな才能「キュピキュピ」×伝統芸能に生きる女たち、
京都でしかありえない奇跡的邂逅！Erotic and kitsch talent x women of the traditional performing arts
A miracle encounter that could only happen in Kyoto!

映像、演出を手がける石橋義正、造形作家の木村真東、グラフィックデザイナーの江村耕市の3人で構成される、映像&パフォーマンスユニット「キュピキュピ」。京都を中心に、ポンピドゥーセンター(パリ)、ニューヨーク近代美術館、テート・モダン(ロンドン)など国内外で映像やインスタレーション作品を発表。また映像と照明のテクノロジーを駆使し、演奏とダンスを交えたライブパフォーマンス《キャバロティカ》もART COMPLEX 1928(京都)でのロングランをはじめ、世界各地で上演され好評を博している。そんな彼らが、伝統芸能の新たな魅力を発信するプロジェクト「京都創生座」の番外編として、伝統芸能に生きる女性たちのために新作を送り出す。

昨年の大規模な個展での興奮冷めやらぬ中、浪曲や日本舞踊、和太鼓といった芸を通して歴史を身体の奥深くに織り込んだ女性たちとの“逢瀬”は、いかなるサイケデリックな反応を起こすのか!?

構成・演出：石橋義正(キュピキュピ) / 出演：ダンスー高原伸子、高橋千佳、皆川まゆむ、パフォーマンス(映像)ー青木涼子、能楽ー鷲尾世志子、立花春寿子、鶴澤光、高橋奈王子、日本舞踊ー尾上京、花柳双子、長唄三味線ー杵屋勝欣次、杵屋勝浩菜、杵屋浩扇、上七軒さと幸、浪曲ー春野恵子、一風亭初月、和太鼓ー田原由紀、大谷加奈子、依田美津穂、小林杏里、井上朋美(打打打団 天鼓) / ビジュアルデザイン：江村耕市(キュピキュピ) / 美術：木村真東(キュピキュピ) / 映像：キュピキュピ / 3D映像：ギャラクシーオペレーター / 振付：高原伸子 / ヘアメイク：針尾清光 / 特殊メイク：JIRO(自由廊) / 衣装デザイン・タイトルデザイン：船引亜樹 / 照明：川崎渉(RYU) / サウンドデザイン：丸山正浩(創影コーディネーション) / 特殊効果：伊井麻登、薬師寺三津秀 / 長唄監督：杵屋勝七郎 / テクニカルディレクター：關秀哉(RYU) / 舞台監督：串本和也(RYU) / 衣裳製作：岩崎晶子、チャコット / 制作：須知聡子(フィッシュヘッズ)、山本麻友美(京都芸術センター)、勝冶真美(京都芸術センター) / 宣伝写真：田中マサアキ / 企画：京都芸術センター / 制作：京都芸術センター、フィッシュヘッズ / 共同製作・共催：KYOTO EXPERIMENT / 主催：京都市

Kyoto based video & performance group Kyupi Kyupi consists of 3 members: director and video artist, Yoshimasa Ishibashi; sculptural artist, Mazuka Kimura; and graphic designer, Koichi Emura; and has introduced their video and installation work in Japan and overseas at places such as Center Pompidou (Paris), The Museum of Modern Art (New York), and Tate Modern (London). Their live performance *Cabarotica*, in which extremely manipulated video images and lighting accompanies dance and music, has succeeded in a long-run at ART COMPLEX 1928 and was well received internationally. This time, Kyupi Kyupi was commissioned to create a new piece for female artists in Japanese traditional performing arts. It is a part of “Kyoto Soseiza” program exploring the new appeal of Kyoto’s traditional arts. It is exciting to see how such a unique talent, known for creating highly technological, erotic and kitsch work, interact with traditional performing female artists and vice-versa.

Direction, Concept: Yoshimasa Ishibashi (Kyupi Kyupi) / Cast: Dance- Nobuko Takahara, Chika Takahashi, Mayumu Minakawa, Performance (Film)- Ryoko Aoki, Nohgaku- Yoshiko Washio, Kazuko Tachibana, Hikaru Uzawa, Naoko Takahashi, Nihonbuyo- Miyako Onoe, Soko Hanayagi, Nagauta Shamisen-Katsukinji Kineya, Katsuhirona Kineya, Kosen Kineya, Kamishichiken Satoyuki, Rokyoku-Keiko Haruno, Hazuki Ipputei, Wadaiko-Yuki Tabara, Kanako Otani, Mizuho Yoda, Anri Kobayashi, Tomomi Inoue (Dadadadan Tenko) / Visual Design: Koichi Emura (Kyupi Kyupi) / Art Direction: Mazuka Kimura (Kyupi Kyupi) / Video: Kyupi Kyupi / 3D image: Galaxy of Terror Co., Ltd / Choreography: Nobuko Takahara / Hair Makeup: Kiyomitsu Hario / Special Makeup: Amazing Studio JIRO / Costume Design, Title Design: Aki Funabiki / Lighting: Wataru Kawasaki (RYU) / Sound Design: Masahiro Maruyama (Soei Coordination) / Special Effect: Masato Ii, Mitsuhide Yakushiji, Nagauta Supervisor: Katsushichiro Kineya / Technical Director: Hideya Seki (RYU) / Stage Manager: Kazuya Kushimoto (RYU) / Costume Production: Akiko Iwasaki, Chacott / Production manager: Satoko Suchi (Fish Heads), Mayumi Yamamoto (Kyoto Art Center), Mami Katsuya (Kyoto Art Center) / Concept: Kyoto Art Center / Production Managed by: Kyoto Art Center, Fish Heads / Co-Produced and Co-Presented by: KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto City

石橋義正

「キュビキュビ」主宰。映画監督。映像作家。1997年に製作した映画『狂わせたいの』はストックホルム国際映画祭正式出品、「第8回日本映画プロフェッショナル大賞」新人監督賞受賞。1998年より「キュビキュビ」の活動を開始。国内だけでなくニューヨーク、パリ、ロンドンなど海外でも展示会やライブ活動を続ける。2000年に異色のTV番組『パミリオン・プレジャー・ナイト』を製作。また2002年より製作を続ける短編シリーズ『オー!マイキー』が海外でも高い評価を得、2005年日経エンターテインメント「世界が認めた日本のヒットメーカーベスト100」にあげられる。

団体の紹介

キュビキュビ

1996年結成。京都を中心に活動する映像&パフォーマンスユニット。主宰で映像と演出を手がける石橋義正、造形作家の木村真東、グラフィックデザイナーの江村耕市の3人で構成される。ポンビドゥセンター、ニューヨーク近代美術館、テート・モダンなど国内外の現代美術にて映像やインスタレーション作品を出品。また同時に、映像と照明を制御し、ビジュアル性とエンターテインメント性の強いライブパフォーマンスも行っている。

京都創生座

京都創生座は、日本国内に現存する貴重な伝統文化・民族文化を発信し、将来に継承する拠点施設となる「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)」の実現を目指し、センター機能として想定する事業を先行的に試行することを目的として活動している。京都に拠点を置き、全国、世界にも目を向け、各地で伝統芸能の普及と活性化を目指しさまざまな活動に取り組む。また既存の分野や流派を超えた若手伝統芸能家を中心に具体的企画を進め、長い歴史に培われた伝統の中に新しい魅力を生み出す創造性と、京都から日本の伝統文化の復興を図るため意欲に満ちた舞台公演などの実施を積極的に行っている。



《キャバロティカ》/ CABAROTICA (2003) photo: Masaaki Tanaka

2010

《シッケモニカ》
(演出：キュビキュビ)
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(香川)

2004

《キュビキュビ グランド歌謡ショー
キャバロティカ》
(演出：キュビキュビ)
スパイラルホール(東京)

2003

《キャバロティカ》
(演出：キュビキュビ)
テート・モダン(ロンドン)

2000

《キュビキュビ・ジャンボリー・スーパー・
デラックス》
(演出：キュビキュビ)
キリンプラザ大阪(大阪)

1998

《歌謡ショー》
(演出：キュビキュビ)
カフェ・アンデパンダン(京都)

Yoshimasa Ishibashi

Founder of Kyupi Kyupi / Film Director / Film Maker

1997: Feature Film *Wanna Drive You Insane* was made into official selection of Stockholm International Film Festival and also won "The 8th Japanese Professional New Director Movie Awards".

1998: Founded "Kyupi Kyupi" has shown works in Japan and overseas including NY, Paris and London.

2000: Produced the unique TV program *Vermilion Pleasure Night*.

2002: Began producing TV series *Oh! Mikey*. The program was internationally well received and listed for 2005's Nikkei Entertainment "Internationally Acclaimed Japanese Hit Maker Best 100".

Company's Biography

Kyupi Kyupi

Founded in 1996. Based in Kyoto, the video & performance group consists of 3 members: director and video artist; Yoshimasa Ishibashi, sculptural artist; Mazuka Kimura, and graphic designer; Koichi Emura. The group has shown their video and installation work at venues in Japan and overseas such as the Center Pompidou, MoMA and Tate Modern. They also create live performances, which are highly entertaining, with dance and music, and accompanied by extremely manipulated video images and lighting.

Kyoto Soseiza

Kyoto Soseiza is a project aimed at preparing for the establishment of "The National Center of Japanese Traditional Performing Arts, Kyoto (tentative name)". It experiments with the kinds of projects that the center will likely be attempting – working with young artists, and beyond existing genres and schools of traditional performing arts in the hope of creating a new appeal for tradition built up over a long history. Kyoto Soseiza presents ambitious work which hopes to stimulate a renaissance of Japanese traditional culture from Kyoto.

2010

Sicke Monika
(Direction: Kyupi Kyupi)
Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art (Kagawa)

2004

Kyupi Kyupi Grand Kayo Show CABAROTICA
(Direction: Kyupi Kyupi)
Spiral Hall (Tokyo)

2003

CABAROTICA
(Direction: Kyupi Kyupi)
Tate Modern (London, UK)

2000

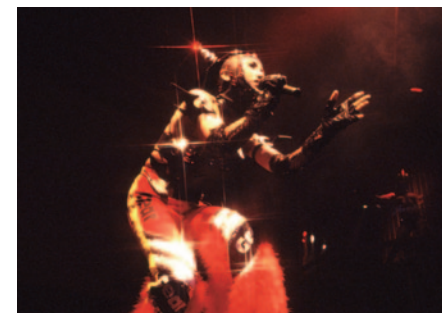
Kyupi Kyupi Jamboree Super Delux
(Direction: Kyupi Kyupi)
Kirin Plaza Osaka (Osaka)

1998

1st Live. Kayo Show
(Direction: Kyupi Kyupi)
Café Independants (Kyoto)



《キャバロティカ》/ CABAROTICA (2004) photo: Sakiko Nomura



《キュビキュビ・ジャンボリー・スーパー・デラックス》/ Kyupi Kyupi Jamboree Super Delux (2000) photo: Masaaki Tanaka



《キャバロティカ》/ CABAROTICA (2003) photo: Manabu Matsui, Miyuki Kawakatsu

高嶺格

《ジャパン・シンドローム》～step 1 球の裏側

@京都芸術センター ギャラリー

Tadasu Takamine

Japan Syndrome step 1 The other end of the ball

Kyoto Art Center Gallery

9.23[Fri] - **10.16**[Sun] 10:00-20:00

会期中無休

こんにちはブラジル。ありがとうジャパン。

Hello Brazil. Thank you Japan.

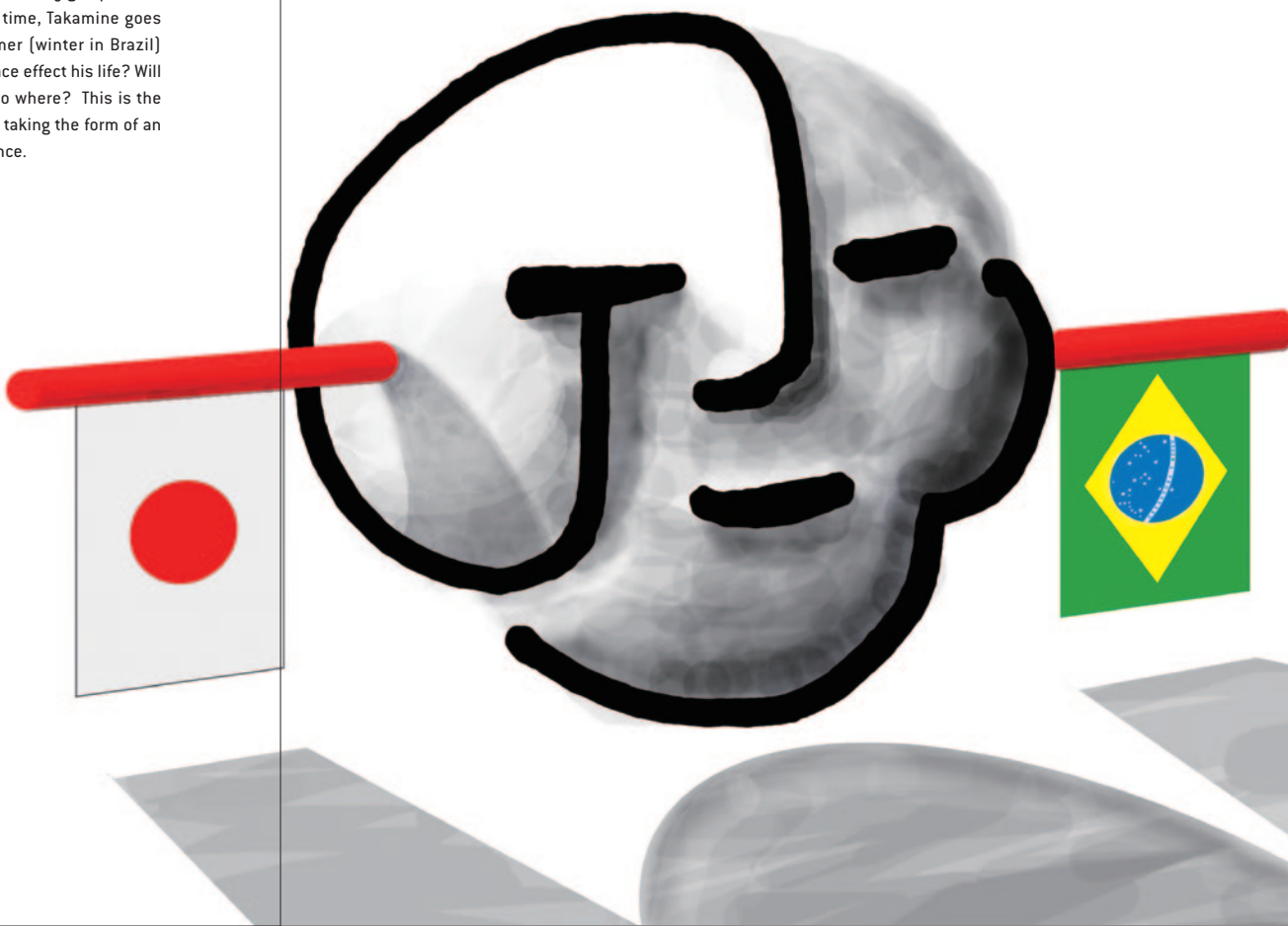
映像、パフォーマンス、舞台演出、インスタレーションなど、常にマルチメディアの地平を開拓し続ける高嶺格。使われるメディアや素材の多様さ、または表出されるエモーションの幅広さ。それらは意味として容易につかみきれず、しかしそれゆえに多くの者を惹き付けてやまない。

そんな高嶺が、ブラジルに行く。夏(ブラジルは冬)の一ヶ月間、家族と共に。この体験は高嶺の人生になにを与えるか？果たして彼は戻ってくるか？もし戻らないなら、彼はそこに何を見たのか？もし戻ったならば、どこに戻ってくるのか？このプロジェクトは3年に渡り継続される予定で、今回は最初の滞在をもとに「展覧会」として発表される。

主催：KYOTO EXPERIMENT

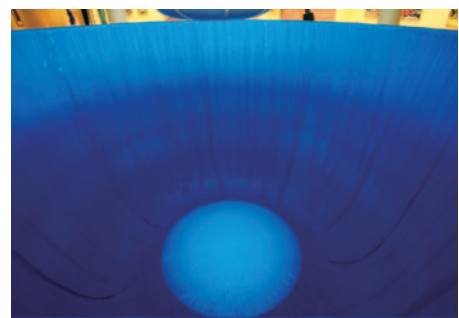
Tadasu Takamine has continued to push the horizon of multimedia art with video, performance, stage direction and installation etc. His wide range of media and the emotions he explores in his art are not easily grasped, but attract us for the same reason. This time, Takamine goes to Brazil for one month in the summer (winter in Brazil) with his family. How will this experience effect his life? Will he come back? If not, why? If yes, to where? This is the first production of the 3 year project, taking the form of an exhibition inspired by his first residence.

Presented by KYOTO EXPERIMENT



高嶺格

高嶺格は、パフォーマンス、ビデオ、インスタレーションなど多様な表現を行っているアーティストである。アメリカ帝国主義、身体障害者の性、在日外国人などの社会問題を扱った作品、また移民労働者を取り上げた作品などで知られる。彼の作品は、国／ジェンダー／言語など、社会を構成するものの矛盾や不和を、自らの身体を使った表現で明らかにしようとする。彼の表現は声高にメッセージを叫ぶものではないが、差別や偏見のもとに横たわる、権力や抑圧をあぶりだす。舞台演出を含む近年の作品では、自身の体が直接舞台上に現れることはない。しかしいかなる者と共同作業しようとも、高嶺の作品には、人間の身体が可能にする、画一化され得ない人間の野性的精神といったもの、あるいは熱狂的信頼関係といったものを見ることが出来る。



《日本の近代美術・2000》/ *Japanese Modern Art/2000* (2009)
photo: Kenji Hatakeyama



「高嶺格：とくよくみえない」展示風景 / *Takamine Tadasu: Too Far To See* (2011) photo: Tomoki Imai

2011

オペラ *The Opera Group* (Seven Angels)における舞台美術・衣装
ロイヤルオペラハウス(ロンドンほかイギリス7都市、イギリス)

《Melody♥Cup》

横浜赤レンガ倉庫(神奈川)
パトラバディシアター(バンコク、タイ)(2010)
AI・HALL(兵庫)(2009/2011)

「高嶺格：とくよくみえない」展

横浜美術館(神奈川)
広島市現代美術館(広島)
霧島アートの森(鹿児島)
アイコン・ギャラリー(バーミンガム、イギリス)

2010

「高嶺格：Good House, Nice Body ～いい家、よい体」展
金沢21世紀美術館(石川)

2008

「高嶺格[大きな休息]明日のためのガーデニング 1095m²」展
せんだいメディアテーク(宮城)

2007

《リバーシブルだよ、人生は。》
AI・HALL(兵庫)

2006

《アロマロア エロゲロエ》
AI・HALL(兵庫)

パフォーマンス(木村さん)
「クイアザグレブ」(ザグレブ、クロアチア)

Tadasu Takamine

Takamine works in various media such as performance, video, installation and more. Known for his social commentary on US imperialism, sexual issues of the disabled, foreigners residing in Japan and migrant workers, he reveals the conflict and dissension in society: nationality, gender and language etc, through his own body. Without being vociferous, his art uncovers the power and oppression that lies at the bottom of discrimination and prejudice. Although in his recent work, including stage direction, his own body is not visually present, the presence a human spirit that resists uniformity, and a fanatic relationship of trust are always perceptible in Takamine's work, no matter who he collaborates with.



《Good House, Nice Body：私を建て、そして通り過ぎていった者たち》/ *Good House, Nice Body: Those who built me and passed me by* (2010) photo: Keizo Kioku



「高嶺格[大きな休息]明日のためのガーデニング 1095m²」展 / *Takamine Tadasu: [BIG REST] Gardening for the Future 1095m²* (2008)
photo: Izuru Echigoya

2011

Opera Seven Angels by The Opera Group (Set and Costume Design)
Royal Opera House (London and 7 other cities in England)

Melody♥Cup

Yokohama Red Brick Warehouse (Kanagawa) (2011)
Patravadi Theater (Bangkok, Thailand) (2010)
AI HALL (Hyogo) (2009/2011)

Takamine Tadasu: Too Far To See (Exhibition)

Yokohama Museum of Art (Kanagawa)
Hiroshima City Museum of Contemporary Art (Hiroshima)
Kirishima Open-Air Museum (Kagoshima)
IKON Gallery (Birmingham, UK)

2010

Takamine Tadasu: Good House, Nice Body (Exhibition)

21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa (Ishikawa)

2008

Takamine Tadasu: [BIG REST] Gardening for the Future 1095m² (Exhibition)

Sendai Mediatheque (Miyagi)

2007

Life... which is Reversible

AI Hall (Hyogo)

2006

Aromaroa Erogeroe

AI Hall (Hyogo)

Kimura-san

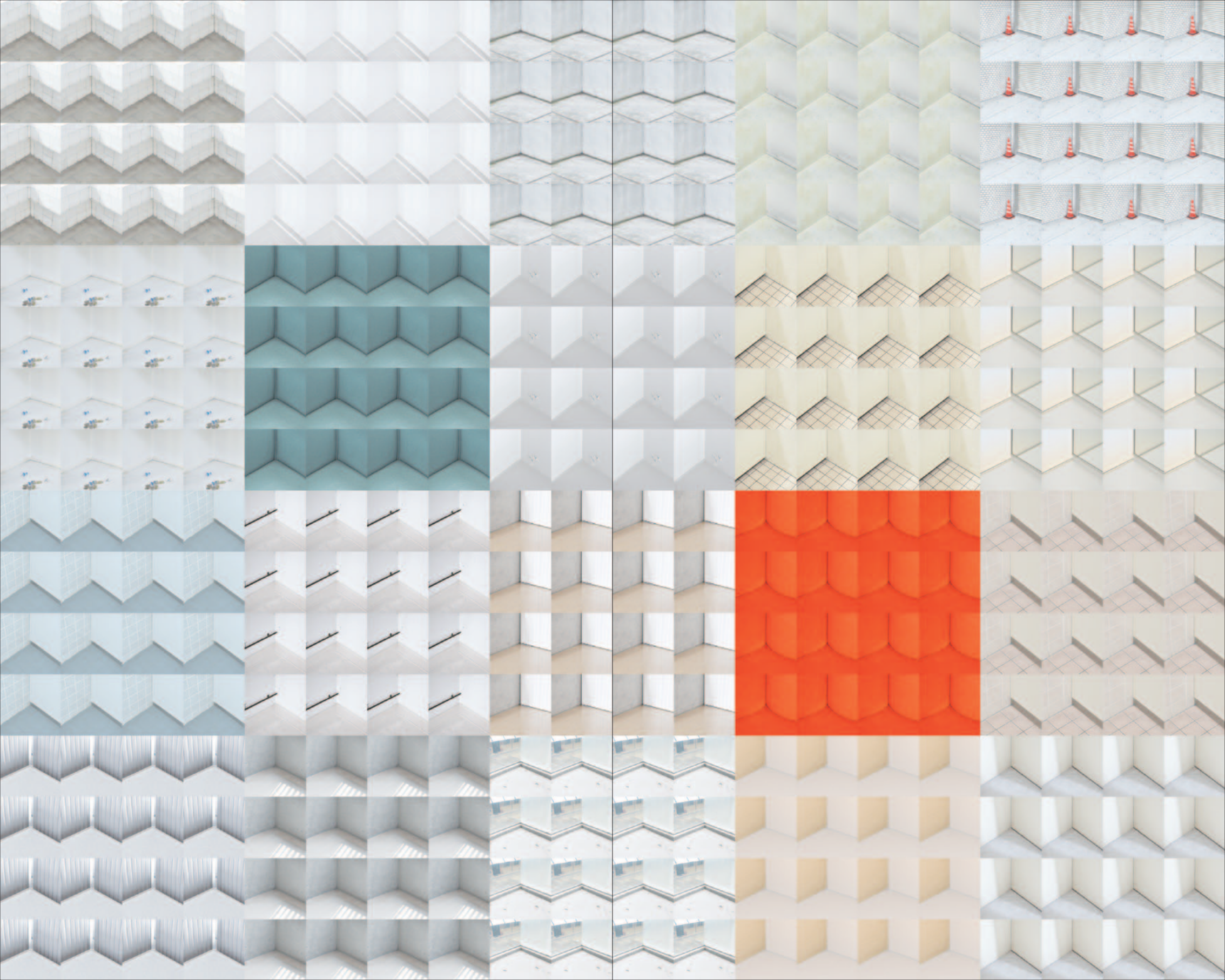
"Queen Zagreb" (Zagreb, Croatia)



《Melody♥Cup》/ *Melody♥Cup* (2009) photo: Hiroto Takezaki



《美しい前歯—Roads to Lebanon》/ *Beautiful Front Teeth—Roads to Lebanon* (2009)



KYOTO EXPERIMENT 2011 フリンジ “GroundP★(グランupp)”

KYOTO EXPERIMENT 2011 FRINGE “GroundP★”



KYOTO EXPERIMENT 2011では、フリンジ・パフォーマンス企画として、アトリエ劇研と元・立誠小学校の2会場で2週間にわたり新進気鋭の若手アーティストたちの作品を連続上演します。演出家・杉原邦生のコンセプトのもと、舞台が砂場になったアトリエ劇研、閉校になった小学校校舎というそれぞれの「場=Ground」に、アーティストたちはどのように挑むのか。2会場をまたいで繰り広げられる多様な「PLAY」をお見逃しなく！

Let's play together★

子どもはよく「遊びの天才」だと言われます。いま思えば、僕も子どもの頃は意味不明な遊びを友達と発明しては夢中になって遊んでいた気がします。その遊び場は、学校だったり、グラウンドだったり、公園だったり、家だったり——そしてときどき、いまもその頃と変わっていない自分の姿に気づいたりします。僕はいま「劇場」という遊び場で遊んでいます。この遊び場では、僕も子どもに負けにくいくらい「遊び」の天才だと思っています(笑)

今回のフリンジ企画では僕が遊んでみたい「遊び場」を2つ用意しました。そして、そこで「遊び」の天才「たち」に2週間思いっきり遊んでもらおうと思っています！

劇場という場所はサイコーの「遊び場=Playground」です。

その遊び場でマジにガチで「遊ぶこと=PLAYすること」が《演劇》だと僕は思っています。

だから、あとはこの「遊び場」に足を踏み入れてくださるお客様と一緒に、楽しくHAPPY♥な時間を過ごせれば、それこそが《演劇》の真髄であり、僕が願う「劇場」の姿なのです。

みなさん、準備は良いですか？

テンションMAX!!!!!!で遊びに来てくださいね★(笑)

“GroundP★”コンセプト：杉原邦生

As a fringe project, KYOTO EXPERIMENT 2011 introduces the work of young emerging artists at atelier GEKKEN and the former Rissei Elementary School for two weeks. Under the direction of Kunio Sugihara, atelier GEKKEN's floor turns into a sand pit and the building of the former Rissei Elementary School becomes another performance venue. How do the artists approach the two “Play Grounds”?

Let's play together★

People say kids are geniuses of play. Looking back now, I used to create nonsense games with my friends and play all day long when I was a kid. Our playgrounds were the school building, the school's grounds, the park or our houses. Every once in a while, I realize I haven't changed much since then. I now play in a playground called the “theater”. In this ground, I think I am just as much a genius as a child at play (!).

For this year's fringe project, I came up with the idea of two “playgrounds”. And I encourage other geniuses to play fully for 2 weeks in it! Theater is the best playground. And to me, theatrical performance is all about seriously playing in that “playground”. For that, to share a HAPPY♥ time with an audience that comes to step in the same playground is the essence of theater performance and how I wish theater to be.

Are you ready? Please come and play!! And make sure you give it everything you've got when you come!!!!

“GroundP★”Concept: Kunio Sugihara

公演スケジュール／チケット料金

SCHEDULE / TICKET

※アクセスはp72を参照 / For access, see p72
※【前】…前売 / Advance 【当】…当日 / At the door

カンパニー名 Company Name	演目 Title	会場 Venue	日時 Date	チケット料金 Ticket Price	上演時間 Duration
岡崎藝術座 Okazaki Art Theatre	演劇 街などない Theater <i>There is No City for Us</i>	元・立誠小学校 Former Rissei Elementary School	10.4[Tue] 19:30-★ 10.5[Wed] 15:00- / 19:30-	【前】¥2,000 【当】¥2,500	65min.
口口 lolo	演劇 vol.5.8 夏も Theater <i>Summersummersummersummer</i>	アトリエ劇研 atelier GEKKEN	10.5[Wed] 14:00-★ / 19:00- 10.6[Thu] 14:00-★ / 18:00-	【前】¥2,300 【当】¥2,500 *マチネ割 ¥1,800	90min.
KENTARO!! KENTARO!!	ダンス 雨が降ると晴れる / 小学校バージョン Dance <i>After rain, clear up/elementary school version</i>	元・立誠小学校 Former Rissei Elementary School	10.7[Fri] 20:15-★ 10.8[Sat] 14:30- / 19:00- 10.9[Sun] 17:00- / 20:15-	一般 ¥2,300 学生 ¥2,000 リピーター ¥1,000 (前売・当日共)	60min.
劇団野の上 GEKIDAN NONOUE	演劇 奥う女〜におうひと〜 Theater <i>NIDUJITO</i>	アトリエ劇研 atelier GEKKEN	10.8[Sat] 15:00- / 19:30-★ 10.9[Sun] 14:00- / 18:00-	【前】¥2,300 【当】¥2,500	90min.
モモンガ・ コンプレックス Momonga Complex	ダンス とりあえず、あなたまかせ。 Dance <i>Anyway, as you like it.</i>	元・立誠小学校 Former Rissei Elementary School	10.8[Sat] 16:00-★ / 20:15- 10.9[Sun] 19:00- 10.10[Mon] 17:00-	¥2,000 (前売・当日共)	60min.
悪い芝居 Waruishibai	演劇 猿に恋 Theater <i>Catch and release</i>	アトリエ劇研 atelier GEKKEN	10.11[Tue] 15:00-★ / 19:00- 10.12[Wed] 13:00- / 17:00-	【前】 一般 ¥2,000 学生 ¥1,500 【当】 一般 ¥2,500 学生 ¥2,000	85min.
範宙遊泳 HANCHU-YUEI	演劇 郷土物語宣言第三弾 ガニメデからの刺客 Theater <i>Ganymede</i>	元・立誠小学校 Former Rissei Elementary School	10.11[Tue] 19:00-★ 10.12[Wed] 14:00-★ / 19:30- 10.13[Thu] 18:00-	【前】¥2,000 【当】¥2,500 *マチネ割引 ¥1,800	90min.
Baobab Baobab	ダンス Relax★ Dance <i>Relax★</i>	アトリエ劇研 atelier GEKKEN	10.14[Fri] 19:00-★ 10.15[Sat] 14:00- / 19:00- 10.16[Sun] 15:00-	【前】¥2,000 【当】¥2,300	70min.
バナナ学園 純情乙女組 BANANA GAKUEN JYUNJO OTOMEGUMI	演劇 バナ学バトル★ 熱血スポンジの大運動会!!!! ~京都Ver~ Theater <i>BANAGAKU★☆Super Spunky Sports Autumn Grand Tournament!!!! - Kyoto ver.</i>	元・立誠小学校 the Former Rissei Elementary School	10.15[Sat] 15:00-★ / 19:00- 10.16[Sun] 12:00- / 16:00-	【前】¥2,500 【当】¥2,900	60min.

★の回終演後、杉原邦生とのポスト・パフォーマンス・トークを開催
※公演の詳細、最新情報は各カンパニー・ウェブサイトをご覧ください。

◎フリンジセット券

ユース(25歳以下)・学生限定★全演目券 ¥10,800
選べる★3演目券 ¥5,400
取扱=KYOTO EXPERIMENTチケットセンター(窓口のみ)

◎個別チケット

取扱=KYOTO EXPERIMENTチケットセンター(窓口のみ)、
各カンパニーウェブサイト

◎FRINGE Coupon Tickets

Youth (Under 25) and Students Only★All Performances Tickets ¥10,800
Pick Your Favorites★3 Performances Coupon Tickets ¥5,400
*Tickets only available at KYOTO EXPERIMENT Ticket Office.

◎Advance Tickets

*Tickets only available at KYOTO EXPERIMENT Ticket Office and each
company's website.

KYOTO EXPERIMENT 2011 提携公演

演劇 / Theater

辻輝猛＋青柳敦子／グループAKT.T＋ぐるっぽ・ちょいす

ぶんげいマスターピース工房 vol.3 シェイクスピアウィーク

《K・リア〜ヒメミコタチノオハナシ〜》

@京都府立文化芸術会館

9.17 [Sat] 18:30-★ 9.18 [Sun] 14:00-★
上演時間 / duration = 120 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk
9.17 [Sat] ゲスト：キタモトマサヤ(劇作家・演出家／遊劇体)
9.18 [Sun] ゲスト：田辺剛(劇作家・演出家／下鴨車窓)

コーディネリアはいい人？
その姉たちは悪い人？
ケント伯は正しい人？
エドモンドは正しくない人？
じゃアリアは？
その疑問の彼方に、善も悪も正義も不義も全てを内包し、現実と聞き合いながら不器用に生き抜こうとする生身の人間の姿が見える。不倫、介護、相続、自分探し、解雇、引きこもり、そして国の行方……。名作『リア王』に現代という名の色眼鏡をかけ、敢えてプリミティブに、シェイクスピアの台詞と向き合う。

原作：シェイクスピア／構成・演出：青柳敦子／出演：辻輝猛、小野田由紀子、小長谷勝彦、山谷典子、藤波大、松垣陽子、山岡竜生、すがぼん、玉置祐也、小林親弘、芦谷康介、金乃梨子、さとう優衣、紗実のりこ、新谷有里、田畔多実子、中嶋やすき、藤沢霞、藤本隆志、松田裕一郎、宮崎亜友美、森川万里、渡邊裕史／音響・音楽：山崎哲也／照明：賀澤礼子／美術：高橋あや子／製作：グループAKT.T＋ぐるっぽ・ちょいす／提携：KYOTO EXPERIMENT／主催：京都府、財団法人京都文化財団

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Cast: Shoichiro Suzuki, Izumi Kasagi, Keisuke Yamamoto / Stage Manager: Koro Suzuki, Chikage Yuyama / Art Direction: Hironobu Hosokawa / Lighting: Kaori Minami / Video Images: Keisuke Takahashi / Production Coordinator: precog / Produced by: Mikuni Yanaihara Project / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Concept, Direction: Atsuko Aoyagi / Cast: Terutake Tsuji, Yukiko Onoda, Katsuhiko Konagaya, Noriko Yamaya, Masaru Fujinami, Yoko Matsugaki, Ryusei Yamaoka, SUGAPON, Yuya Tamaki, Chikahiro Kobayashi, Kosuke Ashiya, Noriko Kin, Yui Sato, Noriko Sami, Yuri Shintani, Tamiko Taguro, Yasuki Nakajima, Kasumi Fujisawa, Takashi Fujimori, Yuichiro Matsuda, Ayumi Miyazaki, Banri Morikawa, Hiroshi Watanabe / Art Direction: Ayako Takahashi / Sound: Tetsuya Yamazaki / Lighting: Ayako Kazawa / Produced by Groupe AKT. T + Gruppo Choice / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

原作：シェイクスピア／構成・演出：青柳敦子／出演：辻輝猛、小野田由紀子、小長谷勝彦、山谷典子、藤波大、松垣陽子、山岡竜生、すがぼん、玉置祐也、小林親弘、芦谷康介、金乃梨子、さとう優衣、紗実のりこ、新谷有里、田畔多実子、中嶋やすき、藤沢霞、藤本隆志、松田裕一郎、宮崎亜友美、森川万里、渡邊裕史／音響・音楽：山崎哲也／照明：賀澤礼子／美術：高橋あや子／製作：グループAKT.T＋ぐるっぽ・ちょいす／提携：KYOTO EXPERIMENT／主催：京都府、財団法人京都文化財団

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Cast: Shoichiro Suzuki, Izumi Kasagi, Keisuke Yamamoto / Stage Manager: Koro Suzuki, Chikage Yuyama / Art Direction: Hironobu Hosokawa / Lighting: Kaori Minami / Video Images: Keisuke Takahashi / Production Coordinator: precog / Produced by: Mikuni Yanaihara Project / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

団体の紹介
グループAKT.T
俳優辻輝猛を中心とした創作ユニット。2002年、音楽劇《ひなつさんは名探偵》を各地で巡演。2009年、調布せんがわ劇場にて《夏の夜の夢》を上演。2010年『シェイクスピア・コンペ』で優秀賞を受賞。「ぐるっぽ・ちょいす」は2010年、モーリス・パニッチの二人芝居《ご臨終》上演のために立ち上げられた。2種類の演出を入れ替え上演する試みは注目を集め、好評を博した。本公演は、両グループの共同製作による。

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Cast: Shoichiro Suzuki, Izumi Kasagi, Keisuke Yamamoto / Stage Manager: Koro Suzuki, Chikage Yuyama / Art Direction: Hironobu Hosokawa / Lighting: Kaori Minami / Video Images: Keisuke Takahashi / Production Coordinator: precog / Produced by: Mikuni Yanaihara Project / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

ぶんげいマスターピース工房 関連企画 ※詳細は京都府立文化芸術会館ウェブサイト[http://www.bungei.jp]をご覧ください。	
学芸講座	ワークショップ
9.14 [Wed] 岩崎正裕「2011年のマクベス〜現代の暴君を戯画化する試みについて〜」	7.29 [Fri]—31 [Sun] 青柳敦子ワークショップ
9.16 [Fri] 太田耕人「シェイクスピアの劇場と『リア王』」	9.19 [Mon] 矢内原美邦ワークショップ



Terutake Tsuji & Atsuko Aoyagi / Groupe AKT.T + Gruppo Choice
K・Lear
Kyoto Prefectural Center for Arts and Culture

Is Cordelia a good person?
Are her sisters bad?
Is the Duke of Kent a righteous person?
How about Edmund?
And King Lear?
Beyond these questions, we glimpse a real man torn by reality who clumsily strives to live, while doing good and bad, right and wrong. Adultery, caring for the elderly, inheritance, self-searching, unemployment, social withdrawal and the direction of the country……。The work lays the masterpiece “*King Lear*” over contemporary society and daringly takes on Shakespeare’s text from a primitive standpoint.

Text: William Shakespeare / Concept, Direction: Atsuko Aoyagi / Cast: Terutake Tsuji, Yukiko Onoda, Katsuhiko Konagaya, Noriko Yamaya, Masaru Fujinami, Yoko Matsugaki, Ryusei Yamaoka, SUGAPON, Yuya Tamaki, Chikahiro Kobayashi, Kosuke Ashiya, Noriko Kin, Yui Sato, Noriko Sami, Yuri Shintani, Tamiko Taguro, Yasuki Nakajima, Kasumi Fujisawa, Takashi Fujimori, Yuichiro Matsuda, Ayumi Miyazaki, Banri Morikawa, Hiroshi Watanabe / Art Direction: Ayako Takahashi / Sound: Tetsuya Yamazaki / Lighting: Ayako Kazawa / Produced by Groupe AKT. T + Gruppo Choice / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Cast: Shoichiro Suzuki, Izumi Kasagi, Keisuke Yamamoto / Stage Manager: Koro Suzuki, Chikage Yuyama / Art Direction: Hironobu Hosokawa / Lighting: Kaori Minami / Video Images: Keisuke Takahashi / Production Coordinator: precog / Produced by: Mikuni Yanaihara Project / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

Director’s Biography
Atsuko Aoyagi
Graduated with a Eurhythmics major from Kunitachi College of Music. Aiming to be an opera director early on, she met Deborah Ann DeSnoo, the actress and stage director. After receiving guidance from DeSnoo for 10 years, Aoyagi decided to make her career in theater. A member of Theater Echo. *Ka E Ru* was officially invited to the Alternative Theater Festival in Colombia in 2010. Participated in “Shakespeare Competition” with Groupe AKT.T and received outstanding performance award in the same year. In 2011, directed *Vigil* that was performed at Shimokitazawa Theater Festival.

Company’s Biography
Groupe AKT.T
Groupe AKT.T is a creative unit initiated by Terutake Tsuji [actor]. In 2002, toured with the musical *You Are a Good Detective, Mr. Hinatsu!*. Performed *A Midsummer Night’s Dream* at SENGAWA THEATER in 2009. Received outstanding performance award at “Shakespeare Competition” in the following year. Gruppo Choice was founded to stage Morris Panych’s *Vigil* in 2010. The style of showing 2 different productions based on the same text caught people’s attention and the show was well received. *K・Lear* is a collaboration between the two groups.

演劇 / Theater

矢内原美邦／ミクニヤナイハラプロジェクト

ぶんげいマスターピース工房 vol.3 シェイクスピアウィーク

《前向き！タイモン》

@京都府立文化芸術会館

9.23 [Fri] 19:00-★
9.24 [Sat] 14:00-★／19:00-
9.25 [Sun] 14:00-
上演時間 / duration = 70 min.

★ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk
9.23 [Fri]
ゲスト：ごまのはえ(劇作家・演出家／ニットキャップシアター)
9.24 [Sat] 14:00
ゲスト：坂本公成(振付家／monochrome circus)

前向きに生きる。これは簡単なことではありません。前向きに努めながらも、なにひとつ報われないまま人生が終わることなどよくあることです。だからって後ろ向きはまっぴらごめんです。前のめりになるくらい前向きに人生を歩もうではありませんか？後ろ向きな人生が、あることをきっかけにパッ!と前を向いたときに生み出される、生きることへのエネルギーを私は信じたいです。これは不幸などん底にいる後ろ向きな男が前向きに人生を見つめなおす作品、それが《前向きタイモン》です。

作・演出：矢内原美邦／出演：鈴木将一郎、笠木泉、山本圭祐／舞台監督：鈴木康郎、湯山千景／照明：南香織／美術：細川浩伸／制作：プリコグ／映像：高橋啓祐／製作：ミクニヤナイハラプロジェクト／提携：KYOTO EXPERIMENT／主催：京都府、財団法人京都文化財団

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Cast: Shoichiro Suzuki, Izumi Kasagi, Keisuke Yamamoto / Stage Manager: Koro Suzuki, Chikage Yuyama / Art Direction: Hironobu Hosokawa / Lighting: Kaori Minami / Video Images: Keisuke Takahashi / Production Coordinator: precog / Produced by: Mikuni Yanaihara Project / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

Director’s Biography
Mikuni Yanaihara

Born in 1970. Yanaihara founded "Nibroll", a performing arts company that consists of artists from various fields, and began her career as director and choreographer in 1997. In 2005, she launched "Mikuni Yanaihara Project" for the opening of the Kichijoji Theater. Yanaihara writes and directs all the productions. Nominated and a finalist for the 52nd Kishida Kunio Drama Award, she is highly acclaimed both in theater and dance. She also creates video art work with Keisuke Takahashi, who is a video artist, under the name of "Off Nibroll" alongside her stage work, and has been invited to participate in many international exhibitions.

Company’s Biography
Mikuni Yanaihara Project
Founded in 2005. Theater project by Mikuni Yanaihara, the director and choreographer of "Nibroll". They boldly edit seemingly trivial daily events and then create a story. Interweaving homage for Japanese Manga and oldies love songs, her non-traditional approach, while consciously being "theatrical", has come to the fore. In their stage work, known for an overwhelming amount of information and exercise, dramatically deformed selfish characters thrust forth words and bodies at high speed, as if dancing. The sense of drive is alluring.

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Cast: Shoichiro Suzuki, Izumi Kasagi, Keisuke Yamamoto / Stage Manager: Koro Suzuki, Chikage Yuyama / Art Direction: Hironobu Hosokawa / Lighting: Kaori Minami / Video Images: Keisuke Takahashi / Production Coordinator: precog / Produced by: Mikuni Yanaihara Project / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

Related Events	
Academic lectures	Workshops
9.14 [Wed] “Macbeth in 2011: Attempting to caricature a modern tyrant” by Masahiro Iwasaki	7.29 [Fri]—31 [Sun] Atsuko Aoyagi Workshop
9.16 [Fri] “Shakespeare’s theatre and <i>King Lear</i> ” by Kojin Ota	9.19 [Mon] Mikuni Yanaihara Workshop



Mikuni Yanaihara / Mikuni Yanaihara Project
Hey TAIMON Let’s think positive.
Kyoto Prefectural Center for Arts and Culture

It is not always easy to have a positive outlook on life. Often one’s life ends without paying off their effort. However, we don’t want our lives to be negative. Why not try to be positive as much as we fall forward. I want to believe in the energy generated when negative life turns into positivity triggered by random reasons. *Hey TAIMON Let’s think positive.* is the story of a man who, though in the depth of misery, tries to look up positively.

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Cast: Shoichiro Suzuki, Izumi Kasagi, Keisuke Yamamoto / Stage Manager: Koro Suzuki, Chikage Yuyama / Art Direction: Hironobu Hosokawa / Lighting: Kaori Minami / Video Images: Keisuke Takahashi / Production Coordinator: precog / Produced by: Mikuni Yanaihara Project / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

Text, Direction: Mikuni Yanaihara / Concept, Direction: Atsuko Aoyagi / Cast: Terutake Tsuji, Yukiko Onoda, Katsuhiko Konagaya, Noriko Yamaya, Masaru Fujinami, Yoko Matsugaki, Ryusei Yamaoka, SUGAPON, Yuya Tamaki, Chikahiro Kobayashi, Kosuke Ashiya, Noriko Kin, Yui Sato, Noriko Sami, Yuri Shintani, Tamiko Taguro, Yasuki Nakajima, Kasumi Fujisawa, Takashi Fujimori, Yuichiro Matsuda, Ayumi Miyazaki, Banri Morikawa, Hiroshi Watanabe / Art Direction: Ayako Takahashi / Sound: Tetsuya Yamazaki / Lighting: Ayako Kazawa / Produced by Groupe AKT. T + Gruppo Choice / Co-Presented by KYOTO EXPERIMENT / Presented by Kyoto Prefecture, Kyoto Culture Foundation

Director’s Biography
Mikuni Yanaihara
Born in 1970. Yanaihara founded "Nibroll", a performing arts company that consists of artists from various fields, and began her career as director and choreographer in 1997. In 2005, she launched "Mikuni Yanaihara Project" for the opening of the Kichijoji Theater. Yanaihara writes and directs all the productions. Nominated and a finalist for the 52nd Kishida Kunio Drama Award, she is highly acclaimed both in theater and dance. She also creates video art work with Keisuke Takahashi, who is a video artist, under the name of "Off Nibroll" alongside her stage work, and has been invited to participate in many international exhibitions.

Company’s Biography
Mikuni Yanaihara Project
Founded in 2005. Theater project by Mikuni Yanaihara, the director and choreographer of "Nibroll". They boldly edit seemingly trivial daily events and then create a story. Interweaving homage for Japanese Manga and oldies love songs, her non-traditional approach, while consciously being "theatrical", has come to the fore. In their stage work, known for an overwhelming amount of information and exercise, dramatically deformed selfish characters thrust forth words and bodies at high speed, as if dancing. The sense of drive is alluring.

KYOTO EXPERIMENT 2011 関連イベント

プレイベント 上映会+アーティストトーク

フェスティバル参加アーティストによる舞台映像および映像作品を上映します。上映終了後には矢内原美邦、白井剛によるアーティストトークを行い、映像とダンスの関係について伺います。

日時：9.19[Mon] 17:00-

会場：京都芸術センター ミーティングルーム2

上映作品：

①**白井剛×山口情報芸術センター [YCAM] ビデオダンス制作プロジェクト『Choreography filmed: 5days of movement』**
振付家・ダンサー、白井剛の代表作(質量, slide, &.)を、そのコンセプトをもとに映像作品へと再構成したプロジェクトから、映像とダンスの今日的な関係について検証していきます。

②**ニプロール (ロミオORジュリエット)**

主宰の矢内原美邦を中心に、ダンス、映像、音楽、美術、衣装、照明などの各分野で活躍するアーティストたちが集結したカンパニー「ニプロール」。結成10周年記念公演『ロミオORジュリエット』の上映を通してニプロール作品の魅力に迫ります。

料金：無料(要申込*)

主催：KYOTO EXPERIMENT、ぶんげいマスターピース工房

フェスティバル・展覧会

「すみっこにみつける —いつも近くにある世界：中居真理展」

本誌にイメージを提供していただいた美術家・中居真理の個展。フェスティバルの会場となる劇場や劇場間を結ぶ道の何気ない“すみっこ”を組み合わせ“もよう”を創り出します。無数の可能性と広がりを持った作品を間近でぜひお楽しみください。

会期：9.23[Fri]-10.11[Tue] 11:00-19:00

月曜休(ただし、10.10は開廊)

会場：Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]

〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町井慶石町48

三条ありもとビル [ル・グランマーブル カフェ クラッセ] 2F

料金：無料

協力：Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]、

大塚オーミ陶業株式会社



中居真理 (gingham check) 2009 photo: Tomas Svab

展覧会関連ワークショップ：

「べったんこにみるごこちも〜もようを見つけに街あるき〜」

本展出品作家の中居真理さんと京都のまちなかへ“べったんこなもよう”探しに出かけませんか？自分のカメラ付携帯でまちなかで見つけたすみっこをばちり。普段あるきなれた街の風景が自分だけの“もよう”になります。

日時：10.8[Sat] 14:00-16:00

会場：Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]

対象：携帯のカメラ機能を使える方

料金：500円(お茶とお菓子付き)

定員：20名(要申込*)

共同企画：ドネルモ donner le mot <http://donnerlemot.com>

フェスティバル・フォーラム

「いま／どのように人が集まるのか？」その問いの中から現代における劇場の可能性を模索した。昨年のフェスティバル・フォーラム。この議論を引き継ぐかたちで、今年は人が集まることによって生まれた“場”を、どう機能させ、育てていくのか、さまざまな角度から議論を深めます。

①座談会「私たちは舞台上で何ができる？」若手演劇人の「現在」を考え「未来」を見据える演劇大会議

ゲスト：大崎けんじ(「イッパイアンテナ」)、杉原邦生(「KUNIO」)
主宰 / “GroundP★”コンセプト、和田ながら(「したため」)
ホスト：高田斉(『とまる。』編集)

②パネル・ディスカッション 京都でどんな“場”が生まれているのか？—さまざまなジャンルの“場”のオーガナイザーが語る

パネリスト：石橋圭吾(gallery neutron)、エリック・ルオン(京都造形芸術大学 / 「ベチャクチャナイト京都」共同オーガナイザー)、加藤隆生(SCRAP)、橋本裕介(KYOTO EXPERIMENT)

③対談〈劇場〉の想像力—いかに〈観客〉と出会うか？

ゲスト：佐藤信(劇作家・演出家 / 座・高円寺芸術監督)
ホスト：森山直人(演劇批評家 / 京都造形芸術大学舞台芸術学
科教授・同大学舞台芸術研究センター主任研究員)

日時：①9.27[Tue] ②9.29[Thu] ③10.4[Tue] 各日19:00-21:00

会場：flowing KARASUMA 2F

料金：500円 / 回(要申込*)



フェスティバル・フォーラム 2010

フェスティバル・ワークショップ

公式プログラム参加ブラジル人振付家マルセロ・エヴェリン(p30)と、現在ヴィラ九条山(京都)に滞在中のフランス人振付家ダヴィッド・ヴァムバックによるダンスワークショップ。海外のダンスの潮流を自身の身体を通じて体験する絶好の機会です。

①**ダヴィッド・ヴァムバック ワークショップ** ※逐次通訳あり

ダヴィッド・ヴァムバックは、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル(ローザ)の舞踏学校P.A.R.T.S.で研鑽を積み、マチルド・モニエ、オディール・デュボックやクリスチャン・リゾらの作品に参加し、ダンサー・振付家としてヨーロッパで活躍しています。そんな彼のワークショップでは、「呼吸」と「体幹」の密接な関係から、ダンスにおけるムーブメントの質と密度を探究していきます。

日時：10.5[Wed]・6[Thu] 各日18:00-21:00

会場：京都芸術センター フリースペース

料金：3,000円(2日間通し)

対象：ダンス経験者

定員：15名(要申込*)

共催：関西日仏交流会館 ヴィラ九条山



②**マルセロ・エヴェリン ワークショップ** ※逐次通訳あり
身体をインストールする

パフォーマティブな身体への理論的および実践的アプローチ。物質としての身体、今ここにある身体、既存のスペースとイメージの間にある身体を探るワークショップ。

日時：10.11[Tue]・12[Wed] 各日18:00-21:00

会場：京都芸術センター 講堂

料金：3,000円(2日間通し)

対象：ダンサー、振付家、俳優、演出家、研究者、アーティスト、その他身体に興味のある方

定員：10名(要申込*)

フェスティバル・ミーティングポイント

フェスティバル期間中、参加アーティストと観客とのコミュニケーションのためのスポットが今年もカフェダイニングflowing KARASUMAにオープン！旧銀行(1916年建立)を新たにリノベーションしたflowing KARASUMAは、「flowing good energy」をテーマに、2007年鳥丸通に誕生しました。観劇後に食事もとれる休憩場所としてだけでなく、トーク会場、情報コーナーとしても活躍します。特別メニューも登場予定！

[会場] flowing KARASUMA (TEL 075-257-1451)

〒604-8152 京都市中京区烏丸通蛸薬師下る手洗水町645

www.flowing.co.jp

[営業時間] 11:30-23:00(L.O.22:30)

※貸切のため、ご利用いただけない日がございます。営業時間の変更やイベント情報は公式ウェブサイトをご覧ください。

フェスティバル・レクチャー

「ブラジルパフォーミングアーツの現在」

「KYOTO EXPERIMENT」とブラジルのダンスフェスティバル「Panorama」が、2011年より継続的な共同プロジェクトを開始します。その一環として、現代のブラジルのパフォーミングアーツを作品だけでなくそのバックグラウンドも交え、包括的に紹介するレクチャー。日本とブラジルの交流の歴史を踏まえながら、互いの芸術がどのように影響を与え合っているか、未来に向けた創造的な関係も視野に入れながら、開かれた議論の場を目指します。

第一部 基調講演

クリスチーネ・グライナー(サンパウロカトリック大学身体言語学部教授)

第二部 パネル・ディスカッション

モデレーター：内野儀(演劇批評家 / 東京大学大学院総合文化研究科教授)

パネリスト：クリスチーネ・グライナー、ナイセ・ロベス(フェスティバル「Panorama」芸術監督)、マルセロ・エヴェリン(振付家)

日時：10.9[Sun] 13:30-15:30

会場：flowing KARASUMA 2F

料金：無料

定員：50名(要申込*)

協力：国際交流基金 

*各イベントの申込方法

KYOTO EXPERIMENT事務局まで、お電話(075-213-5839)もしくは公式ウェブサイト(<http://kyoto-ex.jp>)内申込フォームにてお申込みください。



KYOTO EXPERIMENT 2011 Related Events

Pre Event Screening & Artist Talk

Screening of the films by artists from the main program. There will be artist talks following the screening.

Date: 9.19 [Mon] 17:00-
Venue: Kyoto Art Center Meeting Room 2
Film:

1. Tsuyoshi Shirai x Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM)
Choreography filmed: 5 days of movement
2. Nibroll Romeo OR Juliet
[Admission] Free. Reservation required.
Presented by KYOTO EXPERIMENT, Bungei Masterpiece Workshop

Festival Exhibition

Found in a corner: Worlds always close.

Mari Nakai's solo exhibition based on her images of the festival's performances venues. She finds small corners along the paths that link all of the festival's venues and halls, and creates patterns by combining and mixing them.

Date: 9.23 [Fri] - 10.11 [Tue] 11:00-19:00
Closed on Monday (Except 10.10)
Venue: Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]
4F, 2F Benkeishi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
Admission: Free.
Co-Organized by Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]
Supported by OTSUKA OHMI CERAMICS CO., LTD.

Festival Forum

Following last year's topic "Why/how do people gather today?" the 2011's forum will discuss how "spaces" are constructed and how they are given a function.

1. Round-Table Talk "The potential of performing arts" - Where the young artists are headed.
Guest: Kenji Osaki / "Ippaiantenna", Kunio Sugihara / Director of "KUNIO", "GroundP★" Concept, Nagara Wada / "Shitatame"
Host: Hitoshi Takada / Editor of *Tomaru*.
2. Panel Discussion "Kyoto's new spaces"
Panelist: Keigo Ishibashi / gallery neutron, Eric Luong / Kyoto University of Art and Design, "Pecha Kucha Night Kyoto" Co-organizer, Takao Kato / SCRAP, Yusuke hashimoto / KYOTO EXPERIMENT
3. Dialogue "Imagination of Theater - How to encounter the audience"

Guest: Makoto Sato / Playwright, Theater Director and Artistic Director at ZA-KOENJI
Host: Naoto Moriyama / Theater Critic, Professor at Performing Arts Dpt. Kyoto University of Art and Design and Chief Researcher at Kyoto Performing Arts Center

Date: 1. 9.27 [Tue] 19:00-21:00
2. 9.29 [Thu] 19:00-21:00
3. 10.4 [Tue] 19:00-21:00
Venue: flowing KARASUMA 2F
Admission: ¥500 Reservation required.

Festival Workshop

By Brazilian choreographer Marcelo Evelin (P.30) and French choreographer David Wampach, one of the resident artists at Villa Kujoyama.

1. David Wampach Workshop ※With interpretation
David Wampach (Dancer and Choreographer) was trained at

several dance schools such as P.A.R.T.S. and has worked with Mathilde Monnier, Odile Duboc and Christian Rizzo among many other artists. Focusing on the close connection with the breathing and the use of the body center, this workshop will explore the intensity and quality of dance movement.

Date: 10.5 [Wed], 6 [Thu] 18:00-21:00
Venue: Kyoto Art Center Multi-purpose Hall
Admission: ¥3,000 (for 2 days)
Terms: Some experience in dance
Capacity: 15 people (Reservation Required)
Co-Organized by Institut Franco-Japonais du Kansai, Villa Kujoyama



2. Marcelo Evelin Workshop ※With interpretation
Date: 10.11 [Tue], 12 [Wed] 18:00-21:00
Venue: Kyoto Art Center Auditorium
Admission: ¥3,000 (for 2 days)
Terms: Dancers, choreographers, actors, directors, theorists, artists and other professionals interested in the body as a territory for their creations.
[Capacity] 10 people (Reservation Required)

Festival Lecture

"Performing Arts in Brazil, today"

This lecture is part of a continuing collaboration between "KYOTO EXPERIMENT" and "Panorama", a dance festival in Brazil, launched in 2011. It is a great opportunity for us to learn about the performing arts scene in contemporary Brazil comprehensively - not merely the names of artists and works but also to understand its historical background.

Part 1: Keynote by Christine Greiner / Professor at Body Language Dpt. Catholic University of San Paulo
Part 2: Panel Discussion
Host: Tadashi Uchino / Theater Critic and Professor at The University of Tokyo Graduate School
Panelist: Christine Greiner, Nayse Lopez / Artistic Director of "Panorama", Marcelo Evelin / Choreographer

Date: 10.9 [Sun] 13:30-15:30
Venue: flowing KARASUMA 2F
Admission: Free
Capacity: 50 people (Reservation Required)
Supported by JAPAN FOUNDATION



Reservation
Call KYOTO EXPERIMENT Office (075-213-5839) or send application form at the official website (<http://kyoto-ex.jp>)

Festival Meeting Point

Café dining: flowing KARASUMA will host the festival's meeting point again this year. Built on bustling Karasuma Street in 1916 as the Kyoto Branch of Hokkoku Bank, the building was renovated in 2007. This is a spot to enhance communication between artists and spectators of KYOTO EXPERIMENT. Enjoy festival special menu!
[Venue] flowing KARASUMA (075-257-1451)
645, Tearaimizu-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
www.flowing.co.jp
[Open Hours] 11:30-23:00 (L.O.22:30)
※Due to previous reservations, the cafe may not be used at certain times. Please confirm availability beforehand on the website.

KYOTO EXPERIMENT 提携事業

Kyoto Art Map 2011

Kyoto Art Mapとは……京都アートマップは京都の現代美術ギャラリーにより、情報交換の場となるように起ち上げられました。KYOTO ART MAPという名称には、現代美術のネットワークの拡がり、京都での人や町との関わりを「地図」に書き加えたいという願いが込められています。このネットワークによる活発な討議を通じて、KYOTO ART MAPは展覧会事業にとどまらず、ライブイベントやシンポジウムなど具体的な活動の数々を行っています。

	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun
アーティストスペース感 Art Space KAN 13:00-19:00 (9.20 Fri) / closed on Sep. 20th																								
アーティストスペース虹 ART SPACE NIJI 11:00-19:00 (自展休 / closed on Monday)																								
ギャラリーアート・ア・スロング GALLERY ARTS LONG 12:00-19:00 (自展休 / closed on Monday)																								
ギャラリーギョーラリー GALLERY GALLERY 12:00-19:00 (自展休 / closed on Thursday)																								
ギャラリー一徳風 GALLERY KELL-FU 12:00-19:00 (自展休 / closed on Monday)																								
ギャラリー16 gallery 16 12:00-19:00 (自展休 / closed on Monday)																								
ギャラリーすずき GALLERY SUZUKI 12:00-19:00 (自展休 / closed on Monday)																								
ギャラリーなかわら Gallery NAKAMURA 11:00-19:00 (自展休 / closed on Monday)																								
ギャラリーはねうさぎ GALLERY HANEUSAGI 12:00-19:00																								
ギャラリーマロニエ Gallery MARONIE 12:00-19:00																								
同時代ギャラリー Dohjida Gallery of Art 12:00-19:00 (10.3 Fri) / closed on 3rd																								
松屋十ノブ・イノキヤラリー pfs/w MATSUO MEGUMI / VOICE GALLERY pfs/w 12:00-19:00 (自展休 / closed on Sunday & Monday)																								
野村直城 Art Works / Naoki Nomura Art Works (9.16 Fri) -																								
永沼理善展 / Tadagoshi Nagayama Exhibition (9.20 Tue) -																								
廣村昌哉展 / Masaya Okumura Exhibition																								
野々口悟展 / Satoru Nonoguchi Exhibition																								
[1F] 日下部一司×田中朝子展 / Kazushi Nishikubo x Asako Tanaka Exhibition (9.13 Tue) -																								
[2F] 武田浪文・藤波晃展 / Rou Takeda x Akira Fujiwara Exhibition (9.20 Tue) -																								
岡田彩希子展 / Akiko Okada Exhibition (9.20 Tue) -																								
幸藤美展 / Kimi Otsufuji Exhibition (9.20 Tue) -																								
切畑健展 / Ken Kirihata Exhibition (9.16 Fri) -																								
山内雅治展 / Masahiro Yamauchi Exhibition (9.20 Tue) -																								
[3F] 黒田沙知子 / Sachiko Kuroda Exhibition (9.20 Tue) -																								
[再会] 外藤化展 / "Reunion" Exhibition																								
山下勇作展 / MOE'S CERAMIC Exhibition "MOE'S WOOD"																								
伊藤祐子展 / Yuko Ito Exhibition																								
小笠美華展 / Mika Ogasa Exhibition																								
伊藤祐子展 / Yuko Ito Exhibition																								
藤原勝彦展 / Katsuhiko Fujiwara Exhibition																								
鹿嶋展 / Takeshi Hori Exhibition																								
神内康年展 / Yasutoshi Jinnai Exhibition (~10.30 Sun)																								
山口まなみ展 / Manami Yamaguchi Exhibition "四つ月の物語" 彫山口中アキ / Song of Four Moons Hiroaki Konigama																								
[3F] 黒田かおり / Kaori Kuroda Exhibition [4F] 展 / en Exhibition																								
Gallery Main フォトコンテスト in 同時代ギャラリー / Gallery Main Photo Contest in Dohjida Gallery of Art																								
高木光司展 / Koji Takaki Exhibition (~10.29 Sat)																								
Eutectic / Eutectoid (共晶 / 共析) 加村茂孝・多摩隆・森本三・大村大樹・若平 / Katsumasa Tomura, Takayuki Tama, Motohiko Omura, Kuniyoshi Wakabayashi (~10.23 Sat)																								
[1F] 比佐水香展 / Mivo Hisa Exhibition [2F] 日本直三人展 (博多香・藤井麻子・尾崎博子) / Japanese Paint Exhibition (Kaori Naomi / Kaikoku Higashibata / Yoko Imai)																								
高木光司展 / Koji Takaki Exhibition (~10.29 Sat)																								
灰木佐知子展 / Sachiko Ibaraki Exhibition "四つ月の物語" 彫山口中アキ / Song of Four Moons Hiroaki Konigama																								
[3F] 池田勝俊 / Katsumi Ikeda Exhibition [4F] 海馬はいつか / Group Exhibition																								
グループルネエ第3回合同展 / グループ写真展 / Group Photo Exhibition "grupp@rice, la terza mostra"																								
ダンス公演 / DANCE PERFORMANCE Fujimoto Takayuki-Kosei, Sakamoto-minochiome circus, Isey & Isey 10.12 [Wed] 9:00, 10.13 [Thu] 15:00 / 19:00, 10.14 [Fri] 15:00 / 19:00																								



会場アクセス / ACCESS



A. 京都芸術センター

A 京都芸術センター / Kyoto Art Center

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
546-2, Yamafushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
tel: 075-213-1000 e-mail: info@kac.or.jp
http://www.kac.or.jp

- ・地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」下車、22・24番出口より徒歩5分
- ※駐車場なし・駐輪場あり



B. ART COMPLEX 1928

B ART COMPLEX 1928

〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町東南角1928ビル3F
3F 1928 Building, Sanjo-Gokomachi, Nakagyo-ku, Kyoto
tel: 075-254-6520 e-mail: info@artcomplex.net
http://www.artcomplex.net/ac1928

- ・阪急京都線「河原町駅」下車、9番出口より北へ徒歩8分
- ・京阪本線「三条駅」下車、6番出口より西へ徒歩5分
- ・JR「京都駅」より、市バス4系統「上賀茂神社」ゆき「河原町三条」下車、西へ徒歩3分
- ※駐車場・駐輪場なし

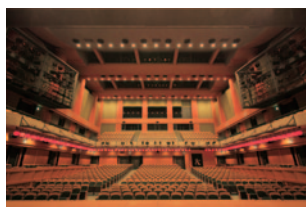


C. 元・立誠小学校
Photo: Shunsuke Yamashita

C 元・立誠小学校 / Former Rissei Elementary School

〒604-8023 京都市中京区蛸薬師通河原町東入備前島町310-2
310-2, Bizenjima-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

- ・阪急京都線「河原町駅」下車、1a出口から北に徒歩3分
- ・京阪本線「祇園四条駅」下車、4・5号出口から北西方向に徒歩5分
- ・駐車場・駐輪場なし(駐輪は市営先斗町駐輪場[有料]をご利用ください。)



D. 京都芸術劇場 春秋座(京都造形芸術大学)
Photo: Toshihiro Shimizu

D 京都芸術劇場 春秋座(京都造形芸術大学) / Kyoto Art Theater Shunjuza (Kyoto University of Art and Design)

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学内
2-116, Uryuyama Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto
tel: 075-791-8240 e-mail: k-pac@kuad.kyoto-art.ac.jp
http://www.k-pac.org

- ・地下鉄烏丸線「北大路駅」(北大路バスターミナル)より、市バス204系統「高野・銀閣寺」ゆき「上終町 京都造形芸大前」下車すぐ
- ・京阪本線「三条駅」より、市バス5系統「岩倉」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ
- ・阪急京都線「河原町駅」(四条河原町)より、市バス5系統「岩倉」ゆき または、市バス3系統「百万遍・上終町京都造形芸大」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ
- ・京阪電車「出町柳駅」から叡山電車に乗り換え、「茶山」駅下車 徒歩約10分
- ※駐車場なし・駐輪場あり(原付・バイクはご遠慮下さい)



E. アトリエ劇研

E アトリエ劇研 / atelier GEKKEN

〒606-0856 京都市左京区下鴨塚本町1
1, Tsukamoto-cho, Shimogamo, Sakyo-ku, Kyoto
tel: 075-791-1966 e-mail: info@gekken.net
http://gekken.net/atelier

- ・地下鉄烏丸線「北大路駅」(北大路バスターミナル)より、市バス204系統「高野・銀閣寺」ゆき・市バス206系統「京都駅」ゆき「下鴨東本町」下車
- ・地下鉄烏丸線「松ヶ崎駅」2番出口より徒歩15分
- ・阪急京都線「河原町駅」(四条河原町)より、市バス205系統「北大路バスターミナル」ゆき「洛北高校前」下車、徒歩10分
- ※駐車場なし・駐輪場あり



F. 京都府立文化芸術会館

F 京都府立文化芸術会館 / Kyoto Prefectural Center for Arts and Culture

〒602-0858 京都市上京区河原町通広小路下る
Hirokoji, Kawaramachi-dori, Kamigyo-ku, Kyoto
tel: 075-222-1046 e-mail: kaikan@bungei.jp
http://www.bungei.jp

- ・京都市バス「府立医大病院前」下車すぐ(3・4・17・37・59・205系統)
- ・駐車場・駐輪場あり(駐車¥150/30分、駐輪無料)



レンタサイクル  駐輪場

いのうえ屋
営業時間: 月・土/9:00-18:00、日・祝/10:00-18:00
※フェスティバル期間全日18:00-21:45までKYOTO EXPERIMENT事務局(京都芸術センター内)での返却が可能です。
利用料金: 500円/日
お問合せ: いのうえ屋 tel: 075-231-5412

Rent-a-cycle
Inoue-ya
Business hours: Monday - Saturday / 9:00-18:00,
Sunday and Holiday / 10:00-18:00
*During the festival, cycles can be returned to KYOTO EXPERIMENT office from 18:00 to 21:45.
Fee: ¥500 per day
Inquires: Inoue-ya tel 075-231-5412

Kyoto Art Map2011(p.69)参加ギャラリー

カレンダー / CALENDAR

		9 September								
アクセス		23	24	25	26	27	28	29	30	
ACCESS		fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	
01	KUNIO KUNIO 09 《エンジェルス・イン・アメリカ》第1部「至福千年紀が近づく」 <i>Angels in America Part 1: Millennium Approaches</i>	12:00	12:00	12:00						
	A			◎						
02	KUNIO 09 《エンジェルス・イン・アメリカ》第2部「ペレストロイカ」 <i>Angels in America Part 2: Perestroika</i>	17:00	17:00	17:00						
	A		★	◎						
03	ザカリー・オバザン Zachary Oberzan 《Your brother. Remember?》 <i>Your brother. Remember?</i>	19:30	19:30	15:00						
	B			★◎						
04	白井剛 / 京都芸術センター「演劇計画2009」 Tsuayoshi Shirai / Kyoto Art Center "Theatre Project 2009" 《静物画 - still life》 <i>still life</i>								19:30	
	A								★	
05	平田オリザ+石黒浩研究室(大阪大学&ATR石黒浩特別研究室) Oriza Hirata+Hiroshi Ishiguro Laboratory (Osaka University & ATR Hiroshi Ishiguro laboratory) アンドロイド演劇《さようなら》 <i>Android-human theater Sayonara (Good-bye)</i>									
	A									
06	マルセロ・エヴェリン/デモリション Inc. + ニュークレオ・ド・ディルソル Marcelo Evelin/Demolition Inc. + Núcleo Do Dirceu 《マタドウロ(屠場)》 <i>Matadouro (Slaughterhouse)</i>							19:00	17:30	
	C									
07	KIKIKIKIKIKI 《ちっさいのん、おっさいのん、ふっといのん》 <i>Chissainon, Okkiinon, Futtoinon (Little, Big and Chubby)</i>									
	A									
08	笠井勲 Akira Kasai 《血は特別のジュースだ。》 <i>Blood is a special kind of juice.</i>									
	D									
09	地点 Chiten 《かもめ》 <i>The Seagull</i>					19:30		19:30	17:00	
	A							★		
10	ヤニス・マンダフニス/ファブリス・マズリア Ioannis Mandafounis/Fabrice Mazliah 《P.A.D.》 <i>P.A.D.</i>									
	A									
11	石橋義正(キュピキュピ)/京都創生座 番外編 Yoshimasa Ishibashi (Kyupi Kyupi) / Kyoto Soseiza Extra 《伝統芸能バリエابل》 <i>VARIABLES</i>									
	D									
12	高嶺格 Tadasu Takamine 展覧会《ジャパン・シンドローム》～step 1 球の裏側 [Exhibition] <i>Japan Syndrome step 1 The other end of the ball</i>									
	A									
13	FRINGE “GroundP★” @アトリエ劇研 atelier GEKKEN									
	職員室									
	@元・立誠小学校 Former Rissei Elementary School									
	講堂									
14	関連イベント (p66-68)									

		10 October														上演時間		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	Duration
		sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun	mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun	
01																		210 min.
02																		240 min.
03																		60 min.
04																		100 min.
05																		20 min. + talk
06																		65 min.
07																		70 min.
08																		70 min.
09																		85 min.
10																		60 min.
11																		75 min.
12																		-
13																		-
14																		-
15																		-
16																		-

※各演目「★印」がついた回は終演後ゲスト・パフォーマンスを予定しております。
 ※各演目「◎印」がついた回は託児サービスがご利用いただけます。(有料:2,000円、要事前予約) 予約お申し込みの締切は各公演日の7日前となります。
 予約・問合せ 075-213-5839 (KYOTO EXPERIMENT事務局) (11:00-20:00)
 ※会場へのアクセスはMAPページ(p72)をご参照ください。

★Post-Performance Talk
 ◎Babysitting Service Available.
 Access: see p72

チケット情報 / TICKET INFORMATION

●KYOTO EXPERIMENTチケットセンター

※11:00-20:00(8/8-9/22は日曜休)

- ・窓口 | 京都芸術センター2F KYOTO EXPERIMENT 事務局内
- ・電話 | 075-213-0820
- ・オンラインチケット(要事前登録) | PC <http://kyoto-ex.jp> MOBILE <http://kyoto-ex.jp/m/>

●京都芸術センター

- ・窓口販売のみ(10:00-20:00)

●チケットぴあ

- ・TEL | 0570-02-9999 ・WEB | <http://pia.jp/t/>

●セブンイレブン

- ・セブンイレブン店舗内マルチコピー機にて受付

KYOTO EXPERIMENTセット券

複数観劇される方へお得なセット券です。公式プログラムの中からご希望のチケットを組み合わせでご観劇ください。

■3演目券 | 7,200円

好きな3演目を選んでご覧いただけます。

[当日購入不可](#) [1演目につき1回のみ](#) [本人のみ有効](#)

■学生3演目券 | 6,000円

学生にお得なセット券。(公演当日、学生証のご提示が必要です。)

[当日購入不可](#) [1演目につき1回のみ](#) [本人のみ有効](#)

■海外作品3演目券 | 6,300円

- ①ザカリー・オバザン
 - ②マルセロ・エヴェリン/デモリション Inc. + ニュークレオ・ド・ディルソル
 - ③ヤニス・マンダフニス/ファブリス・マズリア
- 海外カンパニーによる3作品限定のお得なセット券です。

[当日購入不可](#) [1演目につき1回のみ](#) [本人のみ有効](#)

■フリーパスチケット(公式プログラム有料公演10演目) | 24,000円

公式プログラムのすべてをご堪能いただけます。
(1演目につき1回。KUNIO第1部 第2部、地点2会場それぞれ1回ご覧いただけます。)

[当日購入不可](#) [1演目につき1回のみ](#) [本人のみ有効](#)

取扱＝KYOTO EXPERIMENTチケットセンター

■KUNIO 1日通し券 | 一般 4,500円 / 学生・ユース 3,500円

[当日購入不可](#) [1演目につき1回のみ](#) [本人のみ有効](#)

取扱＝KUNIO公式ウェブサイト | <http://www.kunio.vis.ne.jp>

■フリンジセット券 ユース・学生限定★全演目券 | 10,800円

[1演目につき1回のみ](#)

■フリンジセット券 選べる★3演目券 | 5,400円

取扱＝KYOTO EXPERIMENTチケットセンター(窓口のみ)

〈チケットに関する注意事項〉

- ・年齢により入場を制限させていただく場合がございます。詳細は各公演ページをご覧ください。
- ・主催者の都合により公演中止となる場合をのぞき、ご購入後のキャンセル、日時の変更はできません。ご了承ください。
- ・演出の都合上、開演後、入場を制限させていただく場合がございます。

●KYOTO EXPERIMENT Ticket Center

*11:00-20:00 (Closed Sundays between 8/8-9/22)

- ・Box Office | Kyoto Art Center 2F
- ・TEL | 075-213-0820
- ・Online *Pre-registration required | <http://kyoto-ex.jp>

●Kyoto Art Center

- ・Box Office only *10:00-20:00

●Ticket Pia (Japanese only)

- ・TEL | 0570-02-9999 ・WEB | <http://pia.jp/t/>

●Seven-Eleven (Japanese only)

- ・Available at multifunctional copy machine in the store.

KYOTO EXPERIMENT Coupon Tickets

3 performances coupon tickets are a great deal for those who would like to attend more than one performance. You can combine 3 shows of your choice from our official program.

■3 performances | ¥7,200

You can choose 3 performances of your preference.

[Advance only](#) [Limited one showing of each performance](#) [Verified holder only](#)

■3 performances [for student] | ¥6,000 (ID requires)

Discount coupon tickets for students. (You need to show your student identification cards on the day of the performance.)

[Advance only](#) [Limited one showing of each performance](#) [Verified holder only](#)

■3 international performances | ¥6,300

- ①Zachary Oberzan
- ②Marcelo Evelin/Demolition Inc. + Núcleo Do Dirceu
- ③Ioannis Mandafounis / Fabrice Mazliah

A great deal to see the 3 performances by companies from abroad.

[Advance only](#) [Limited one showing of each performance](#) [Verified holder only](#)

■Free Pass (for all the 10 official programs) | ¥24,000

You can enjoy all the performances from our official program.
(Can be admitted only one show per performance, except for the part 1 and 2 of KUNIO and the performance by Chiten in 2 different venues.)

[Advance only](#) [Limited one showing of each performance](#) [Verified holder only](#)

Available at KYOTO EXPERIMENT Ticket Center

■KUNIO Day Pass | Adult ¥4,500 / Youth (Under 25), Student ¥3,500

[Advance only](#) [Limited one showing of each performance](#) [Verified holder only](#)

Available at KUNIO's website | <http://www.kunio.vis.ne.jp>

■FRINGE Coupon Tickets

Youth (Under 25) and Students Only★All Performances Tickets ¥10,800

Pick Your Favorites★3 Performances Coupon Tickets ¥5,400

Available at KYOTO EXPERIMENT Ticket Center

Note

- ・Some performances have age restrictions. Please refer to the specific performance information for details.
- ・Ticket cannot be refunded or amended except in the case of cancellation of a performance for unforeseen reasons.
- ・Entrance to some performances may be refused after curtain time.

※【自】…全席自由 / Non-Reserved Seat
【指】…全席指定 / Reserved Seat

演目 Title	料金 Price			席種 Seat	チケットぴあ Pコード P-Code
	一般 Adult	ユース・学生 Youth・Student	高校生以下 High School and Younger		
KUNIO KUNIO 09 《エンジェルス・イン・アメリカ》第1部「至福千年紀が近づく」 <i>Angels in America Part 1: Millennium Approaches</i>	¥3,000	¥2,500	¥1,000	【自】	413-901
KUNIO 09 《エンジェルス・イン・アメリカ》第2部「ペレストロイカ」 <i>Angels in America Part 2: Perestroika</i>	¥3,000	¥2,500	¥1,000	【自】	413-902
ザカリー・オバザン Zachary Oberzan 《Your brother. Remember?》 <i>Your brother. Remember?</i>	¥3,000	¥2,500	¥1,000	【自】	413-903
白井剛 / 京都芸術センター「演劇計画2009」 Tsuyoshi Shirai / Kyoto Art Center "Theatre Project 2009" 《静物画 - still life》 <i>still life</i>	¥3,000	¥2,500	¥1,000	【自】	413-904
平田オリザ+石黒浩研究室(大阪大学&ATR石黒浩特別研究室) Oriza Hirata+Hiroshi Ishiguro Laboratory (Osaka University & ATR Hiroshi Ishiguro laboratory) アンドロイド演劇《さようなら》 <i>Android-human theater Sayonara [Good-bye]</i>		¥1,000		【自】	413-905
マルセロ・エヴェリン/デモリション Inc. + ニュークレオ・ド・ディルソル Marcelo Evelin/Demolition Inc. + Núcleo Do Dirceu 《マタドウロ(屠場)》 <i>Matadouro [Slaughterhouse]</i>	¥3,000	¥2,500	¥1,000	【自】	413-906
KIKIKIKIKI 《ちっさいのん、おっさいのん、ふっさいのん》 <i>Chissainon, Okkiinon, Futtoinon [Little, Big and Chubby]</i>	¥2,500	¥2,000	¥1,000	【自】	413-907
笠井 毅 Akira Kasai 《血は特別のジュースだ。》 <i>Blood is a special kind of juice.</i>	¥3,500	¥3,000	¥1,000	【指】	413-908
地点 Chiten 《かもめ》 <i>The Seagull</i>		¥2,000			
				【自】	
		¥3,000	¥2,500		413-910
ヤニス・マンダフニス/ファブリス・マズリア Ioannis Mandafounis/Fabrice Mazliah 《P.A.D.》 <i>P.A.D.</i>	¥3,000	¥2,500	¥1,000	【自】	413-911
石橋義正(キュビキュビ) / 京都創生座 番外編 Yoshimasa Ishibashi [Kyuji Kyuji] / Kyoto Soseiza Extra 《伝統芸能バリエブル》 <i>VARIABLES</i>	¥3,000	¥2,500	¥1,000	【指】	413-912
高嶺格 Tadasu Takamine 展覧会《ジャパン・シンドローム》～step 1 球の裏側 [Exhibition] <i>Japan Syndrome step 1 The other end of the ball</i>		無料 Free		—	—

※一般/ユース・学生券は当日500円up。(KUNIOは当日・前売とも同額)
※ユースは25歳以下の方が対象です。
※ユース・学生、高校生以下チケットをご購入の方は当日、証明書の提示が必要です。
※受付開始は開演の1時間前です。(KUNIOのみ開演45分前。)

* Plus ¥500 for adult and youth / student same day purchases, except KUNIO's performance (same price for advance and same day purchases).
* Youth tickets are under 25.
* ID required for youth / student and high school and younger tickets.
* Box office opens 1h prior to the performance, except for KUNIO's performance (opens 45min. prior to the performance).

KYOTO EXPERIMENT | 京都国際舞台芸術祭 2011 クレジット

主催

京都国際舞台芸術祭実行委員会(京都市、京都芸術センター、公益財団法人京都市芸術文化協会、京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)

共催

アトリエ劇研、立誠・文化のまち運営委員会

提携

ART COMPLEX 1928

協力

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]

協賛

株式会社資生堂

助成

平成23年度文化庁国際芸術交流支援事業

財団法人アサヒビール芸術文化財団

EU・ジャパンフェスト日本委員会

認定

社団法人企業メセナ協議会

京都国際舞台芸術祭実行委員会

委員長

太田耕人(演劇評論家/京都芸術センター運営委員長)

副委員長

森山直人(演劇批評家/京都造形芸術大学教授/京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員)

委員

城本聡美(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課計画推進担当課長)

富永茂樹(公益財団法人京都市芸術文化協会業務執行理事)

渡邊守章(演出家/京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター所長・教授)

監事

池内正貢(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課長)

由里啓子(公益財団法人京都市芸術文化協会事務局長)

顧問

茂山あきら(狂言師/NPO法人京都アーツミーティング理事長)

千宗室(裏千家家元)

平田オリザ(劇作家・演出家/劇団「青年団」主宰)

村井康彦(公益財団法人京都市芸術文化協会理事長)

京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局

プログラム・ディレクター兼事務局長

橋本裕介

事務局

垣脇純子

梶山由香子

門脇俊輔

下田真耶

丸井重樹

広報

多胡真佐子

山本恵子(京都芸術センター)

制作

小倉由佳子

勝治真美(京都芸術センター)

川崎陽子(京都芸術センター)

川原美保(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)

清澤咲子

本郷麻衣

山本麻友美(京都芸術センター)

テクニカル・コーディネーター

大鹿展明

尾崎聡

夏目雅也

インターン

村上翔子

山脇益美

翻訳

板井由紀

マリア・ルシア・コレア

ジャティス・ウォーレン

アンドリュー・エリオット

ドキュメント・コーディネーター

松永大地

デザイン

中村亮太(KRAFTY DESIGN)

ウェブデザイン

FIELD

ロゴデザイン

UMA / design farm

京都国際舞台芸術祭アドバイザーボード

小崎哲哉(編集者/REAL TOKYO)

古後奈緒子(舞踊研究・批評/dance+)

萩原麗子(京都芸術センター)

KYOTO EXPERIMENT | Kyoto International Performing Arts Festival 2011

Organized by Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee (Kyoto City, Kyoto Art Center, Kyoto Arts and Culture Foundation, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design)

Co-Organized by atelier GEKKEN, Rissei/Cultural City Steering Committee, ART COMPLEX 1928, Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]

Sponsored by Shiseido Co.,Ltd.

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2011, Asahi Beer Arts Foundation, EU-Japan Fest Japan Committee

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee

Chairman:

Kojin Ota (Theater Critic / Chairman of Kyoto Art Center Steering Committee)

Vice Chairman:

Naoto Moriyama (Theater Critic / Professor at Kyoto University of Art and Design)

Committee Members:

Satomi Shiromoto (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Unit Head)

Shigeki Tominaga (Executive Board Member of Kyoto Art and Culture Foundation)

Moriaki Watanabe (Theater Director / Director and Professor of Kyoto Performing Arts Center)

Supervisors:

Masatsugu Ikeuchi (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Head)

Keiko Yuri (Secretary-General of Kyoto Arts and Culture Foundation)

Advisors:

Akira Shigeyama (Kyogen Artist / President of NPO Kyoto Arts Meeting)

Soshitsu Sen (Urasenke Grand Tea Master)

Oriza Hirata (Playwright, Theater Director / Director of Seinendan)

Yasuhiko Murai (President of Kyoto Arts and Culture Foundation)

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

Program Director / Executive Director:

Yusuke Hashimoto

Office:

Junko Kakiwaki

Yukako Kajiyama

Shunsuke Kadowaki

Maya Shimoda

Shigeki Marui

Public Relations:

Masako Tago

Keiko Yamamoto (Kyoto Art Center)

Production Coordinators:

Yukako Ogura

Mami Katsuya (Kyoto Art Center)

Yoko Kawasaki (Kyoto Art Center)

Miho Kawahara (Kyoto Performing Arts Center)

Satoko Kiyosawa

Mai Hongo

Mayumi Yamamoto (Kyoto Art Center)

Technical Coordinators:

Nobuaki Oshika

So Ozaki

Masaya Natsume

Inters:

Shoko Murakami

Masumi Yamawaki

Translation:

Yuki Itai

Maria Lucia Correa

Justus Wallen

Andrew Elliott

Document Coordinator:

Daichi Matsunaga

Design:

Ryota Nakamura (KRAFTY DESIGN)

Web Design:

FIELD

Logo Design:

UMA / design farm

Kyoto International Performing Arts Festival Advisory Board

Tetsuya Ozaki (Editor / REAL TOKYO)

Naoko Kogo (Performing Arts Researcher, Critic / dance+)

Reiko Hagihara (Kyoto Art Center)

超京都

現代美術@名勝渉成園 (東本願寺)

2011年11月11日(金) ~ 13日(日)

www.chokyoto.com



GRAND MARBLE
KYOTO

© GRAND MARBLE Corporation. www.grandmarble.com ☎ 0120-62-0628 Tel.075-682-3900



ル・グランマール カフェ クラッセ

Tel. 075-257-6877

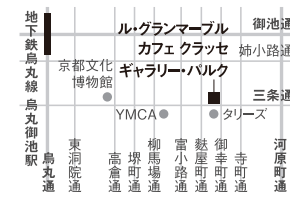
京都市中京区三条通御幸町北西角三条ありもとビル1F



Gallery P A R C ギャラリー・パルク

Tel. 075-231-0706

京都市中京区三条通御幸町北西角三条ありもとビル2F
[ル・グランマール カフェ クラッセ店舗内2F]



阪急河原町駅より徒歩10分 / 三条京阪駅より徒歩10分 / 地下鉄東西線京都市役所前駅より徒歩3分





ロゴについて

KYOTO EXPERIMENTのキーワードである「出会い / 衝突 / 対話」がぶつかり合い、外へ広がろうとする様子をビジュアル化したロゴ。600種類を超えるパターンがあり、進化する創造の場を表現している。



KYOTO EXPERIMENT's logo is a visual representation of the confrontation and expansion of its three keywords: encounter, collision, and dialogue. It is a design with more than 600 forms, which stand for the evolution of the creative spaces.



logo design: UMA / design farm

KYOTO EXPERIMENT | 京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局
Kyoto International Performing Arts Festival
Executive Committee Office

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2 京都芸術センター内
Kyoto Art Center, 546-2, Yamafushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
TEL | +81 (0)75-213-5839 E-MAIL | info@kyoto-ex.jp
<http://kyoto-ex.jp>

発行日 | 2011年9月5日
Published Sep. 5, 2011

デザイン : 中村亮太 (KRAFTY DESIGN)
編集 : 松永大地、山本恵子 (京都芸術センター)
図版 (p2-3, p12-13, p58-59, p70-71, p82-83) : 中居真理
印刷・製本 : 株式会社 スイッチ. ティフ

Design: Ryota Nakamura (KRAFTY DESIGN)
Edit: Daichi Matsunaga, Keiko Yamamoto (Kyoto Art Center)
Images (p2-3, p12-13, p58-59, p70-71, p82-83): Mari Nakai
Print: Switch. tiff co.,ltd.